

(題字松陰先生筆跡擴大攝影)

昭和九年十二月發行

# 校友會雜誌

第參拾參號  
創立參拾五周年記念號

山口縣立萩中學校校友會

昭和九年十二月發行

# 校友會雜誌

第參拾參號  
創立參拾五周年記念號

山口縣立萩中學校校友會

口 繪  
教育勅語漢發四十五周年に際して 會長 河内 才三  
井上大将講話 特別會員 山本 博  
考古學上より見たる長門國 特別會員 森本 徳雄  
めくら、つんぼ、人間 特別會員 兒山 茂  
日本數學史概観 特別會員 岩本 益雄  
頓 智 特別會員 玉井 世履  
對數比例部分に就いて 特別會員 玉井 世履

創立三十五周年記念記事  
記念式、式辭、祝辭、祝電、表彰狀、記念大運動會……(四〇)

室 放 送

偶 感…… 會長 河内 才三(嬰)  
前進前進また前進…… 特別會員 深町 少佐(嬰)  
三十五周年を迎へて…… 特別會員 久保 治之(四七)  
所 感…… 特別會員 岡部 常一(四八)  
三十五周年に因みて…… 特別會員 津村 義男(四八)  
本校三十五周年を迎へて…… 特別會員 兒山 茂(四八)  
所 感…… 特別會員 玉井 世履(四九)  
追 想…… 特別會員 河野 通毅(四九)  
所 感…… 特別會員 田中 秀一(五〇)  
歩 感…… 特別會員 齋藤 章(五〇)  
所 感…… 特別會員 東 久雄(五一)  
チオメトリ及びチヨメの起原に就いて…… 特別會員 岩本 益雄(五一)  
釣の醍醐味…… 特別會員 山本 博(五一)  
蛙の教…… 特別會員 安部 豊明(五二)  
所 感…… 特別會員 福田 照夫(五二)  
偶 感…… 特別會員 山川 恒久(五二)  
祈 り…… 特別會員 山口 季吉(五三)  
レコード…… 特別會員 池田 文雄(五三)  
川 柳…… 特別會員 尾崎 信一(五四)  
堀内の地理的断片二三…… 特別會員 岡庭 秀男(五四)  
創立三十五周年と緑化主義…… 特別會員 岡崎 正信(五五)  
所 感…… 特別會員 森本 徳雄(五六)  
所 感…… 特別會員 三上 純象(五六)  
偶 感…… 特別會員 三輪 昂(五七)  
不 如 感…… 特別會員 野田淳一郎(五七)  
所 感…… 特別會員 須子 五郎(五七)

所 感…… 特別會員 中尾 彰(五七)  
三十五年前の思ひ出…… 特別會員 木津谷泰夫(五八)  
開校三十五周年所感…… 特別會員 八木澤 元(五八)  
鬚の自叙傳…… 特別會員 村岡 徹介(五九)  
繪畫は單純化へ…… 特別會員 水沼 兼雄(五九)  
いが栗…… 特別會員 久永 祐藏(六〇)

三十五周年を迎へて…… 一年 田中 寛(六一)  
同…… 同 森重 龍馬(六一)  
同…… 同 古谷佐一郎(六二)  
創立三十五周年記念日を迎へて…… 二年 末永太一郎(六三)  
同…… 同 日野 公德(六三)  
同…… 同 大田 頼久(六三)  
三十五周年記念日を迎へて…… 三年 小河 博(六四)  
同…… 同 梅屋 薫(六四)  
同…… 同 日溪 頼負(六五)  
創立三十五周年記念日を迎ふるに當りて…… 四年 福水 義晴(六五)  
同…… 同 河村 定一(六六)  
同…… 同 吉屋 竹治(六六)  
開校三十五周年大運動會…… 五年 西本 實(六六)  
開校三十五周年記念式…… 湯野 一二(六六)  
開校三十五周年記念大運動會…… 湯浅 利夫(六六)

生 徒 作 品

入學の喜び…… 一年 吉村 弘章(七〇)  
春はゆく…… 同 内山 博(七〇)  
春はゆく…… 同 小野 七太(七一)  
夕 立…… 同 吉富 敏郎(七一)  
新 涼…… 同 山田 松華(七二)  
秋…… 同 山本 一夫(七三)  
新 涼…… 同 森重 龍馬(七三)  
叱られて…… 同 河村 康一(七三)  
秋を歩む…… 同 廣瀬 昇(七三)  
秋 祭…… 同 佐々木 嫂太(七四)  
秋を聞く…… 同 白石 明(七四)  
秋を歩む…… 同 吉田 成三(七五)  
新 涼…… 同 杉山 誠(七五)  
秋に思ふ…… 同 中村大十郎(七五)  
秋のけはい…… 同 吉村 源治(七五)

春は土から	二年	久保 一郎(六)
春は土から	同年	吉田 宗正(七)
秋静か	同	藤田 坦(七)
美しき空	同	小原 弘行(七)
静かなる秋の姿	同	澤本 良秋(七)
林檎	同	田中 大資(七)
港	同	平野 末雄(七)
臺山	同	三原 莊作(七)
静かな秋の姿	同	信國 基堅(八)
その前日	同	松浦 幹雄(八)
静かなる秋の姿	同	土屋 康紀(八)
秋静か	同	久芳 一人(八)
静かなる秋の姿	同	河内 壽昭(八)
秋静か	同	綿木 勤(八)
静かなる秋の姿	同	阿武 久平(八)
紅葉の秋	三年	中本 茂(八)
暴風雨見舞の文	同	秋山 實(八)
初秋の朝	同	岡崎 寛人(八)
解纜	同	小野 博康(八)
忘れ得ぬ思ひ出	同	津村 對介(八)
秋	同	野村 晃(八)
秋の調べ	同	山根 忠雄(八)
旅行	同	高崎 武夫(八)
日記の一節	同	吉村 重和(八)
秋雨	同	岡村大 一郎(八)
海	同	茂刈 靖一(八)
秋水浴	同	小橋安次郎(八)
海水浴	同	水津 要人(八)
魚釣り	同	竹内 周二(八)
初秋	同	田村 正好(八)
剣と筆	四年	安野 巖(八)
現代と英雄	同	山中 健一(九)
上級生の覚悟	同	貞本 尚(九)
太平洋	同	吉松 陽(九)
科学の力	同	福田 寛雄(九)
剣と筆	同	石村 豊徳(九)
太平洋	同	杉原 大泰(九)
太平洋	同	田村 精作(九)
満蒙發展策	同	能美 陽一(九)
必勝の信念	五年	横山 圭治(九)
眼鏡先生の講演を聴く	同	西本 實(九)
海野先生の講演を聴く	同	松尾美男(一〇)
我が郷土	同	本石獨芳(一〇)

うら盆	同	松浦 二郎(一〇)
働いた日	同	田邊 利彦(一〇)
旅行の一日	同	能美 忠廣(一〇)
吾が郷土	同	世良 百之(一〇)
海に遊ぶ	同	横田十久夫(一〇)

卒業生通信

東京外語を語る	同校	伊東 清次(一〇)
広島高師を語る	同校	中野 茂(一〇)
江田島の聖地より	海兵校	藤井 清規(一〇)
高松高商を語る	同校	近藤 信一(一〇)
東京高藝を語る	同校	田村 義輔(一一)
大阪商大高商部を語る	同校	大塚 均(一一)
高岡高商を語る	同校	窪田 熙(一一)
名古屋高工を語る	同校	服部 正吾(一一)
京阪地方修學旅行おぼえがき	四年	大谷 敬信(一一)
旅のグリンパス	同	S.T生(一一)
	同	田村 克介(一一)
	同	安野 巖(一一)
	同	福永 義晴(一一)
	同	河村 定一(一一)
	同	香川 朝政(一一)
	同	河村 定一(一一)
	同	吉松 陽(一一)
	同	浅原 昌佑(一一)
	同	刀彌彌太郎(一一)
	同	浅野 力(一一)
	同	三戸 開夫(一一)
	同	山縣 憲三(一一)
	同	野村 正次(一一)

校報

- ◆卒業式 ◆賞品授與式 ◆共研會設置 ◆先生の更迭 ◆校誌

校友會報

- ◆書道部 ◆書道部 ◆地歴部 ◆理科部 ◆國防部 ◆競技部 ◆蹴球部 ◆水泳部 ◆柔道部 ◆剣道部 ◆辯論部 ◆校友會役員表 ◆昭和八年度校友會費收支決算報告

附録

噓江本少佐 履歷

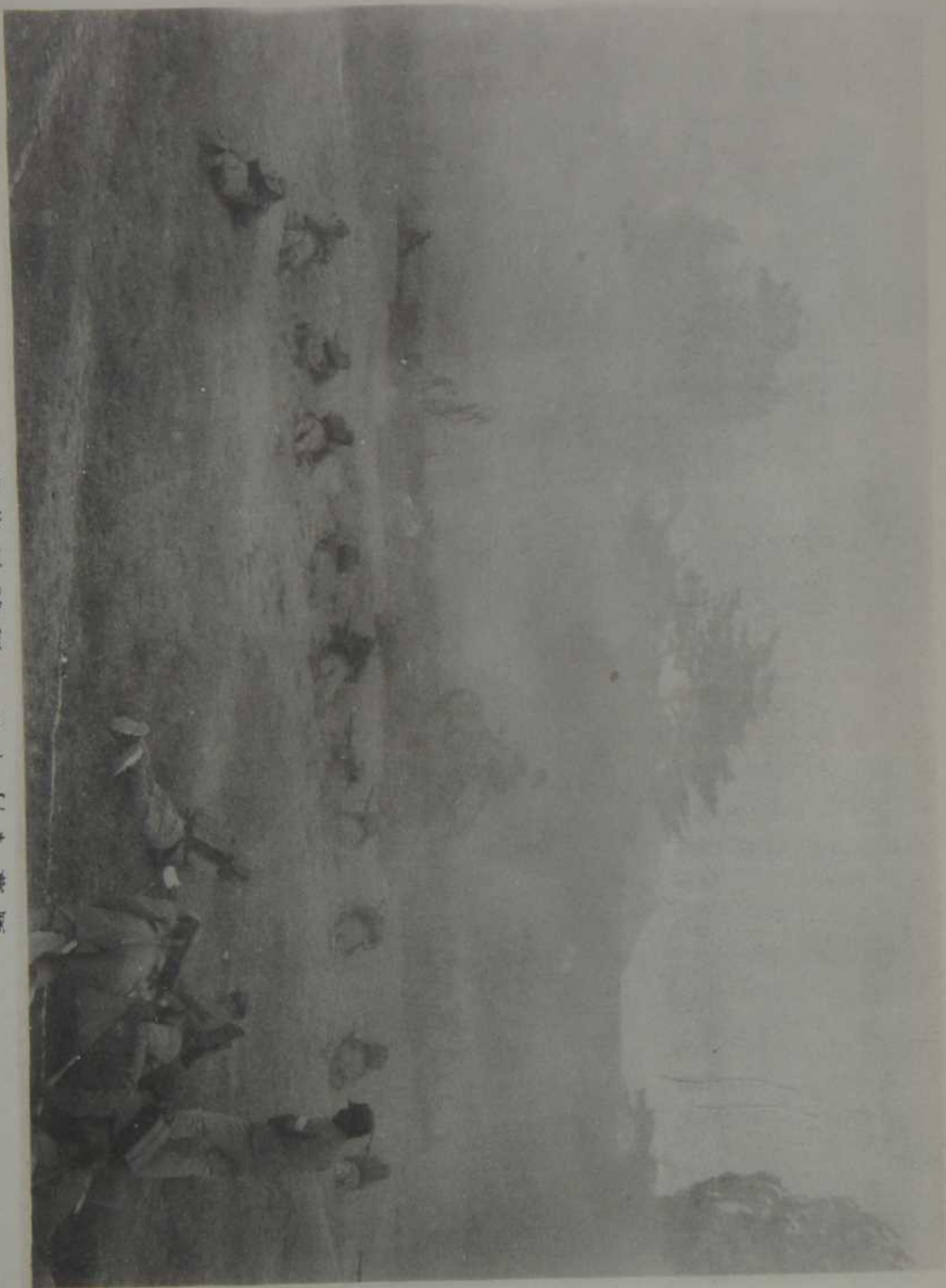


（開式の長校學） 式念記年周五十三立創

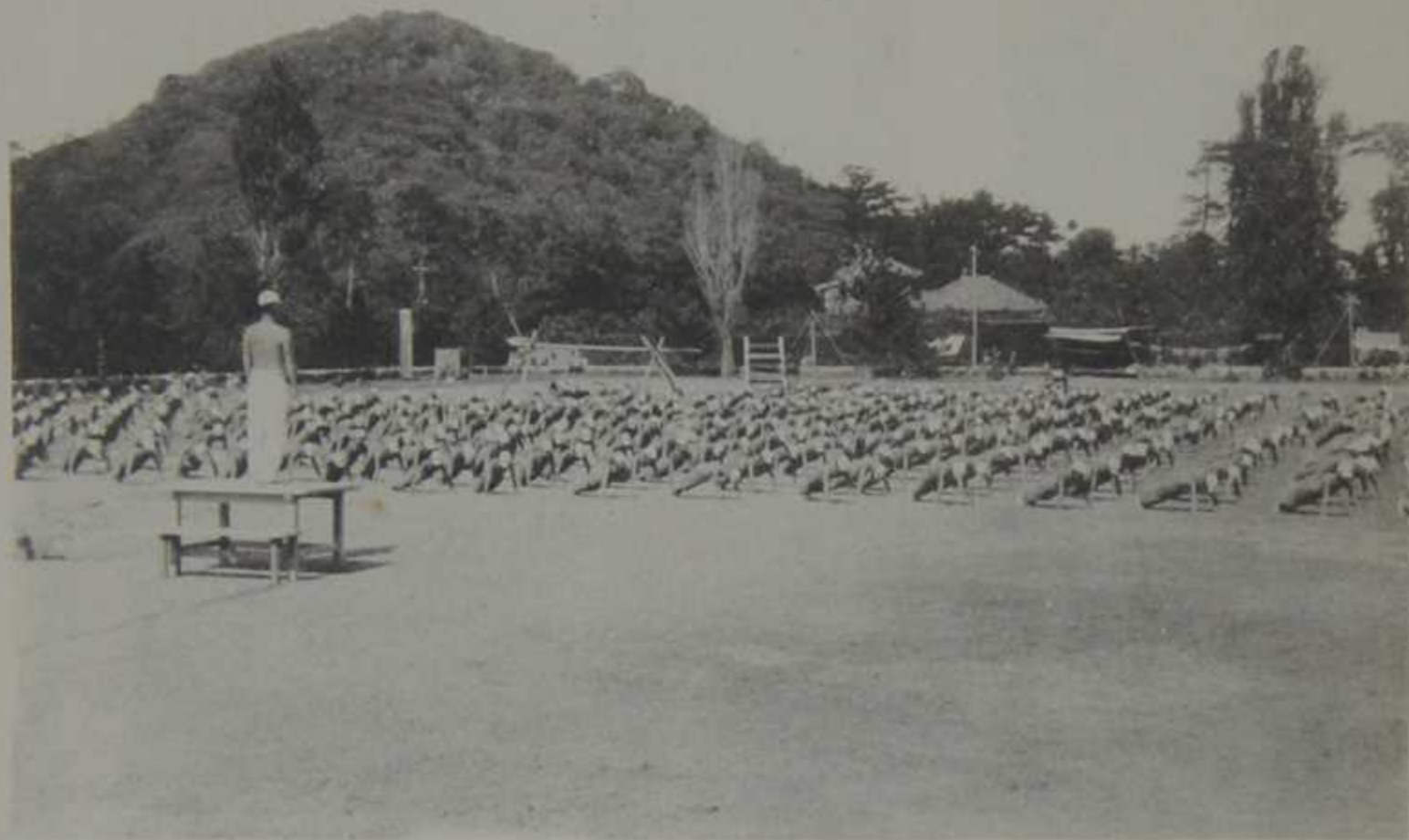
萩中學校々歌

<p>思學協碎レ へび戮けンズ 久の和す離の 遠庭會れ結 ににてはすべる 傳てかそむ日 はそしむかかけ 言しこき散は く業御ら強 さも言ぬく</p>	<p>第三協同</p>	<p>盡人源莞強 せ道遠て者 忠擁き止の 烈護きむての 皇の流ふ閃 國の務は肝だく の御負絶に世 稜ひえあら 威ひすばも</p>	<p>第二義勇</p>	<p>守松表文徒 れを面のに 質粧の林は 實ふ飾に立 天地雪ははし にも儂は學 愧一きくの ぬ時頼も道 實</p>
--	-------------	--	-------------	---

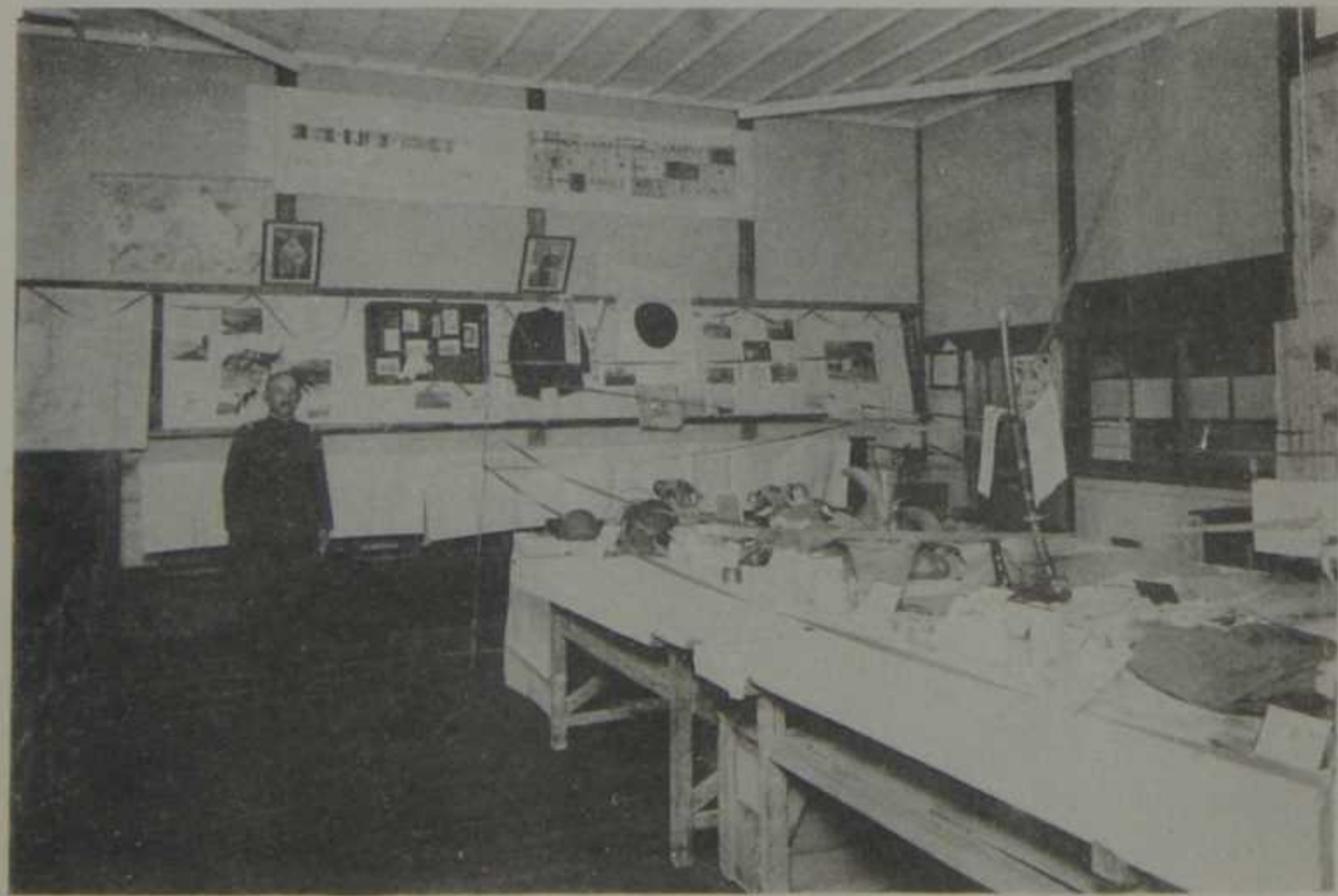
<p>百み同親千 萬か心和睦 一の斷のの 心御金力嚴 その爲はぞ碎 の外古偉い 旨に賢大ば ひはのの輕 ろあら訓力し</p>	<p>天日理平正 壤本想和義 無男のの光 窮子深願は にのきそ隠 輝力勇貫れ くを氣徹も ま展飢すや でべえすべ にむすきす</p>	<p>光本心實徒 明のをに 正縁の結は 大は誠ば讀 これ千ぞばま よも貴か何千 出消きは巻 でえせはの むす實む書</p>
--	--	---



戰役討賊匪一でし國を慕望。



操體裸會動運大念記

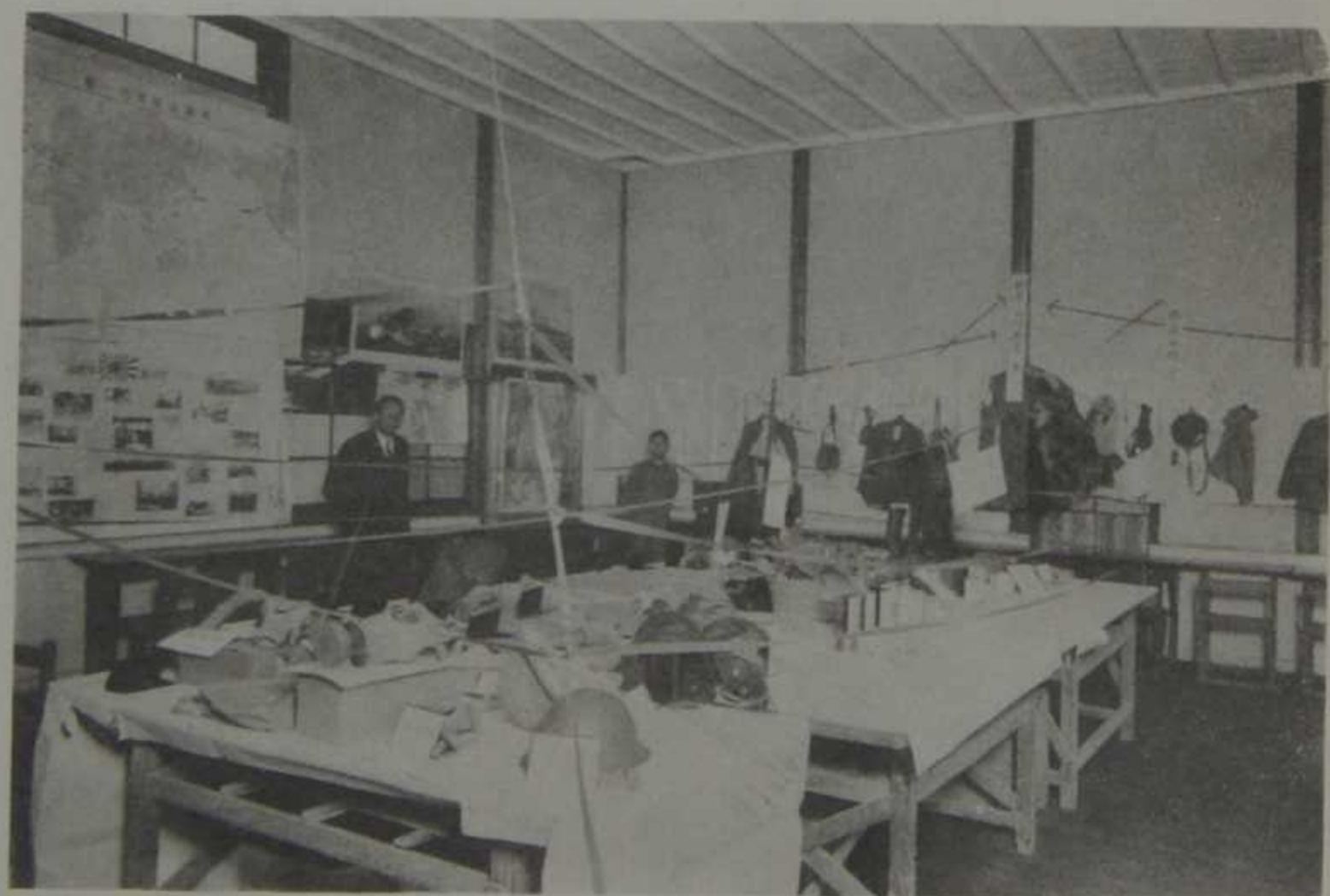


(一) 室防國會覽展念記



品作秀優徒生會覽展念記

圖畫(一年 田中貞雄) 軍艦模型庫(澤本良秋)  
地圖模型(三年 小橋安次郎) 習字(三年 杉山巖)



(二) 空防國會覽展念記





教育勅語渙發四十五周年に際して

會長 河 内 才 三

顧みれば、教育勅語が渙發せられ以來、時は流れて既に四十五年に及び、その間我が國の進歩發達は、世界の驚異である。然るに、一方世界の趨勢は日々に流轉變化し、特に我が國の國際關係は、非常なる難局に遭遇し、非常時の非常時と稱せられて居る。此非常時に直面し、如何にせば此難局を打開し得べきか。個人として又國民として、如何なる理想を描き如何なる覺悟を以て進むべきか。

英國詩人シェレーは、雲雀に寄するの詩に「無心なる雲雀が長閑なる春の野に於て前後の分別もなく唯だ利那々々の喜を聲を限りに唄ひつゝ、上空高く翔り行く幸福に較べて、人生に思考すべきことの多きを嘆し、我等は常に前を望み後を顧み、現實になきものに憧れて、これを求めんとす」と謡つてゐる。その意味は、人生と謂ふものは、苦勞が多い、常に苦痛に悩まれて幸福が得られない。彼の雲雀の如く喜の聲を限りに唄ひつゝ、此世を暮したいと云ふのである。

何人も暖かき春の日に、鶯が美しい聲で啼くのを聴いたり、頬白が樹の梢にとまつて樂しげに聲を限りに囀るのを聴くと、何人も同様の感を抱くであらう。

然し人間は禽鳥の如く利那々に活くべきものでない。過去を顧み、將來を察し、現實になきものに憧れて、之を求め

んとする意識的存在である。これが人間の本性である。過去を現實に活かしつゝ將來に伸びることにより、人間の向上があり進化がある。こゝに人類の文化が生れる。瞬間々々刹那々々にのみ活き、一時の喜怒哀樂により支配され、一時の衝動にのみ左右せらるるの人は、人間の退歩であり、墮落である。事志と違ひ、物わが心に戻るとき、遂にこれに屈するのは自暴自棄である。これ抛擲である。抛擲は死と同じく、人間最後の措置である。あらゆる困難辛苦に打克ち、克己忍耐し、前途に光明を認め、成功の彼岸に到達することが、人間としての發展である。人は意識的存在者としての自覚がなければならぬ。自己の長所や缺點を反省し、過去の經驗成功失敗を顧み、これを現實に活かし、理想の途を辿らなければならぬ。刹那々々にのみ活きんとするのは、人間以外の動物の活き方である。

國民としても、これと同様で、國民生活を營むに當り、何等の理想もなく、徒らに外來思想に動され、嘗に外國の文物に心酔するは、恰も雲雀が何等分別もなく、思慮もなく、刹那々々の喜を、聲を限りに唄ひつゝ、上空高く翔け上ると同様である。

明治十五六年から、二十二、三年に掛けての日本人は、全くこれと同様であつた。西洋の文物制度や風俗習慣に心酔し、日本の美風良俗や、眞の精神までも棄てんとしたのであつた。

そこで、明治大帝は、非常に御軫念あらせられて、明治二十三年十月三十日、此の優渥なる御勅語を渙發せられ、國民としての理想を御示しになり、國民的自覺を御促しになつたのである。換言すれば、我國の本質、我が大和民族の個性、日本精神、國民道徳を明示され給うたのである。御勅語に御示しになつてある我が國の本質と、我が大和民族の個性は、如實に我が歴史に現はれ、光輝ある三千年の國史を織り成して居る。

御勅語に「我臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ」と仰せられてある。即ち我が國民は祖先以來忠孝を重んじ萬民その心を一にして、世々厥の美を濟したのである。

又「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ナル臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン」と宣はせらる。即ち事變に遭遇せば、義勇公に奉じ、天壤無窮の皇運を扶翼し奉ることが、我が祖先以來の遺風である。即ち傳統的の精神である。これが即ち我が國民性の本質である。我が大和民族の個性である。これに依つて、光輝ある我が國の歴史は色彩られてある。常に我等はこの國史の成跡を回顧し、これを現實に活かし、將來に備へなければならぬ。

教育勅語渙發以來、我が國は、清國と戦ひ、これを敗り、次て露國を膺懲し、最近滿洲事變上海事件に於て東洋平和の爲めあらゆる犠牲を拂ひたるのは、我が國民の此の本質、我が大和民族の此の個性の發現である。

今や我が國は、先きに新滿洲國を承認し、國際聯盟を離脱するの已むなきに至り、國際上非常時に直面して居る。

此時に際し、我等國民は、利那的の生活を排し、確乎不拔克く御勅語の聖旨を奉戴し、萬民その心を一にし、厥の美をなし祖先の遺風を顯彰し、この難局を打開し、我國の歴史をして益々光輝あらしめなければならぬ。

## 井上幾太郎大將講話

(梗概)

(昭和九年四月二十日 本校講堂ニ於テ)

四

私は以前から郷里の生徒諸君が如何に勉強して居られるかを見たいと思つておりましたが、今回若許の暇を得、今日諸君が元氣潑潑としてこの一堂に集つてをられるのを見まして、まことに愉快に堪えません。

諸君も御存知のやうに國家は非常時に臨んでをります。この國家の將來を擔ふべきは若い諸君であるといふことをよく自覺して貰ひたい。日本は非常に強くなつた爲に世界から憎まれるやうになつた。小さい子供が頭を撫でられて、東を向けと言はれると東を、西を向けと言はれれば西を向くといふやうに、他人の言ひなり次第になつてゐた時は、皆から可愛がられて居るが、それが大きくなつて、自分の思ふ處を主張するやうになり、東を向くにも理由なしには向かぬと言ふやうになると、彼奴は生意氣だといふことになるやうなものである。

滿洲の問題にしても、日本は滿洲に對して信ずるところを實行せずには居られなかつたのである。又近時日本の産業は大いに進歩發達して、日本製品は世界の津々浦々にまで輸出されるやうになつた。その爲に日本の發展を嫉む國々は、日本に壓迫を加へやうとしてゐるのが現状である。軍縮問題にても、五五三の比率を強制する。今、五年生と四年生と相撲をとらしてみたらば、どちらが勝つともわからぬが、五年生と一年生とやらしてみたら、一年生が負けることは、きまつてゐる。そのやうに、五對三では負けることはきまつて居るのである。そこで次の軍縮會議に於いては、この比率を日本は承認しないかも知れぬ。とすれば勢どんなことになるとも限らぬ。又日本製品の進出に諸國が壓迫を加へることからしても、戦争が生じないとも限らぬ。經濟上の問題から、戦争を惹起した例は歴史上に澤山にある。

かうした非常時にある國家が高い費用をかけて、諸君を教育してゐるのは、全く次の立派な國民を養成せんが爲である。何も諸君を唯々單に立身出世させるためではない。

私のところへ士官學校の生徒が來て、今日は一つ閣下にお尋ねに來たから、その解答をして貰ひたいと言ふ。そこで何かと言ふと、閣下は貧しい家から出られて、大將にまでなられたのであるが、大將になる道はどんな道であるかを聞かして欲しいと言ふのであつた。

そこで自分が答へて言ふには、自分は勿論大將になるべき器ではないが、とも角大將になつたのに就いては、別段最初から大將にならうと心掛けたからではない。士官學校に居る時には、學校の成績をよくしようとなつた。學校を出て少尉に任官すれば、その少尉の務めをよく盡くさうと努力した。中隊長になれば自分の中隊を何とかして良い中隊にしようと思ひ、聯隊長になれば自分の聯隊を立派にしようと思つた。尤も、思つただけであつて、少しも良い中隊にも聯隊にもすることは出来なかつたのであるが、このやうにして自分の現在の務を最善に盡くすことを目的としてやつてきたのであつて、大將にならうとは毛頭考へたことはなかつたと話して聞かせたのであつた。

しかし、私は後で考へてみるのに、士官學校の生徒達が、大將になる近道でもあるやうに考へて、他人を押しつけてでも、自分だけ先に成功し出世してやらうと思ひ、自分に「大將になる道」を尋ねに來たのではないかと大いに遺憾に思つたのであります。

今時の青少年は皆利己主義個人主義である。他人よりも自分だけが、抜け駆けの高名をたてようとする。そして皆が、大將になり、大金持にならうと考へてゐる。しかしそんなことでは國家は立つてゆかない。私の舊友には百姓をして一生を暮して居る人もある。そんな人に較べて、私が偉いとはちつとも考へられない。その人は農業を以て、國家につくしてゐるのに、自分は大將としては、何も國家につくしてゐないのであるから、國民は各々自分の仕事を最善につくすのが、偉いのであり國家のためになるのである。

私はこの講堂に入りまして、先づ感激したことは乃木將軍のお寫眞が懸つてゐることでありませう。乃木將軍はほんとうに「自分」といふことを少しも考へず、唯々國家のためばかり考へて居られたお方である。一つ／＼の行ひには時に失敗もあり、結果のよくなかつたこともあるであらうが、終始一貫「私」といふものが無かつたことは、將軍の尊敬すべきところである。

近時の青年は軍人が成功しやすいと言ふことになると、皆軍人志願になる。官吏がいゝと言ふことになると、皆が官吏の門に押し寄せる。さうして、他人より立身出征をしようと焦せるばかりで、ほんとうに、自分の職分を以て國家に報じようといふ氣がない。これでは決して自分自身も成功出来ないのである。この點をよく考へて、自分の能力に應じ、自分の職分に努力し、利己主義は考へを棄て、我が務をつくすことが、即ち國家のためになるのだと思つて、勉強されることを希望します。

六

## 考古學上より見たる長門國

——(特に大井村・見島村出土遺物を中心として)——

は し が だ  
特別會員 山 本 博

郷土史研究の波に乗つて、考古學的といふ一種獨特の見方から郷土の、特に長門の古代文化を回顧して見たい。その成果に對する毀譽褒貶がどうあらうと、私は私の考古眼に映じたまゝの古代文化姿相を述べさへすれば、兎に角此の方面の研究に一つの曙光を投じたことに成る、と言つても私の成果が若し誤つてゐたとすれば、再び識を練つて前説を破毀することに逡巡しない、それだけの學的良心と勇氣は勿論持つてゐる。

何千年かの昔、玄海の波濤を越えて我が郷土に異彩ある文化の洗禮を施して呉れた大陸文化の何物かが、現在我が郷土に在りながら、殆んど無關心の状態に捨てられてあることも決して妙しとしない。それらの遺物を見出し、手にとつて眺める機會の多い私には、時折その遺物を持つたまゝ、これをどうして實用に供したらうかと考へこむことが多い。その意味は、どこにこれを用ひたかといふ使用方面の問題より、古代人は——それが我々の祖先であらうと、渡來者であらうと——どんな風に手に持つてどういふ身振りで用ひたかといふ實際の動作の方が私の心を惹きつける。美しかつたであらう鈴のついた鏡について考へる時にも、古代人はこれを多分腰につけて、或は手に持つて、足どり面白く舞つたであらうに、と考へてゐると、その手、その足、その顔などが考へ出されさうで、言ひ知れない懐かしさを感じ、私の心は常にその遺物を通して遙かの古代に遊ぶことが多い。この想察、この夢遊病的精神遊離は、しかしながら、我々考古學徒に與へられた一つの楽しい特典でなければならぬ。斯うした回顧と想察が、屢古代人の生活環境、地的環境をすら考へ出さしめる。想ひ出すだけに懐かしい古き世の人々の生活とその文化、私は特にそのうちから片鱗を抜き出して、大井村の古墳文化、見島村の古墳文化について語つて見たい。

七

一、大井村圓光寺古墳出土の柄頭とその年代

考古學と鐵道工事、道路工事、耕地開拓整理、山林開發等は最も仲の良い間柄である。我が考古學が常に斯うした近代的人口過剰に依る勞作に鞭撻されて、その識見を廣めた例は枚擧に遑がない。大井村から見出された古墳遺物も正にその實證の一つである。

小串線・美禰線が合致した正明市驛から更に延長されてこの大井村にも鐵道が敷かれ、驛が設けられた時、我々の側から言へば極めて貴重な遺跡が一箇所破壊されてしまつた、その破壊が、同時に大井古代文化の一端をさらけ出したものではあつた、それが即ち大井驛前の「圓光寺古墳」と呼ばれるものである。

この古墳について逸早く「考古學雜誌」(第二十卷第一號)に「防長通信」として報道された弘津史文氏の功勞が考へ出される。私はその頃末だ當地に来てゐなかつたから弘津氏の報道を読み、そして大井古代文化の一端を覗つたに過ぎなかつたが、今や親しく遺物に接し、遺跡を尋ね得たに當り、それらの文化を持つた古代に於ける大井村を明らかにすべき義務を感じてゐる。

昭和四年九月六日、鐵道線路用地として同地の水津元助氏宅地に基礎工事が施されたとき、偶然にも長さ十二尺ばかりの組合式石棺が見出され、棺底には平石を敷きその上に丸い石を置いてあつた。その棺内の東北の一部から、以下問題にしようとする金銅製環頭太刀の柄頭三箇、その他金銅耳環二箇、刀劍柄部純金製裝飾二組分、水晶曲玉二箇、瑪瑙曲玉一箇、碧玉曲玉一箇、碧玉管玉一箇、鐵鏃若干、祝部土器片等が見出されたのである。第一圖は萩市役所藤本瀧江氏所藏の「圓光寺古墳」發掘當時の寫眞であるが、同氏の好意に依り特に此處へ復寫することが出來た。

この古墳は既に久しき以前上部の封土がとり去られてゐたと見え發掘の當時は普通の古墳に見られる如き顯著な封土は持つてゐなかつたと云はれてゐる。しかし現在でも心して見るならば、この古墳のあつた地點が附近の田圃より稍高く成

つてゐるのを知るであらう。いつの頃とも知らぬ間に封土が少しづつ取り去られてしまつたものかもしれない。

第一圖 大井村圓光寺古墳



昭和七年の初夏、初めて大井村を訪ね右の遺物を大井尋常高等小學校にて見た時、これらの遺物が餘ほど高級者の所有品に屬することを知つた。これに刺戟を得て爾來當村を訪問し他の遺蹟を求むること數十回に達したがその間八幡社境内に彌生式遺蹟を見出し、此處で豊富な遺物を採集することが出來た。その一端は「考古學雜誌」(第二十三卷第九號)に「長門國秋吉村の彌生式遺蹟と二三の遺蹟」として未文に報道し、續いて同誌(第二十四卷第一號)に「長門國大井村彌生の生式遺蹟」として續報を掲げ更に近く第三回の發表を同誌に試みんとさへ企てゝゐるほど興味ある石器時代遺蹟を見出してゐる。この事實と圓光寺古墳並に他の二三の墳跡を綜合して考へるに大井村には石器時代以降古墳時代に亘る遺物の存在が明らかであり、その考古學的地位の忽せに出來ないことを物語つてゐる。

阿武郡に關する限りの古典を見るに、概ね今の阿武郡を中心とする地域を支配したと考へらるる、阿武國造の初見は景行紀四年の條

に「日向髮長大田根、生日向鬘津彦皇子、是阿牟君之始祖也」とあるの外、舊事本紀に依れば卷十の國造本紀に阿武國造として「日向日代朝御世、神魂命十世孫味波波命定賜國造」と見え、書紀と舊事本紀の所傳に異なる所はあるが、兩傳共

にその始祖の出現を景行朝に求めてゐることは一致する。

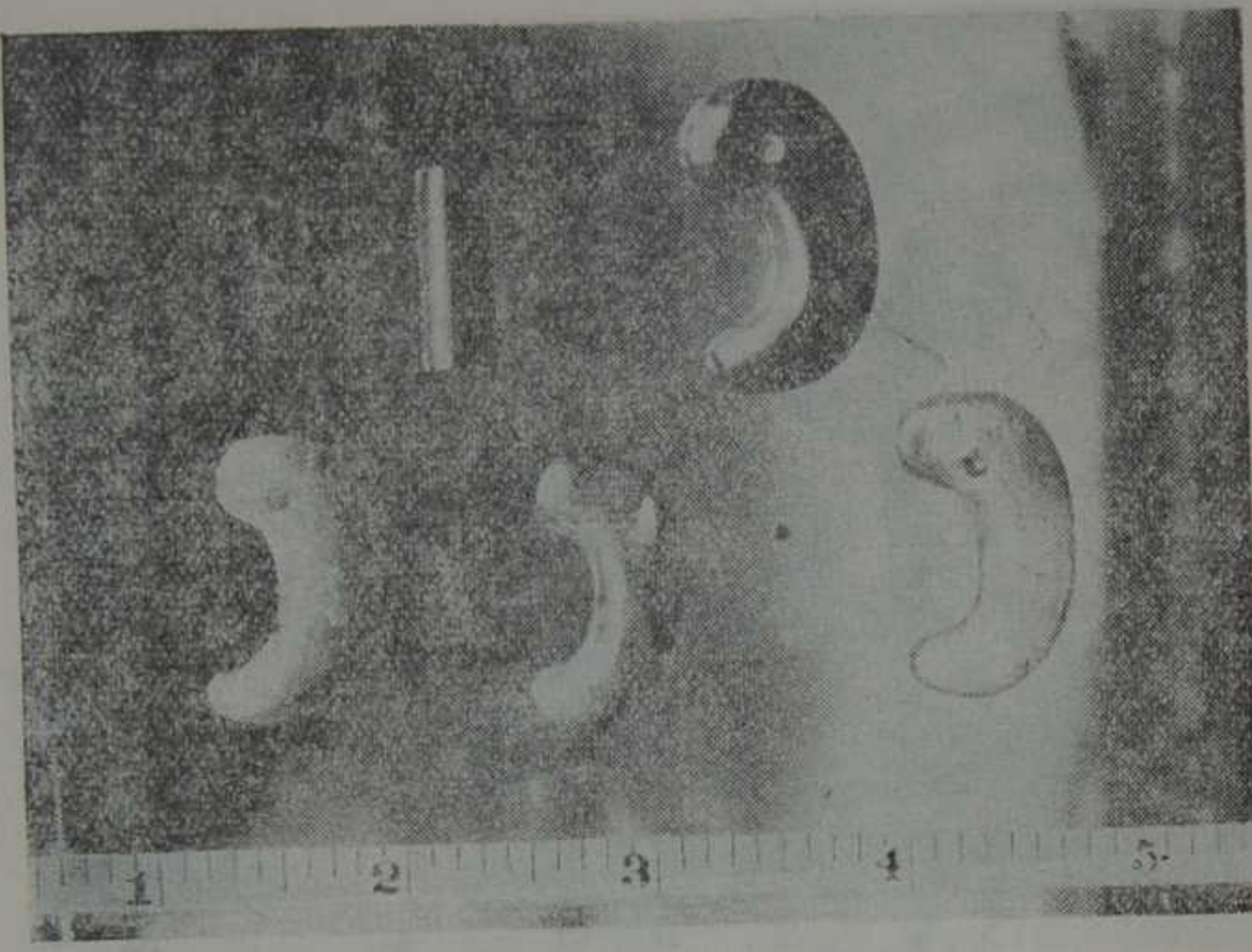
皇子を派遣土着せしめて、即ち「別君」を以て或る地方の政治的中心を掌らしめたことは、草創の歴史に於て屢々見る所であり、阿武の例も亦その一つである。西日本の古代史を按ずるに、特に神代より神武天皇までの説話を除外すれば、崇神朝以前に史傳史實を求め得る地方は殆んどない。考古學上幾多の遺跡遺物を抱蔵する九州に於てさへ、神武天皇御東征以後崇神天皇までの事蹟は殆んど何れにも求め難い、古事記然り、書紀然り、風土記に於ても亦同様である。この事實はまた我が郷土に於ても同様であつた。

崇神朝以降數代の皇室は、それ自からを中心とする東奔西走の時代であり、新日本建設の時代でもあつた。まづろはぬものどもの爲めに斯くも御親征を屢ならしめた例は我が史實に決して多くは見られない。況んや皇室の枝葉である。「別君」が、率先して邊土の政治、經濟、文化の中心と成られんが爲めには、先づそれ自身皇室の人柱と成られねばならなかつた。斯くの如き時代を、皇威の發展時代とは云ふが、同時に新日本建設の時代であるとも云ふことが出来る。大井村も亦この時期に於て中央文化と交渉を保つ事が出来たと考へ得る。

大井村には今一つ顯著な古墳が驛前の突當り右寄りの丘陵に在つて、俚人これを穴觀音と稱してゐるが、前者は平地へ造られた堅穴式たるに反し、これは丘陵を利用した横穴式である。穴觀音古墳は既に古く盜掘され、その遺物を全然求めたことは出来ないが、營造規模の雄大なるより見ればこれも貴人の奥津城と見なければならぬ。とは云へ私は爰で古墳形式を論じ、それを基として圓光寺古墳出土遺物の年代に及ぶべきであることを知つてゐるが、屢無味乾燥と成ることを恐れて、主として遺物のみについて語ることゝした。結果に於ては同じであるから差支へないであらう。

圓光寺古墳出土品のうち環頭太刀柄頭以外は他の多くの古墳にも屢見る所であつて敢て珍としない。従つて柄頭のみを中心として考へよう。第二圖は出土遺物の一部玉類を示す、第三圖は問題の寫眞であるが、この二つも藤本氏の好意に依

り貸與されたものである。  
我國に於けるこの種の類品を見るに



第二圖 圓光寺古墳出土品の一部

- 1、單に環のみのもの——素環式
  - 2、環中に龍を入れたもの——龍頭環式
  - 3、環中に鳳凰を入れたもの——鳳頭環式
  - 4、環中に獸首を入れたもの——獸首環式
- の別があり、2のうちに單龍式と雙龍式があり、4は往々獅咬式のものを見る。圓光寺古墳例は三つとも單龍式に屬してゐる。今第三圖及び第四圖に依つてその特徴を見るに、第三圖向つて左端は單龍の口に珠を銜むの狀を呈し、中央と右端は珠を銜まない。この二者は稍大小の差はあるが、製作技巧環周の配紋殆んど一致し、左端のみは環周の配紋頗る精緻にして、龍頭の澄澗たる龍身の宛轉たるの巧に表現し、而して三者ともに環周に向つて龍身の長きをめぐらして環とし、水をわけ、雲を掻き昇るの生氣を表現してゐる。斯くの如き精巧なる表現を保持せる武器裝飾品の我が郷土に行はれてゐた古代を想ふならば、何人と雖も驚嘆せざるものはないであらう。それがたとひ郷土に於て製作されたものでないとしても、斯くの如きものに嗜好を有するに至つた我が祖先の美的認識に對してだけで



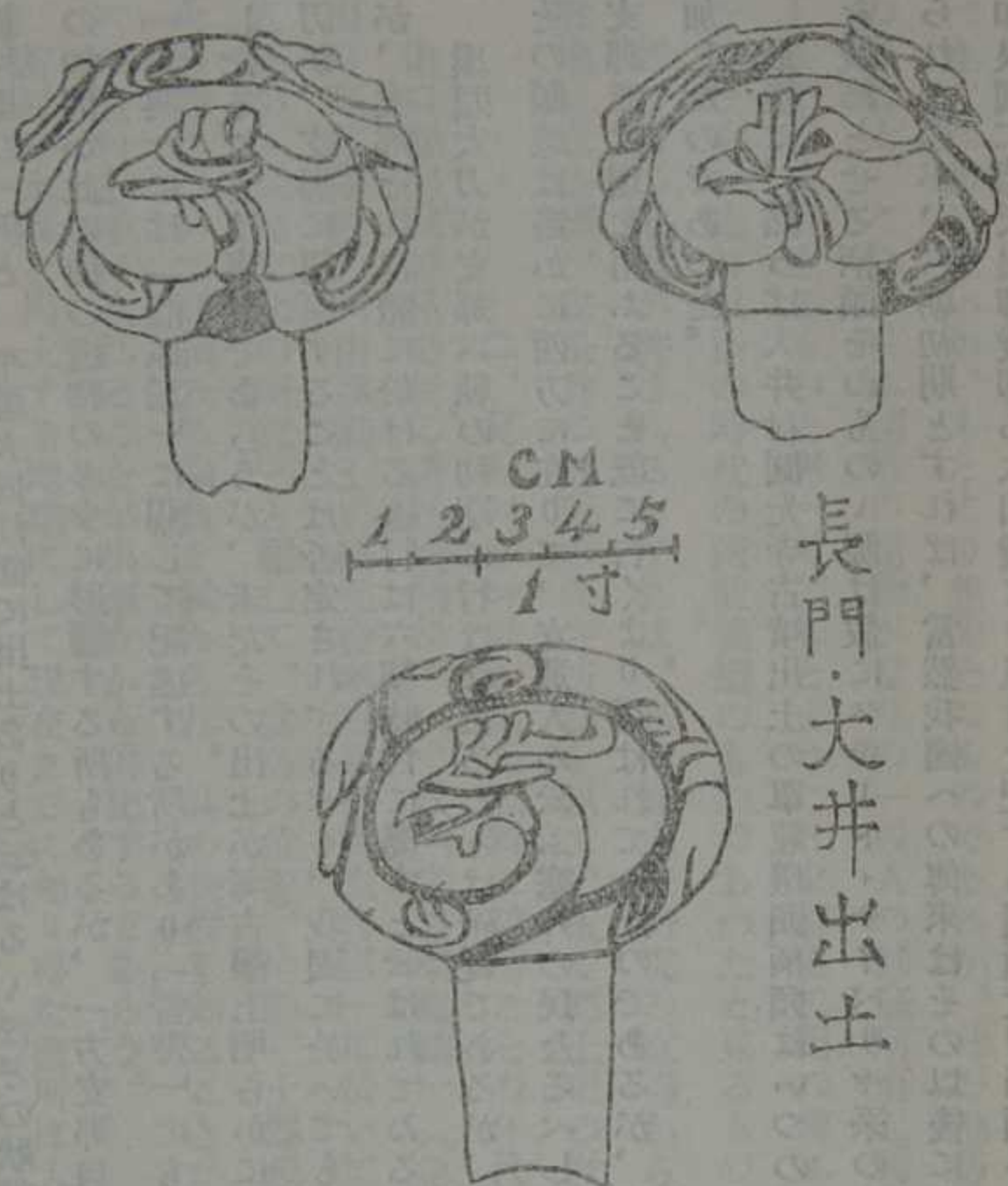
第三圖 龍頭式柄頭出土古寺光園圖三第

も敬意を表したくなるであらう。

龍頭式柄頭の我國に於ける出土例を見るに、その形式より分けられ、双龍の發見例は常陸一、上野四、下野三、上總四、信濃一、能登一、駿河二、三河一、伊勢一、近江一、大和一、美作一、合計十八箇の出土例があり、單龍に於いて磐城二、上野五、常陸一、下總一、信濃二、甲斐一、伊勢三、丹波一、攝津一、備中一、周防一、肥後一、筑前一、豊後一の合計二十二箇の出土例が見られ、兩者を合計して四十箇の出土があつた。しかし右の外出土地不明と成り實物の現存するものも相當に見られ、これらを合して約五十例に満たざる程度であるが、これをその分布より見るならば、日本海岸に通ずる國々では、北九州より能登に至るまで未だ一箇の出土例も報道されてゐない、四國も同様であり、東北地方も磐城以北は出土してゐない。右の舉例から考へるに、双龍單龍の兩者を通じて最も多くを出土したのは上野の九例伊勢の四例であり、信濃及び下野の各三例これに次ぐ。更に換言すれば上野、

野下を一分布區とし信濃及び伊勢も一分布區と見得ることで、この事實は何を物語るか又何に歸因するか遽かに決し難いが、古代文化と歸化人の關係を念頭に置くべきであらう。

長門・大井出土



第四圖 龍頭式柄頭出土古墳

而して右に擧げた出土例のうち、第三圖に示した左端の單龍にして珠を銜むもの、類例は下總國猿島村金岡發掘、筑前太宰府神社藏（出土地不明なれど多分九州より出たものであらう）、甲斐國西八代郡上九一夜村丸山稻荷發掘、の三例及び朝鮮慶尙南道善山郡善山發掘のものが最も近似し、珠を銜まざる品の近似例としては攝津國豊能郡東郷村野間中發掘品備中國吉備郡箭田村大塚發掘品、及び上野國佐波郡芝根村房子塚出土品の三者が最もこれに類してゐる。防長二洲に於ては先述の如く、僅かに周防國熊毛郡寧積町大字西之庄發掘にその一例を求め得るに過ぎぬが、この一例は不幸にして龍首に明瞭を缺く所有つて到底大井村出土の優秀なる作に比較することは出来ない。斯くの如く、我國の龍頭の環頭柄頭出土例が未だ五十箇に満たざるの現狀に於て、而もか大井村の如き流暢なる作品の寥々たるを思へば、私が曩きに、その遺物のよほど高級者の所有品なるべしと云つたことの敢て誣言でないことを知るであらう。而してこの種の遺物が概ね雄大なる封土を有する古墳より出づるを例とし、近くは筑前國春日村大字下白水所在の「日拜塚」と呼ぶ前方後圓墳よりも出土し而もこの環頭も亦第三圖左端瑞珠を銜むものと頗る類似してゐる。是れらの遺

品が我が國情上、その源流を大陸に求むべきは、他の多くの文化的遺物とその軌を一にするのであるが、朝鮮に於ける出土例を見るにその多くは素環式にして大井村の如く龍首を有する龍頭は、前述の慶南善山の出土と全羅南道羅州郡潘南面新村里の一例と、平壤大同江面に出土ありと云はるゝほどの状態である。もとより時代に前後ありて、日支交通關係の如何か此の種の遺物の多少に影響する所もあるが、一方支那自體に於けるその出土は殆んど之れを知らない。勿論唐の「六典」には「龍鳳環」に關して記述する所があり「晉書」にも「龍雀環」なる文字有ることから推せば、支那にも存在したることは事實であらうが、未だその出土が考古學上明らかにされてゐない。しかしながら學者の云ふ如く我が環頭大刀が、支那に起原することは否定されざるべく、我國に於いてもこれを「狛劍」と呼べる事實は亦その立證の一つであるが、支那それ自體に於ける盛行は六朝時代に屬すと云はれてゐる。

環頭太刀が支那六朝の初期に行はれたることは確實であるが、斯くの如き龍首鳳頭を用ひ初めたのは決して支那でなくその源流は遙かに西方に在りて、支那人の云ふ塞外の民なるべしとは、既に故高橋健自博士の指摘された所である。たゞ支那では環を用ふること既に古くより行はれてゐたのであるが、塞外の動物紋の輸入せらるゝに及びこれをその環中に添加したのであつた。

最後に、然らば大井村圓光寺古墳出土の單龍環頭柄頭はいつの時代に屬するものなりや、と云ふに、右述の如く、動物を裝飾とせる柄頭そのもの、源は假にスキート・サイベリヤ系のものなりとしても、これが支那に入つて環の裝飾を加へられたのが、六朝初期とすれば、當然我國への傳來はその以後に求められなければならない、これに關連して考ふべきは和泉國仁德天皇御陵即ち大仙陵より鳳首を配する環頭太刀柄頭が出土せること而して鳳首も龍首も概ね同時代に行はれたることの明らかな事實よりすれば、大井村出土品も亦應神仁德朝の前後、恐らくはそれより以後の時代に比定するの穩當なるを知るであらう。

然らば次にこの柄頭を有せし者は如何なるものであつたらうか。これさきに私が高級者の所有と推定したこと、相俟つて當然考究すべき所であり、更に一步を進めて阿武國造に一言觸れるところあつたが、恐らくはその國造の所持品と認むべきではあるまいか、もとより想像そのものであるが、此の地方の出土極めて稀なること、而も一墳より三箇も出土してゐること、これに伴ふ諸種の遺物が當時の一般人の到底所有し得なかつたことなどを考察して、右の如く推定するも必ずしも不當に非ざるものと考へる、もとよりこれを直ちに紀の傳ふる景行朝の、先に述べた阿武國造に比定せんとするものではなく、それ以後の時代の阿武國造のものであつたと見るものである。

若し右の推察が許されるとすれば、私は郷土史研究の立場から、この遺跡を永久に保存すべき方法を構じ、その遺物の散逸せざる様、安全且つ最善の保存方法を以て、永く郷土史の教材たらしめんことを衷心より希望せざるを得ない。

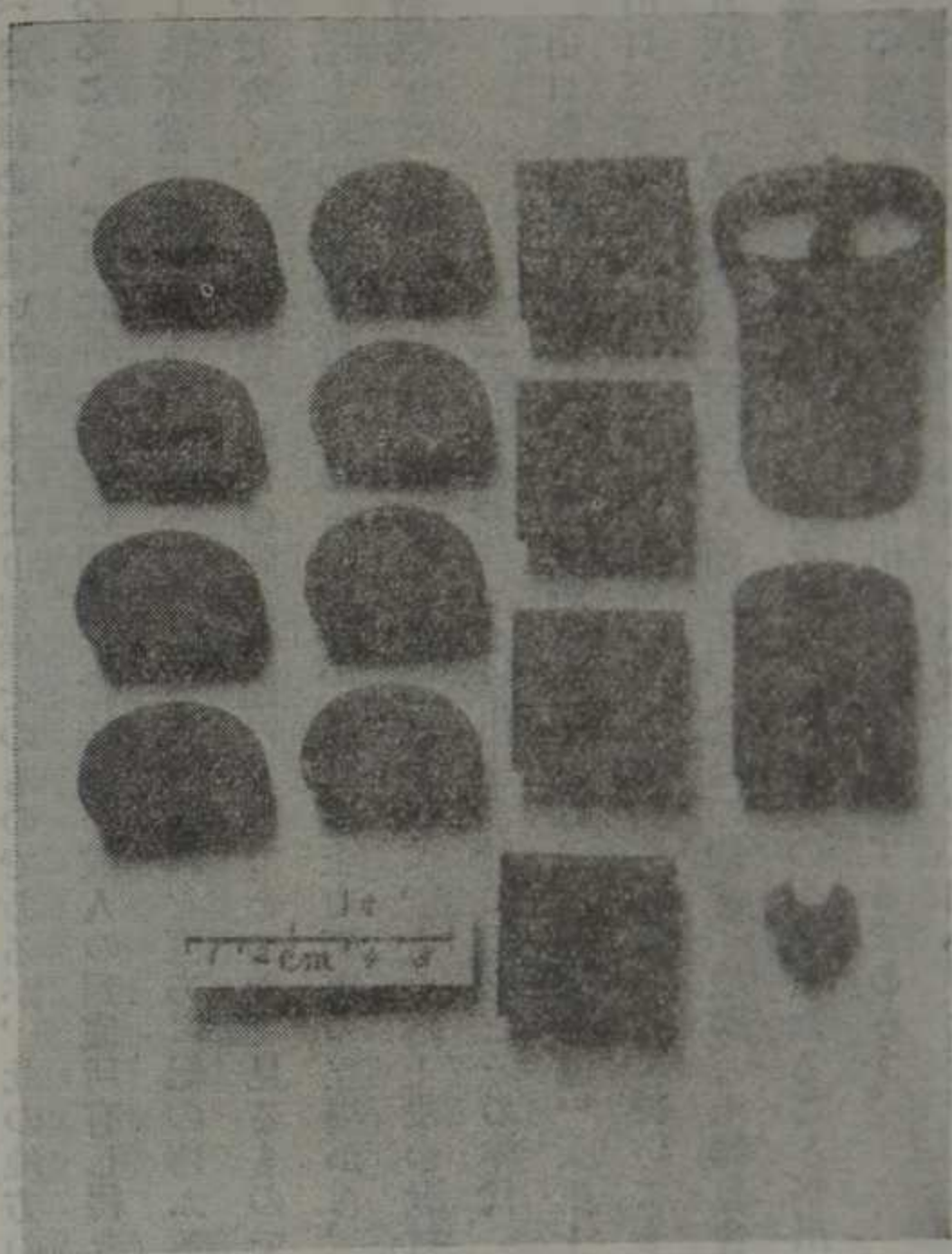
## 二、見島村デコンボ出土品特に鎗帯とその年代

山口縣阿武郡見島村の遺跡遺物については「考古學雜誌」(第十四卷第三號)に於て三輪善之助氏の略報があり、また山口高等學校の「山高郷土史研究會考古學研究報告書」に於いても匹田直・弘津史文・小川五郎・三宅宗悦・姉川從義の五氏が「見島文化の研究」と題して、當島の位置、地勢、土器包含地、群集古墳、ジコンボ發見の人骨、金石文、懸佛、傘石等について詳細なる報告を試みられ、其の全般を知ることが出来るが、私も亦本年八月公務出張の折新に知り得た二三の資料を手に入れることが出来たから附記するであらう。

當村の土器を出土する地點にして現在までに知り得た箇所は大宇本村の字藥師畑の小學校農業實習地及び同宇浦、小濱に在る宮崎山の二所であるが、三輪氏渡島の頃はまだ前者について知られてゐなかつたらしい。「見島文化の研究」には「土器包含地」としてこの地點が擧げられ「小學校々庭に散布を見る點よりすれば、該地の包含地であつた事は確實である」と見え、此處より出土した土器の大きさ、色調等にも言及されてゐる。吾人の踏査した時も亦土器片をこの地點より採



集し、南面する断面に於て約五寸の包含層の存在を認めたとあつたが、包含状態は彌生式が祝部と混在して點々と見られる程度に過ぎない。この包含層に於て一つ注目すべきことは石器又は石片が一點も採集されてゐないし、又し得なかつたことである。今採集し得た土器並びに保存されてゐる土器について、その特徴を見るにその殆んど全部が手捏の焼成稍



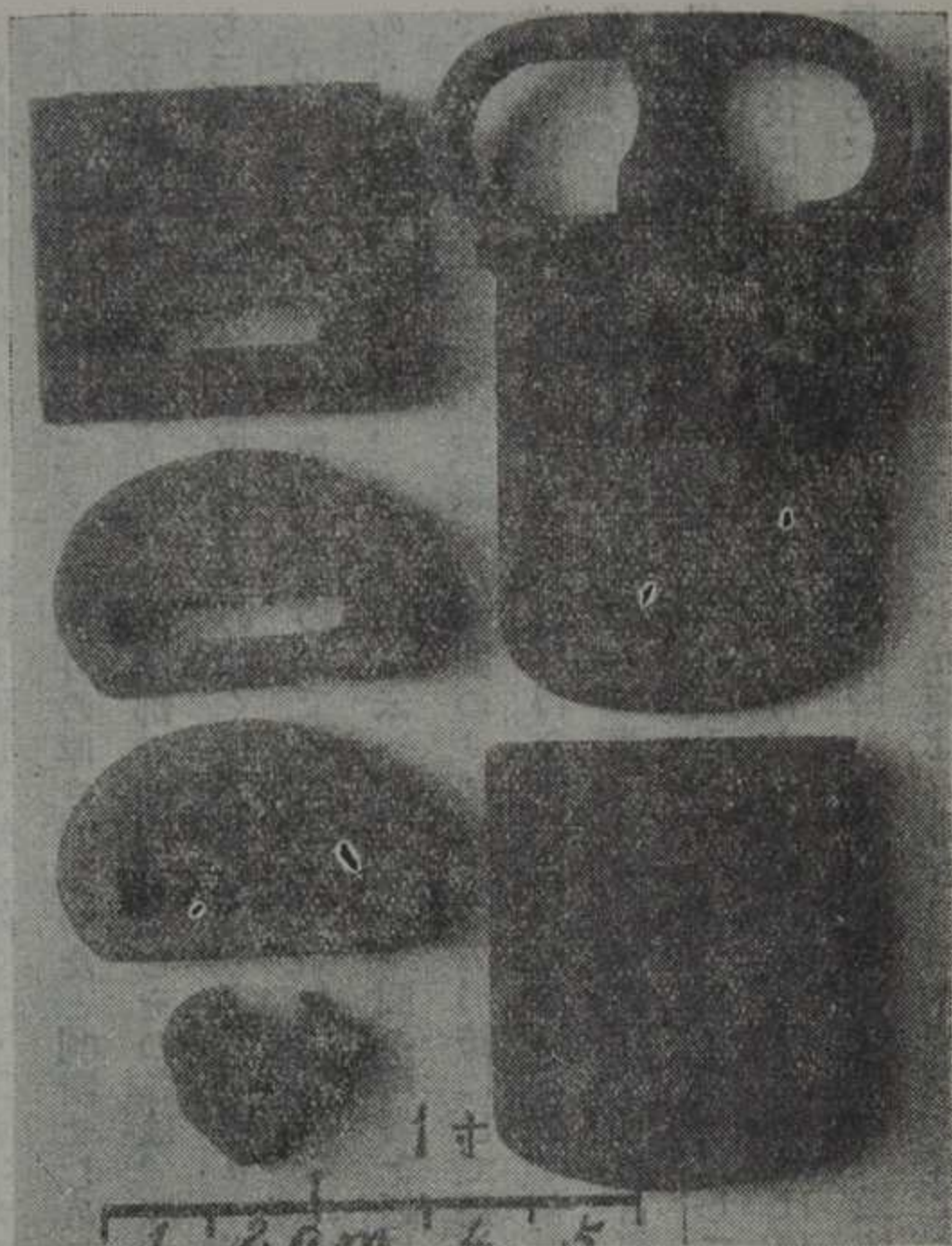
第五圖 見島村チコボ出土品

堅き部類のものであつて一般に赭褐色を呈してゐる。見島出土遺物のうちに特に私の興味を惹いたものは「チコンボ」と呼ぶ古墳出土品であつた。「チコンボ」と呼ぶ群集古墳は横浦と稱する海濱の殆んど全體に在つて、海浜に百數十基ありと稱せられ、未發掘のものも相當あるらしく、前記諸氏もこれに注意する所多かつたと見え、同書には詳細なる報道をされてゐる。従つて墳の構造その他一般については同書を参照されたい。吾人はこのチコンボの一を昨昭和八年の夏同村に於て發掘されし時出土した遺物についてのみ一言したい。

昭和八年七月十一日に發掘された古墳から、直

刀斷片一口分(稍不足) 祝部土器完形三箇の外破片少々、及び第五・六圖に示す青銅製帶金具等が出土してゐる。

第五圖は出土の鈔帶全部を示し、第六圖はそのうち特徴あるものゝみを掲げた。第六圖の右上は鈔具にして、日本及び朝鮮各地出土品の大部分には獸・鳥・草等の裝飾が牛肉彫又は透彫にて施されてゐるに反し、當村出土の鈔具・鈔尾及び鈔には裝飾も施されてゐないのは一つの特徴と見るべく、また鈔具の游動金具(帶革の孔に入るべき尖出せる金具)及び



第六圖 見島村チコボ出土品

そのの臺とも見るべき環の二者が各地出土品に比し縦に長く横に短かいことも亦その特徴とすべきであらう。例へば筑前國飯塚町西町出土例或は朝鮮慶尚北道達城郡達西面内唐洞第三十七號墳出土の銀製鈔帶金具(朝鮮總督府「大正十二年度古蹟調査報告第一冊」の第二十六圖版の二)の如き特に後者はその鈔具に彫刻なき點がより多く當村出土の鈔具に類似するも游動金具が長く、従つて環も亦横に長く成り、形の上に於て一致しない。同じく鈔具のうちでも馬具の鈔具には往々見島例と類似するものはあるが、裝飾具としての鈔具には寡聞にして未だその例を知らない。而して「筑後

將士軍談」の卷五〇に示された鈔具も稍見島側に類似するとは云へ、環が半圓形に成つてゐてまたこれと相違する。しかし若しこれと類似する傳世品を求むることが許されるならば、故高橋健自博士著の「歷世服飾圖說」上卷の五十三に示された河内國南河内郡土師神社藏の國寶鈔帶金具こそ最も近似するものであらう。同博士のこれに對する説明によれば「社傳に菅公所用」と傳ふることが鈔帶の裝飾から推し

「まさにその實年代に於て肯定される」と断じてゐられるものである。とは云へこの類似は唯だ私の云ふ游動金具と環の形式が著しく似ることを指示するにとゞまり、銙帯に至つては彼此類似するとは稱し難い。

第六圖右下は鈍尾にして五本の銙にて表裏を接続し、その断面は右端即ち帯革の尾端を挿入すべき部分のみ上下に離れこの間隙は第六圖左側に示す諸品を通じて知る如く○・二センチ（一分五厘）を出でざることからこれらの金具を密着させた革の厚さも亦○・二センチ内外の厚さであつたと判断せしめる。銙具と鈍尾の二者は各一箇出土した。

第六圖左上に示した方形の銙は全部で四個出土しその各は、四本の銙を用ひて表裏を接続する如くしてゐる。四箇のうち三箇は一端に近く表裏共に圖の如く長方形の孔を穿ち、残り一箇は裏面にのみ長方形孔を穿つてゐる。

第六圖左中の同形二箇は半圓の銙であつて各三銙を用ひ、これにも長方形孔を表裏に有するもの二箇、裏面にのみあるもの六箇の計八箇出土し、大きさから云へば方形と半圓の兩者を通じて長方形の一つ有るものと表裏に二つあるものは同大である。前述筑後將士軍談には本圖の<sup>3</sup>に類する方形銙にして長方形有るもの及び孔のなきものを示してゐるが、この二者が見島例と同断なりや詳らかにし得ない。しかしながら幸にもこの二者に酷似する類例は陸中國膽澤郡金崎村大字西根發掘の青銅銙に見られ、故高橋博士の著「埴輪及裝身具」（考古學講座）の二二六頁に圖示されてゐる、これに依れば西根發掘の方が長方形稍長くあけられてゐるの相異を見るのみにして大きさも略同じと見られる。

最後に第六圖左下に示した三銙を有する心葉形類似の小金具は僅かに一箇出土したのみであるが、これも矢張り銙の一種なるべく考へしめるのは表裏の間隙が方形半圓形のそれと一致する點を持つからである。

當村出土の銙帯は金具全部で十五箇は大略右の如き特徴を有するものであるが、次に起る當然の問題として、然らばこれらを如何に附着せしめたかと云ふことである。後世の唐制模倣時代の制式を示す銙帯の例を引用すると、長方形が「巡方」に當り半圓形が「丸軛」に當るべきは何人も想像し得る所であるが、全部で十五箇の出土を見たこれらの金具を、若

し十五箇を以て出土のまゝにして散逸せざりしとすれば、腰の周圍に配置するに當つて當然各箇の間隔を相當空けなければならぬ。然らばどれほど間隔を保ち、そして方形と半圓の二者を如何に並べたるかに就いては、爰では想像以上に出づるものでないが、幸にも故高橋博士著の前述書五十二に示された正倉院御物銙帯及び同書八十八に示された右より稍時代の下の石帶の配置を以て或る程度まで推察することが出来る。即ち前者に依れば銙具より銙に至るまでの間には相當の間隔を置き、而して一箇の方形具と三箇の半圓具を並置し、次に又相當の間隔を置いて三箇の半圓具と二箇の方形具及び一箇の半圓具を密着せしめ、銙具・鈍尾を合して十二箇の金具を使用してゐる。

右より推して考ふるに、後世石帶の用ひらるゝ時代となつて、巡方即ち方形の銙を附したる帶と、丸軛即ち半圓の銙を附したる帶に分け、前者は重き儀式に後者は輕き儀式に用ふる如く方形帶と半圓帶の用途を異らしめたものと相違し、正倉院御物に見る如く古き時代に於ては方形、半圓具の二者を一帶に配置したるものゝ如く考へられる。而して見島例は如何に用ひたるかは詳らかにしないが、かの長方形が、或るものは表裏に、あるものは裏面にのみあり、兩者を通じて表裏に長方形有するもの五箇、裏面のみのもの七箇なるの事實に依つて、長方形の用途たる何ものかをこの孔に通して懸垂せしむべき用意なる點より考へて、長方形ある部を帶革の下部に挿へて密着せしむるも、表裏並びに裏面に長方形あるものを如何に並べたるかが疑問とならざるを得ない。これらの長方形が果して或るものをこれに通して懸垂に用ふる用意とすれば、そしてその目的の爲めに裏面にのみ一箇の長方形しか有しないで役立つてゐたものゝあるのに、態々表裏二ヶ所に施してゐるのには何か理由がなければならぬと考へられる。思ふに表裏二ヶ所に有るものを以て刀の如き比較的重きものを、裏面のみに孔あるものは他の裝飾を懸垂するに用ひたるに非ずやとも愚考せしめるが、これとてより想像の産物であつて、古代人に於ては、或は二ヶ所、一ヶ所の孔には右の如き區別を用ひずして、漫然と孔を作つたのかもしれない。しかし方形、半圓具の區別は、何等かの意義を表はしてゐるに相違ない。

今回帯について各地の出土品を見るに、朝鮮に於いて前述書達西面第三十七號墳出土例では、銚はすべて心葉形を成し同書圖版第七十七（第五十一號墳出土）では透彫を有する方形の銚であり、同五十五號墳出土（第九十六圖版）も亦前者に酷似せる方形銚であり、同書第五十九號墳出土（圖版第二百二十七）品も亦略方形の圓のみであり、更に瀧田青陵博士著の「慶州の金冠塚」に見ゆる金冠塚出土黄金銚帯も透彫有る方形のみであり、また梅原末治氏著「佐味田及新山古墳研究」にある新山出土のそれも透彫ある長方形の銚のみを示されてゐる。

右に挙げた銚帯は殆んど金又は銀製品であるがその形に示された事實より推察するに、見島出土例を二本の銚帯と見ることとは銚具及び銚尾が各一箇なるを以て到底許されない、どうしても出土の十五箇は一本の銚帯なりと見なければならぬ即ち一本の銚帯に於て前述の如き後世の丸柄と巡方の兩者を併用してゐるのは、前記の古き諸例を通じて決して類例なきを思はしめ、且は、古式の銚帯の殆んど全部が平板に透彫又は貴金屬製なるの事實を通じて、見島出土品は前述の如く正合院御物に見るもの或は土師神社蔵の如きものの行はれた比較的後世のものに近きを思はしめる、況んや既述の如く銚具の如きも時代を降る右の二者と對比すれば著しい類似を覚え、且はデコンボ以外の見島出土の土器が、ひとしく彌生式とは稱しながら製作焼成等後世の土師器に近似するのみならず、石器を伴はざるより推考しても、見島そのものゝ歴史が本邦中央文化の末梢に在つて、未だ中央に先んじて文化を攝取せしものに非ざるかに考へられる。このことは見島が本邦を二、三十哩離れた日本海中に在りて、朝鮮に近く従つて一見大陸文化を直接早くより受け入れたる如く想像せしむることと相違してゐる。

斯くの如く考察さるゝことから、吾人はこの銚帯が、たとひ形式上「漢民族の所謂胡服系に屬」してゐる（高橋博士著「埴輪及裝身具」二二六頁）としても、直ちに以て大陸よりの傳來品と推定することの危険を感じ、むしろ、我が中央より埴輪又は流島されし相當有力なる者の所持品なるべしと推察するの穩當なるを感ずるものである。これと共に前述陸中國西根出土の銚も、亦今その伴出品を詳らかにしないが、殆んど見島と相去る遠からざる時代のものと考へられる。即ち奈良時代を遠く溯らざる時期に比定せんと欲するものであるが、周知の如く、佛式火葬の流行が雄大な墳壟の營造を漸次廢絶せしめたのは、矢張り畿内が他の地方より早かつたと解すべく、然らば見島の如き遠隔の地に於ては中央に於て巨大なる石を用ふる古墳の漸減せるにも拘はらず、未だデコンボと稱する組合式石棺を有する古墳を營んでゐたとしても敢て不思議ではないであらう。而しその古墳たるや海濱の比較的大なる石を利用して堅穴式に葬りたるにとゞまり、これに封土もなき現狀は將に古墳營造の末期なりと考へしめるかの様である。

これを要するにデコンボ出土銚帯は我國に於ける發見例も極めて少く、且つ比較的完全に保存されてゐることは郷土史研究上詢に嬉ぶべきことであつて、この遺物も亦出土の見島村に於て長く教材として保存さるゝことを冀はざるを得ない。

私がこの印刷物を通じて郷土の有識者に特に願ひたきことは、何時如何なるものが土中より出ることあつても及び、そしてそれらのものが遽かに判断し難きものであつても、且は、一般人の考へてゐてあまり價値ありと思はれないものであつても、祖先の遺物たることを考へ、適當に保存され、機會を見てその性質を明らかにされんことを望むものである。

終に、本稿をもつするに當り大井村に於ては村長山根辨作氏、小學校長山根禮輔氏、同訓導小田芳雄氏、見島村に於ては村役場諸氏、小學校長池田彦三氏、田中太郎氏、山谷永一氏、長谷川徳太郎氏、左野英太郎氏諸賢の御援助を賜つたことを銘記し謝意を表するものである。また第一圖と第三圖は弘津史文氏が藤本瀧江氏に贈られたものであるが、これが利用に當り快く承諾された藤本氏の御好意に對しても厚く御禮申し上げねばならぬ。猶本稿について博雅の叱正を乞ひ得れば甚だ幸福である。

## めくら、つんぼ、人間

特別會員 森 本 徳 雄

ある日の新聞の家庭欄だつた。

——どういふ原因でか、不幸にも失明した人が、多くの友達からも氣の毒がられ、自分も世界が眼前から消失した氣持ですつかり失望した日々を送つて居たところが、日數がたつにつれて諦めの静けさを得られるやうになつてくると、今迄外界にばかり向つてゐた心の活動が停止されて、内部の心の世界に眼が開くやうになり、失つた外の世界の廣さにも劣らぬ別の世界、内面的な自己を掘り深めるやうになつた。——

といふ意味の記事が載つてゐるのを讀んで僕は、次の記事を追ふ眼を新聞紙より離して、ウームと深く體を椅子に沈めたのであつた。

めくらからつんぼへの連想は、ふと、蕪村の句を舌の上に浮ばせた。

細打ち 耳遠き身の 唯ひとり

この句を今迄僕はつんぼの人が一人細打ちをしてゐる、何だか小春日和のやうな長閑さを表現した、蕪村らしい客觀的描寫の句だと解して、何とも思つてゐなかつたのだが、今ふとしたことから、此の句にはもつと／＼深い味の隠されてゐたことを知つて、驚嘆の情を以つて巨匠の心境を考へてみるのであつた。

それは聽覺を遮斷された男が、世の歩みから取り残されたやうに「唯一人」ぼつんと、機械的に鎌を動かしながら悠久な時の流れに自己を没入させてゐる境地を狙つたものであらう。

どうも僕は感覺が鋭敏であるため兎角周圍の事象に氣を奪はれて、しんみり自己を考へてみる餘裕なしに生活を送つてゐる。云はゞ精神的に自己を消耗させるばかりの生活だ。日月の運行、風雨の變化、木の葉の囁き、小鳥の囀り、これ等のことを單に自然現象として網膜に映す以上に、これ等を徹して悠久な自然を味得するには、深く内省する心でなければ出來ない。

出家修道せんとする者は味噲がめ一つ持つまじきものであると教へられた古賢の言葉も、外面的な物質欲を斷つて、内面的な心の生活に向かはんが爲である。唐招提寺の鑑真和尚の坐像を見ると、靜かに目を閉ぢ、長い時の流れに浮ぶ自分に悟入してゐる人の尊い法悦が、顔全體に、姿全體に、滲み出てゐる。質素な部屋に世の動きを忘れて茶をたてる心境もつまりはそれである。

かうした東洋文化の尊さが今更のやうに懷はれる。

十四世紀ルネッサンス時代になつて、初めて人間は、「人間本質の發見」をなしたのであつた。フマニテイに醒めたことは、コロンブスの新大陸發見や、火藥の發明よりも、もつと意義深いことである。東洋の佛教徒はずつと早くから、人間といふものを哲學的に考へ知つてゐたであらうけれど、しかし知るだけで、人間性を生かし發展さす熱意にはあまりに隱遁的であつた。

知り且つ行つて初めてソクラテスの眞實の知に到達し得る。隱遁者のやうに、社會の實狀から逃避して、小さな自己の殻に立籠つたところでそれは生命のない枯木の存在であるだらう。僕等は勇敢に實社會にとび込んで、泣き笑ひ悲しみ喜びして、あらゆる體驗を積むうちにも常に内面的に自己を掘り深めてゆく心を以つて、現實に直面して行けば、凡て皮相的なものを輕視してほんとうの人間性の豊かさに價値をおくやうになる。

「かく言へばとてひたぶるに閑寂を好み山野に跡をかくさむとは非ず。つらく／＼年月の移り來し拙き身の科を思ふに

或る時は仕官懸命の地を羨み、一度は佛羅祖室の扉に入らむとせしも、たよりなき風雲に身をせめ花鳥に情を勞して暫く生涯のはかりごとくさへなれば」と芭蕉は言ふ。時には仕官を望み時には佛門に入らうと思ふ。その人並みさがあつて後「風雲に身をせめ花鳥に情を勞す」生活に價値を見出すやうになる。人として豊けき生活態度を見ることが出来る。その深みがあればこそ花鳥を見ても「情を勞す」ることになるのだ。

ひとつつ屋に遊女も寝たり萩と月

の句の心もかうした生活態度から産まれる。こゝに人間世相の一断面を示す薄倅の一人の運命と、秋の自然と、偶然同宿した自分とを並べて、「人の世の旅」として見る芭蕉の圓熟した藝術觀照を遺憾なく表明してゐる。住める家を人に譲り股引の破れをつゞり、笠の緒をすげかへて、旅に出、旅を栖家とした人間芭蕉にして持ち得る温い觀照である。

旅行は美しい景色を見るためのものではない。自然を通じて人間を内省し、自己の心を養ふためのものである。

(昭和九、十、廿七)

秋の黄昏

くづをれて君戀ふ夕べ枯萩の葉末かすむる黒鳥の影

津和野城跡城山によりて

静寂なる眞ひるの森に風添ひて蔽ふること落葉する音

### 日本數學史概観

特別會員

兒

山

茂

従來日本人の力を以て、學術上新機軸を出したものは、獨り數學位であらうと云はれてゐる。然るに明治初年西洋數學輸入せられてより、和算の學全く其の跡を絶つに至つた。従つて日本數學史を研究するものも非常に少く、昭和三年、水本梢氏日本數學史を著はされるまでは、遠藤利貞氏の日本數學史が唯一のものであつた。尤も歐文では藤澤利喜太郎博士林鶴一博士、三上義夫氏等の書があるけれども、何れも遠藤利貞氏の日本數學史に準據してゐる。

世は國史に還れの時代となつた。此の時に當つて、日本數學の變遷を考察することは無意義なことではあるまい。

#### 第一期 日本上古の數學

皇祖伊弉諾尊は曆や度量衡の制度を、神武天皇は年月日の順序を、夫々定め給ふた如き、履仲天皇は内蔵の出納を記帳せしめられたと云ふ如き、多少の數學の觀念が無くては出来ないことである。然し此の時代の數學が果して、どの程度のものであつたか知ることは出来ない。

#### 第二期 支那數學採用時代

欽明天皇の御代、百濟より易博士、曆博士等來朝して、始めて支那數學を我が國に傳へた。天智天皇に至つて、始めて學校を設けられ、算博士、算生をしてこれを研究せしめ、専らこれが獎勵に勉められたから、聖武天皇の頃には支那流の數學が隆盛になつたやうである。勿論、當時使用せられた數學教科書は支那の周公時代の數學書であるから、其の程度は加減乗除から開平、開立、直角三角形の定理、應用問題の解法に止つてゐたに相違ない。



次で萬治、寛文年間になつて、天元術なる算法が支那から傳はるに及んで、本邦數學は益々發達した。天元術は元の朱世傑の發明した方法で、従来の珠算の遠く及ばない長所を持つてゐたから、當時の數學者、大に之を貴び競ふてこれを學んだから、暫時にして廣く行はれるやうになつた。そして算木を用ひ、數の正負を區別し、負數の加減乗除を行ひ、應用問題を解くに、未知數を考へて方程式を解く等今日の初等代數學と殆んど相似してゐた。

尙、朱世傑の符號の規則は次のやうになつてゐる。

加則 正無人正之負無人負之。

減則 正無人負之負無人正之。

乘則 同名相乘爲正異名相乘爲負。

無人は無算で、正を加ふる時は正とし、負を加ふる時は負とす等、今日の代數學の定則と全く同一である又此の頃長崎の人、小林義信蘭學をよくし、西洋の天文、曆學等を學生に教授して居つたと云ふことであるから、西洋數學も此の頃から我が國の一部に行はれてゐたのである。

#### 第四期 日本數學發明時代

毛利重能及び其の高弟に依り我が國に行はれた數學は、稍見るべきものが、ないでもなかつたが、併しそれは皆外國から傳來したものゝみで、純然たる日本數學として誇るに足るべきものは遺憾ながら殆どないといふて差支なかつたのである。

然るに今より二百八十六年前、寛永十九年、東洋の大天才關孝和、上毛の地より出づるに及んで初めて世界に誇るべき、純然たる日本數學が建設せられたのである。

關孝和は俗稱を新助と云ひ、號を自由と云つた。寛永十九年上野國藤岡と云ふ所で生れた。一説には生れた年は寛永十四

年となつてゐる。本性は内山氏であるが關五郎左衛門の家を繼いだ。長じて幕府に仕へ、勘定吟味役となり、納戸組頭となつて三百石を領した。寛永五年十月病を以て終つた。享年六十七才、今の牛込區辨天町に在る淨輪寺は其の葬つてある寺である。戒名は法行院宗達日心大居士。關先生之墓と云ふ碑が建つてゐる。

孝和幼にして穎敏、よく數術を知つた。年甫めて六才、人の布算するを見て、一々その失算を指摘したので、人々驚歎して神童と稱した。初め毛利重能の高弟高原吉種に教を受け、長ずるに及んで自から大いに數理の微妙を究め、先人未發の術理を發見するもの極めて多かつた。これを輯めれば實に數百卷、誠に古今獨歩の感がある。時人が算聖と云つたのも決して失當ではない。

關孝和異常の天才を發揮し、其の當時盛んであつた天元術を改良して、先づ天元演段法を發見し、進んで點算術を發明した。これによつて約術、兩一術、翦管、招差、角術、綴術、適盡、圓理等の諸術を發明した。

約術以下では圓理を除く外、悉く點算術中に説いてある。約術と云ふのは、互減、自約、齊約、互約、遍約、等を謂ひ兩一術は一數の若干倍から他數の若干倍を減じて、殘數が常に一となり、或は一を不足するものを云ふ。翦管術とは以上の諸術で不定數を決定するの法である。整數術とは、各數互に關係し、且つ開方するも常に整へる數を求めるのである。綴術は圓周率を求める法で、角術とは正多角形の諸術を求むるもの、適盡法は極大極小を求める法である。圓理術は微分積分學の前提となるものである。

天元演段法は關氏演段法とも云はれ、天元術の解法を筆にしてその術理を視るものであるが、天元術よりも運算が甚だ容易で點算術の起る根源をなす。

點算術は傍書筆算法で、西洋の代數に似てゐるが、其の境界は更に廣いものである。即ち代數、幾何、三角等の諸術をも包含してゐる。傍書と云ふのは短い縦線の傍に數或は他の文字を書くことを云ふ。山と三とは共に三個を表はし、 $\frac{1}{2}$ は





ては、既に百川流あり、關流あり、空一流あり、中西流あり、又宮城流あり、後に宅間流あり。かうなつては茲に一狡者があれば、密に他人の技を偷んでそれを己が發明の術として、世人に誇るといふことになる。だから算家は一術を發明しても、極秘にして容易にそれを人に示さず、果ては門弟に對しても油斷せず、他言を禁ずるの血盟を見るまでは、これを傳へない様になつた。かくて學術の進路は塞がれ、有用の具は變じて鬭争の具となつた。關氏演段法は他流の間にも流行したが、點算術に至つては、關流の門人でも、その能力上達したものでなくては、これを聞くことが出来なかつた。

#### 第五期 日本數學高調時代

我が數學界の名人と云はるゝ安島直圓は山路主任の門人であつた。主任は關流の秘書を直圓に皆傳した。彼は生れながらにして數理の才あり、未だ師の傳を受けないのに自ら圓の眞理を發明した。一説に依れば、これを師主任に質したところ、主任は之を見て、その法の新發見で、しかも理義の貫徹せるを感歎推稱したとある。これより圓理の學術は一變して高尙の域に進んだ。以後、曲線の長さ、曲面の面積、又は立體の體積等に關する性質を考究することを總稱して圓理術といひ、遂に文化年間に至つて和田寧無窮小數なるものを考へて、此の術を大成することになつた。そして之は全く今日の微積分學と異ならないものである。直圓の時代から自設の算題を神社佛閣に掲げ、世の算者に向つてその答術を求めた、今の懸賞問題の様なるものである。その解答の可なるものは、出題者之を印刷して、世に公表し、しからざるものは、自答を公開することが流行した。

前野良澤が蘭人から算術書を受けたのは明和年間のことであるが、果して如何なるものであつたかは今尙不明である。かやうにして邦内の數學は逐年盛になり、流派も漸く多くなつたが、關流は相變らずその最たるものであつた。荒木村英の傳は、松永良弼、山路主任を経て安島直圓、藤田定資に至つて益々榮え、建部賢弘の傳は中根元圭、その子彦循、幸田親盈を経て、今井兼延、本田利明に及んで愈々大となつた。此の二派は素より關流だから相争ふことなく、互に相研究し、たものらしい。

關流の正統を安島直圓より受けたのは日下誠である。明和元年上總國に生れ、長じて本多利明に教を受け、後直圓に從學した。數學の擴張を謀り多くの門弟を養成した。和田寧は日下門下の逸材で師と共に安島直圓の遺稿に依つて、圓理考究に餘念がなかつた。その他日下門下には秀才多く各一機軸を出し、神社佛閣に新撰の問題を掲げて、論者を待ち大に數理の擴張を謀つた。文化、文政の頃より天保の頃は日下誠に依つて數學發達の時代である。此の時に當つて、本邦數學は關流に歸した様である。

以上は主として純粹數學に關する方面であるが、以下應用數學に就いて述べよう。享保の初め既に測量器を發明するものがあつて、高低遠近を測量し、又今日の羅針盤に似た逆羅針盤なるものが航海並に測量用に使はれたといふことである。享保十七年には中根元圭、七十才の老體を以て將軍吉宗の命を奉じて天體の觀測に従事した。其の結果によると地球の直徑は三四〇〇里（實は三二〇〇里）、太陽と地球との距離は四五七〇〇里（實は此の八〇倍以上）、太陽の直徑は月の直徑の六倍半（實は四〇〇倍以上）となつてゐる。寛永十二年に至つて、伊能忠敬は日本周海の測量を初め、前後十五年文化十一年に至つてこれを完成し、日本全國の地圖を作つた。これ實に安政、文久の頃、西洋航海者をして、其精確の度を驚歎せしめたものである。

以上の如く關孝和始めて點算術を發明してより我が國の數學著しく發達し、一時は世界の數學界に於ても、少しも遜色なきまでに進んでゐたけれども、然しかくの如きは眞に一部少數の人々だけで我國民一般の數學思想は、尙未だ幼稚であ

つた。これは主として、我が國當時の國情と、其の研究方法の不備とに基くものと見なければならぬ。蓋し徳川時代に於いては、幕府も列藩も學術としては儒學を重じたまめ學に志すものも、數學の如きは捨て、顧みないのみならず、算數を口にし、珠盤を弄すごときは下司根性として卑み、遂に我が國民の數學思想をして發達する能はざるに至らしめた。其の研究方法も既に述べた様に封建割據の風習を受けたためか、自家の發明したものを秘密にして他人に示さなかつたから、人々互に長を採り、短を補ふことが出来なかつた。其上、當時の數學者は今日の如き簡單な數字と記號を持たないで、其の運算甚だ冗長不明瞭で、非凡の天才でなければ其の門に入ることが出来なかつた。藤澤利喜太郎博士は曾て、和算を研究するのは埃及古代文字を研究するより困難だと云はれたが、これは運算記號の冗長不明瞭の外に多くの流派があつて、各流、各派特殊の術語や記號を固守してゐたからである。それで明治維新の際に至つて、始めて簡單な西洋數字と便利な色々の記號を知るや、人々其の分り易いのを喜び、時の政府亦之を獎勵したから、従來の運算方法全く廢れ、關氏以來數多の天才が心血を注いで建設した本邦獨特の數學も、茲に全く跡を絶つに至つたのは、誠に是非もないことである、若し徳川時代の我が國數學者をして、其當時歐洲學者の用ひし如き簡單なる運算法と、其當時歐洲學者のなせし如き開放的、協同的知識交換の自由とを持たしめたならば、本邦數學の發達蓋し測り知るべからざるものがあつたであらう。然るに封建割據の風習と徳川幕府の鎖國政策とは、遂にこれ等非凡の天才をして徒に枝葉に勞せしめ、十分な美果を結ばしめることが出来なかつたのは、返へす／＼も遺憾に堪へないことである。最後に用ひた参考文献を示して置かう。

遠藤利貞著 増修日本數學史。

水木 梢著 日本數學史。

大上茂喬著 數學閑話。

東京數學物理學會、本朝數學通俗講演集。

(昭和九年十月稿)

碩

智

特別會員 岩 本 益 雄

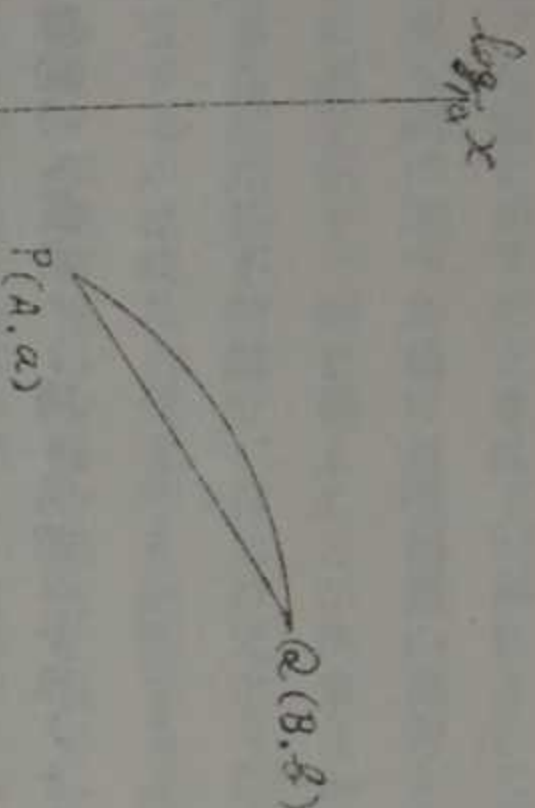
昔一人ノあらびや人が死ヌル時ニ、私ノ全財産ハ、17頭ノ駱駝ダケダ。其ノ $\frac{1}{2}$ ヲ長男ニ、 $\frac{1}{3}$ ヲ次男ニ、 $\frac{1}{9}$ ヲ娘ニヤラウ。ト遺言シテ死ソダ。

三人ハ其ノ處分法ニツイテ大變ニ頭ヲ惱メシタガ、ドウシテモ解決ガツカナインデ、裁判官ニ訴ヘテ出タ。裁判官ハ直チニ自分ノ家カラ駱駝1頭ヲ連シテ來テ18頭トシ、 $\frac{1}{2}$ ナル9頭ヲ長男ニ、 $\frac{1}{3}$ ナル6頭ヲ次男ニ、 $\frac{1}{9}$ ナル2頭ヲ娘ニ、合計17頭ヲ與ヘ、殘リノ1頭ハ又自分ノ家ニ連シテ歸ツタト云フコトデアル。

コノ裁判官ノ頓智ニハ實ニ感服スルデハナイカ。

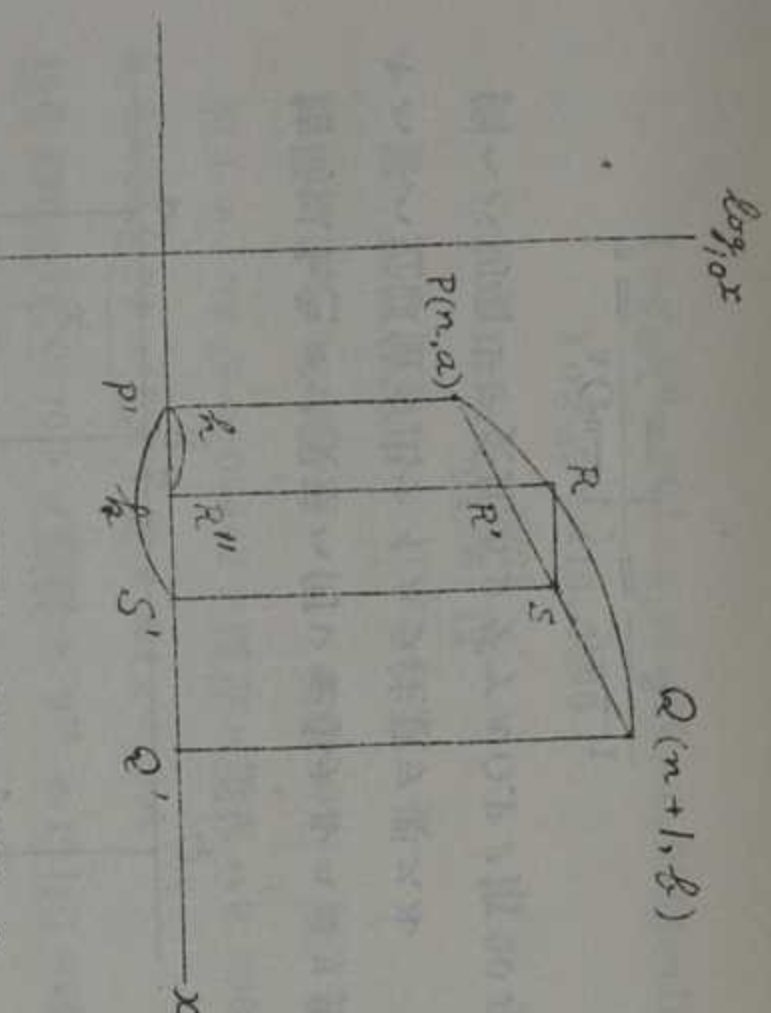
### 對數比例部分ニ就イテ

特別會員 玉井世履

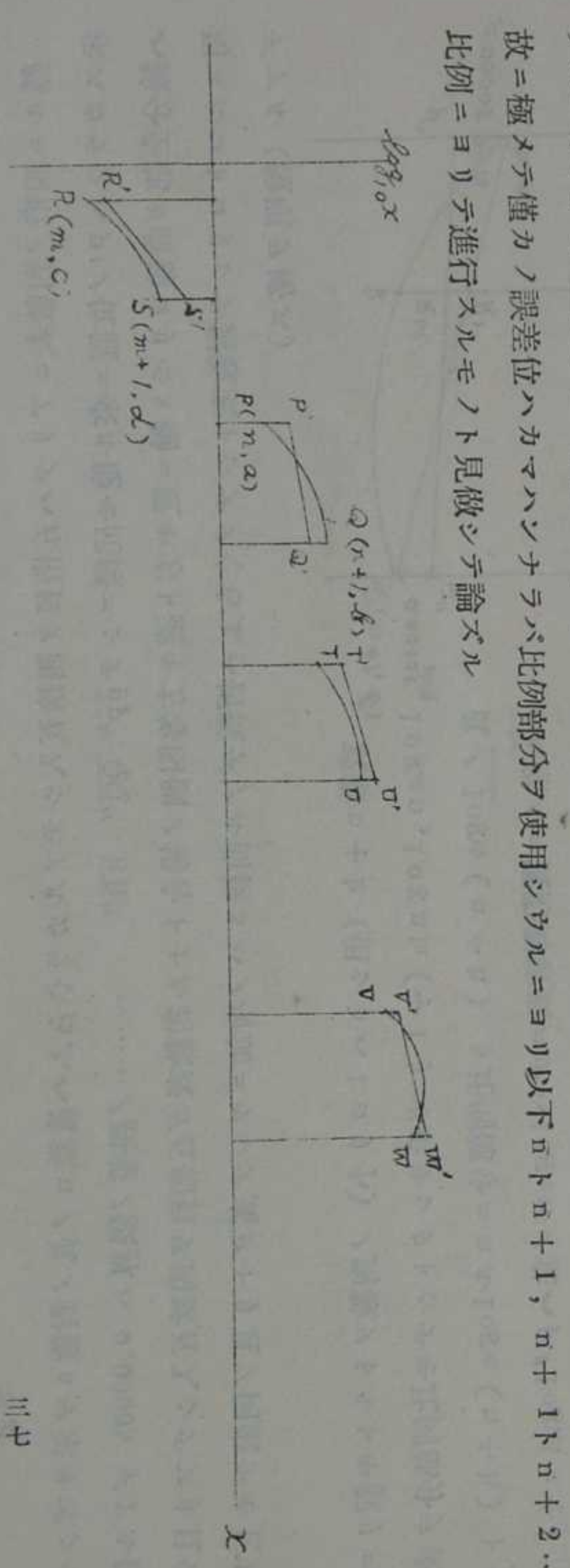


四格ノ對數ナラバ五格目ハ四捨五入シテアルカラ眞ノ對數トハイハレヌ  
 ノ差ガ  $A = \log_{10} A = a \log_{10} B = b a b$  ハ眞ノ對數トスル  $B = A$   
 $B - A =$  對シテ甚ダ小サイトキハソノ對數ノ差  $d = a$  ハ二ツノ眞數ノ差  
 ノ理トイフ (證明ヲ略ス) 依テ  $P, Q$  間ハ  $\frac{1}{2}$  分ニナルトツノ級分  $P, a, t$   
 見做スコトヲサル

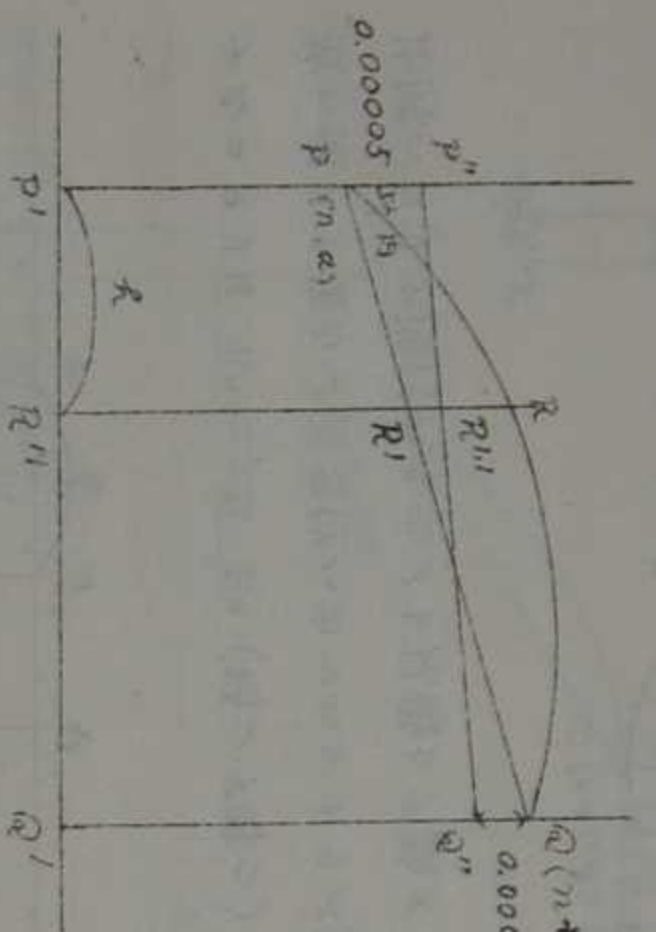
實際  $P, Q$  ナル曲線ヲ之ト近似スル  $P, q$  ト見做スコトニヨリテ  $P, q$  ノ誤  
 差ヲ生ズルカトイフ  $t, n = 100$  トシテ眞ノ  $\log_{10} n, \log_{10} (n+1)$  ガ分  
 カツテキルトキ眞ノ  $\log (n+h)$  (但シ  $h < 1$  ヨリ小ナル正ノ數) ト比  
 $n = 100$  トシテ眞ノ  
 例部分ニヨリテ求メタル  $\log (n+h)$  トノ差ハ  $n = 100$  ナラバ  $0.00005$  ヲ越エズ即チ比例部分ニヨル誤差ノ限界ハ  
 $0.00005$  デアル (證明ヲ略ス)



依テ對數表及比例部分ニヨリ或ル與ヘラレタル眞數ノ對數ヲ求メ逆ニ或ル  
 與ヘラレタル對數ノ眞數ヲ求ムル際  
 $n, n+1$  ハ眞數  $a, b$  ハ夫レニ關スル眞ノ對數トスレバ  
 $t$  眞ノ對數  $\log 10 (n+h) = R, R''$   
 比例部分ニヨルモノ  $\log 10 (n+h) = R, R'$  誤差ハ  $RR'$   
 且與ヘラレタル對數ヲ  $R, R''$  トスレバ之ニ對スル眞數ハ  $n+h$  デアル筈  
 其ガ比例部分ニヨルト  $n+k$  トナル  
 何レニシテモ誤差  $R, R'$  ハ  $a =$  比シク  $b$  ハ  $n =$  比シテ上述ニヨリ極メテ小  
 $n+h = n+k$



然ルニ四桁ノ對數表ニテハ五桁目ヲ四捨五入シテアルカラゞらふハ眞數 $n$ ノ眞ノ對數 $a$ ヲ示サズシテ $a$ ノ近似値ヲ示スカラ $P$ ハ $P'$ ノ位置ニ來ル他モ同様ニシテ $\overline{pp''}$   $\overline{QQ''}$   $\overline{RR''}$  .....ノ誤差ノ限界ハ $0.00005$  デアルル依テ線分ノ配置ハ線分全部ガ曲線ヨリモ $x$ 軸ニ近キ方ト遠キ方等四個ノ場合トナル對數表ガ五桁目ヲ四捨五入シテアリ且ツ比例部分ヲ使用スルコトヨリシテ對數表トシテノゞらふハ折線デアル曲線 $x$ ハノ増加ニツレテ高クナリ且ツ何處デモ上方ニ凸ナル形状デアル (證明ヲ略ス)



或數 $n+h$  (但シ $h$ ハ $1$ ヨリ小)ノ對數ヲトルトキ假リニ對數表ニ眞ノ $\log_{10} n, \log_{10} (n+1)$ ガ示サレタトシテモ比例部分ヲ使用スルニヨリ眞ノ $\log_{10} (n+h)$ ト比例部分ニヨル $\log_{10} (n+h)$ トハ $\overline{RR''}$ ノ誤差トナル然ルニ實際對數表ニテハ $\log_{10} n$ ノ點ハ $P$   $\log_{10} (n+1)$ ノ點ハ $Q''$ ナルニヨリ比例部分ヲ使用スルト  $\overline{RR''}$ ノ誤差トナル且ツ比例部分トシテモ四桁對數表ノ時ハ五桁目ヲ四捨五入スルニヨリ又ハ誤差ヲ生ズルコトトナル以上三種ノ誤差ヲ綜合シテ最後ノ誤差ノ限界ハ $n$ ノ數値ニヨリテ變ルカラ一概ニ定メ難ク (證明ヲ略ス)

結局以上色々ノ誤差ハ何レモ小ナルニヨリ對數計算ニ於テ誤差ガ數多ク堆積セヌトキハ答ハ近似値ヲウルモ堆積スルトキハ答ハ近似値ガ出ナイカラ注意ヲ要スル

例ニテ初項 $1$ ニ公比ガ $9$ デアル $GP$ ノ第 $20$ 項迄ノ總和ヲ求メヨ

$$s = \frac{a(r^n - 1)}{r - 1} = \frac{9^{20} - 1}{8}$$

$$1 \times 10^5 \cdot 9^{20} = 201 \times 10^5 \cdot 9 = 20 \times 0.9542 = 19.0840$$

$$1 \times 10^5 \cdot 9^{20} = 19.0840$$

$$\frac{121}{\overline{1036} \overline{12}}$$

$$\frac{0.33}{3} \dots \dots$$

$$9^{20} = 1213 \dots \dots \text{(整數20桁ノ數)}$$

然ルニ $1 \times 10^5 \cdot 9 = .09542$ ノ誤差ハ限界ハ $0.00005$ デアルカラ $201 \times 10^5 \cdot 9 = 19.0840$ ノ誤差ノ限界ハ

$$0.00005 \times 20 = 10 \text{ 依テ眞ノ } 201 \times 10^5 \cdot 9 \text{ ハ}$$

$190.850$ ト $19.0830$ トノ間從テ $9^{20}$ ハ $1213$ 迄ハ確實ニシテ信用シウルモ以下ハ不明デアル實際忠實ニ $9^{20}$ ヲ計算スルト

$$9^{20} = 12140446770371184731 \text{ トナル}$$



### 創立三十五周年記事

#### 記念式

前日迄は連日陰晴定まらず、小雨がしよぼ／＼降つて居たが、天もよく心得たもの十月十八日の黎明は見るからに晴々しい秋晴の扮装を凝らして訪れたのは何處まで惠れた萩中學校であらう。

此の日の記念式は午前八時二十分より始まつた。萩在住知名の士、舊恩師、同窓生凡そ五十名參集。

學校長の式辭、萩市長代理羽仁市役所助役の祝辭代讀、同窓會代表竹内八郎氏の祝辭あり、終りに本校使丁飯田常太郎山下捨松兩君の永年勤績表彰式あり、飯田君は勤績三十六年七ヶ月、山下君は拾八年五ヶ月兩君とも感激深き面持であつた尙創立三十五周年記念事業としては、本校歴代學校長の寫眞を合併教室に掲ぐる事にした。

#### 式辭

本日茲ニ本校創立三十五周年記念式ヲ舉行スルニ當リ多數ノ貴賓ノ貴臨ヲ忝ウス本校ノ光榮何モノカ之ニ如カンヤ

抑モ本校ノ淵源ヲ尋ヌルニ今ヲ去ルコト二百十四年前享保四年舊藩主毛利吉元公ノ創建セラレタル明倫館ヲ母校トナス爾來星移リ名改リ明治三十二年山口縣立萩中學校ト稱セラルコレヲ本校ノ創立トナス年ヲ閱スルコト方ニ三十五年有爲ノ人材ヲ出三千人ニ垂ントス校舍内容ノ設備整頓シ質實義勇協同ノ校風樹立スコレ地方人士ノ授助ト過去及現在ニ於ケル職員生徒ノ努力トニ職由スルモノト云フヘシ

願フニ萩ノ地タル北海ノ僻陬ニ在リテ三面阻絶シ外界ノ刺戟鮮シト雖モ三百餘年前我が天樹公ノ城キシ處明治維新ノ際偉人傑士ノ輩出セン地ナリ之ニ加フルニ山紫水明ニシテ風光ノ美茲ニ鐘マル精神ヲ修養シ心膽ヲ鍛練スルニハ洵ニ地ニ優ルモノアリサレハカ、ル麗ハシキ風光ト美ナル歴史トヲ有スル地ニ生長シ來リテ本校ニ教ヲ受クル者克ク義勇ヲ重ンシ質實ヲ尙ヒ協同事ニ從ヒ刻苦勉勵神國ノ幹トナリ 上ハ國恩ニ酬イ下ハ先賢ノ偉業ヲ紹カスシテ可ナランヤ一言以テ式辭トナス

昭和九年十月十八日

山口縣立萩中學校長 河 内 才 三

#### 祝辭

本日山口縣立萩中學校開校三十五周年記念ノ式典ヲ舉行セララルニ當リ參列ノ榮ヲ得タルハ最モ欣幸トスル所ナリ由來本校ハ日本海沿岸ニ於ケル本縣唯一ノ中學校トシテ建設セラレタルモノニシテ附近ノ子弟ハ勿論遠ク風ヲ望ミテ來リ學ヒ業ヲ卒フル者既ニ三千ニ垂ントシ社會ノ中堅人物トシテ活動セル者蓋シ鮮少ナラス而カモ校運益々隆昌ニ向ヒツ、

アルハ洵ニ慶賀ニ堪ヘサル所ナリ

願フニ教育ハ國家百年ノ大計ヲ定ムルノ基礎ニシテ往年ノ萩カ能ク維新發祥ノ地トナリシハ畢竟教育ヲ重要視セル先賢ノ賜ニ外ナラス就中松下村塾ノ教育ハ時代ノ推移ト共ニ益々其ノ光輝ヲ放チツ、アルハ直ニ我カ郷土ノ誇タルノミナラス之ヲ典型トナシ國家有國ノ村幹ヲ養成スルニ努ムルハ又實ニ我カ郷土教育ノ本旨ナルヘシ

今ヤ國家ハ人物ヲ翹望スルコト恰モ大早ニ雲霓ヲ望ムカ如ク郷土ノ先輩亦本校生徒ノ將來ニ期待セラル、處甚タ切ナルモノアリ

翻テ既往ヲ顧ミ進テ將來ヲ念ヘハ本校ノ責任亦重且ツ大ナリト謂ハサルヘカラス

冀ハクハ現下ノ非常時局ニ鑑ミ深ク時勢ノ要求ヲ察シ益々本校ノ實績ヲ顯揚セラレ以ツテ皇國使命ノ遂行ニ貢獻セラレ

ンコトヲ聊カ所感ヲ述ヘテ祝辭ニ代フ

萩市長

豊

田

勝

藏

祝

辭

教育ノ振興ハ防長ノ藩是ニシテ近世人材ノ輩出セシ事正ニ天下ニ誇ルニ足ルモノアリキ 而シテ我カ萩中學校ハ防長教育ノ中心タリ 人材ノ淵藪タリシ明倫館ニ濫觴ヲ發シ創立以來春風秋雨此ニ三十五年其ノ間卒業生ヲ出スコト二千四百餘名防長傳統ノ精神ヲ發揮シ邦家育英ノ業ニ盡セン功極メテ大ニシテ今尙年ヲ追ウテ校運隆盛トナラントス 寔ニ慶祝ニ堪ヘサルナリ

惟フニ母校ノ今日アルハ聖代ノ餘澤ニ依ルハ勿論ナレトモ又地方先進ノ寄與ト母校職員ノ熱誠トニ職由セスンハアラス我等卒業生カ各自安ンシテ今日其ノ職務ニ盡シツツアルモノ亦母校教育ノ賜トイフヘシ 我等ハ本日此ノ祝典ニ列スルニ當リ平素ヨリノ感謝ノ意ヲ表明セントス

今ヤ國際ノ時局ハ日ニ益險惡ナラントス 教育ノ振興カ國家ノ隆替ニ關スルコト至大ナルヲ思ヘハ此ノ際母校ノ益隆昌ニ赴カンコトヲ冀ハサルヲ得ス 我等ハ母校ニ對シ熾烈ナル愛好心ヲ有スルモノナリ 母校ノ隆昌ヲ冀フモノハ更ニ母校職員各位ノ盡瘁ト在校生諸子ノ黽勉トヲ祚ラサルヲ得ス 聊カ蕪辭ヲ述ヘテ以テ祝辭トナス

昭和九年十月十八日

山口縣立萩中學校同窓會幹事

竹

内

八

郎

祝

電

山口高等學校長  
山口縣師範學校長

岩田博藏氏  
山本昇氏

祝

辭

第十五聯隊附  
第三十三回卒業生

生駒林一氏  
田坂興道氏

表彰状

四四

山口縣立萩中學校使丁 飯田常太郎

資性謹直ニシテ明治三十年四月山口縣立山口中學校萩分校ニ職ヲ奉シ爾來前後ヲ通シ三十六年七月ニ及ヘリ其ノ間恪勤精勵能ク職務ニ盡瘁セリ今茲ニ山口縣立萩中學校創立三十五周年ノ式典ヲ舉行スルニ當リ其ノ功勞ヲ思ヒ置時計壹個ヲ贈リ之ヲ表彰ス

昭和九年十月十八日

山口縣立萩中學校校友會長 河内才三

表彰状

山口縣立萩中學校使丁 山下拾松

資性謹直ニシテ大正五年六月山口縣立萩中學校ニ職ヲ奉シ爾來勤績十八年五月ニ及ヘリ其ノ間恪勤精勵能ク職務ニ盡瘁セリ今茲ニ山口縣立萩中學校創立三十五周年ノ式典ヲ舉行スルニ當リ其ノ功勞ヲ思ヒ置時計一個ヲ贈リ之ヲ表彰ス

昭和九年十月十八日

山口縣立萩中學校校友會長 河内才三

記念大運動會

記念式後午前九時より記念大運動會に移る。今年ハ競技本位の例年と異リ興趣豊かな競争物を多くしたので非常な盛會で、其上快晴に惠まれて記録破りの人出であつた。五年の山崎内匠君走高跳に一米七九、棒高跳に三米六六、低障害に二七秒四と代ふ超中學級の新記録を出し觀衆を驚嘆させた。最後の呼物匪賊討伐の模擬戰は最近の滿洲に於ける出來事たる村上兼太郎氏的美譚を主題として作られたる物、煙幕を使い、生徒作製に係る三臺の紙製戰車が出動し、銃聲機關銃聲交錯して殊の外皆を喜ばせた。今年からは擴聲機が完備したので、五十回もあつた競技の運行上も都合がよく、場内整理餘興としての音樂放送等萬端滞なく進んだのは愉快だつた。

十一月三日のことなれば

日の丸のいたゞき高く翻る秋の眞ひるの瑠璃色の空

あらし後の三日月

解け結ぶ眞竹がやぶに風おちて三ヶ月かゝる雲のたえ絶え

大村武二



放送室

偶感

會長 河内才三

昔の昔その昔希臘にアンテウスと謂へる人ありけり。身の丈け二百尺、力人に過ぐれとも地を離ること寸餘に及べば忽ちその怪力を失ひて、凡人にだに敵する能はざりしといふ。さりや徒らに天をのみ慕ひて地を卑み、昔をのみ尋ねて今の世を忘るゝものは、何ぞ彼れ地を離れたるアンテウスに異なるなきを得んや。我が校創立三十五周年を迎へ所感となす。

前進前進また前進

特別會員 深町少佐

進み行く日本、目標は何處？ それは海のかなたに陸のかなたで平和に見せかけたあの洋服に臭き身を包み心は鬼の如く蓄生の如く利己主義一てんばりのあの國々だ。見よ陸軍の目標を、見よ海軍の目標を、陸海軍はあの目標が見えて居るからこそ真剣味のあふれた猛訓練を續けることが出来るのだ。

進み行く日本、聖日本の目標は皇道を天下に布くことだ。此の皇道に對し理解することなく邪魔し妨害する奴が居るならばその國の何れを問はず、その人種の何れを問はず、大海でも絶壁でも乗り切り、よぢ登りて世界人道のため三種の神器の御精神を振りかざして進むのだ。

さて汝の目標は？ この非常時を理解もせず、この進み行く目標も知らず、あき盲目の如く杖をたより人を頼りてあてどもなくその日を空しく暮しては居らぬか。

剽軍の如く海軍の如く強く正しき腹を定めて、人が何と云はうと他國が何と云はうと唯だ一とすじに皇國日本、聖日本のために一身を犠牲にしても皇國の目標に到達し得る如く今少しく活眼を開いて正しく前進をしては如何。

三十五周年を迎へて

特別會員 久保治之

學校の歴史として誇るべきものは校舎の古きではない。

美しき校風傳統的の學風と歴史を構成する一分子たる教を受けた人々のよりよき發展、有機的結合でなければならぬ。故に學校の古き誇りある歴史は教をうけた又受けつゝある各分子が之を樹立し且之を己の内に持つてゐることである。然してよりよき發展とは何か、空間的的發展活動これも成程必要である。而しこれのみでは眞の發展とは云へない。ギリシヤのアレキサンダー大王の如く世界を征服しても己に打ち勝つことの出来ない活動では駄目である、深みのある發展でなくてはならぬ、間口は廣くても奥行のない家ではそんな人生では全くとるところはない、間口も廣く然も奥行の深い深みのある人生こそ尊いものである、價値ある人生である、自己内省に依つて益々自己の内部に浸入して行くと言ふことが人生に最後の價値をつけるものである。蓋し自己内部に深く浸入して行けば行く程純なる自我を認め功利的の色彩は消えて善のために善を働く愛のため愛するところの何等方便としての活動ではなくなる爲にせんとする行ひ程不徹底に終るものはない。松陰先生の永久に生けるを見よ、なされたすべてが自己の爲にせんとす



る方便でなかつたからである。

自己の精神の奥底に貫通してゐる純粹の流を認めよ、そして之によつて美しき傳統を守れ、よりよき校風を樹立せよ、方便としての行ひは止めよ。方便としての勉強は止めよ、かくして將來發展の素地を培ふことに邁進せよ、此が三十五周年を迎ふるに當り諸君の又自身のなすべき只一つの道ではあるまいか。

## 所 感

特別會員 岡部 常一

我が校の第三十五周年をお迎へ致して誠に慶賀の至りに存じますと同時に、將來益々校運の振興と特色の發揮とに精進せんとする一人であります。

幸此の機會に於て不肖の存任せる過去十五年を回顧しますと幾多の感想がしきりに起りますが、就中生徒等の愛校心の輕重が校風の發揚に大なる關係ある所以と信じます故一言以て希望を述べ置く次第であります。

## 三十五周年に因みて

特別會員 津村 義男

時の流は、すべてのものを解決する——斯かる見方もありませう。

流れるのが水で流すのが筏士。筏士は、よく水の性を知つて、筏をやります。一事が萬事心すべきこと。

萩中創立三十五周年——まさに流れてゐるぢやありませんか。

## 本校三十五周年を迎へて

特別會員 兒山 茂

燃ゆるが如き意氣

國家非常時!! 頻りに叫ばれてゐる言葉である。國家非常時! 其の理由は五指を屈しても尙餘りあるであらう。

しかしその理由の生ずる原因如何。「日本が強くなつたら。」「まだ〳〵強大になりさうだから。」「歐米諸國が

## 所 感

特別會員 玉井 世履

先般の風水害は内務省警保局九月二十八日午前八時公報によると全國で死二五九三人、傷一三九〇人行、方不明五六三人、家屋倒壊流失浸水四三一〇一五、學校被害三二七校其の他先には旱害冷害あり非常時も大分切迫した。

## 追 想

特別會員 河野 通毅

本校の創立は明治三十二年で、當時自分は中學三年生であつた。江向の今の明倫小學校の校舎から堀内に引越して行つた。當時は萩の目抜の田町筋に電信線が四本しかないといふ時代であつたから、唯今の校舎のあの二階建の本館は實に堂々たる大建築物の如くに思はれた。實に今から三十五年前の事である。明治三十四年に校友會雜誌の第一號が發行せられた。當時五年生であつた自分は先生の命で知

高調する次第である。

高調する次第である。

己論といふ一文を投書した。其の校友會雜誌も已に三十三號を發行する事になつた。實に隔世の感がする。往事茫々夢の如く、時々運動場に立て指月山を望むと妙に感傷的になつて来る。自分と其の子と、父子二代を育てたのが此の校舎である。自分は愛着の情では誰にも劣りはしないと思つてゐる。

## 所 感

特別會員 田中秀一

今日では天才といふものを考へることが出来ない。しかし我々は各自の努力の程度に應じて如何程でも所謂天才の域に接近することが出来ることを忘れてはならない。

## 歩 ぐ

特別會員 齋藤章

ピツケルお供に山に登ること數年。北アルプスの豪快、

九州の山々の優美、或は富士の崇高と毎夏何處かの山頂に立つて大自然を征服したんだといつて威張つて来た。何故山に登るか。山に登つて何が愉快だ。それは始めて河豚を喰つた者のみ知る味と同じだ。曰く云ひ難し先づ一度登つて見よだ。

登山にキャンブは付き物と来る。高山の露營も詩的素的だが、海岸のキャンブにも捨て難い趣がある。まだほの暗い内に起きて魚の安眠を妨ぐる又快なる哉だ。

秋の一日リュックサツク背に親しい友と山道を歩く。眼に映つるは澄んだ空、山紅葉、純な村人、自分の心も自ら澄んで来る。かけて峠路を行く楽しさ。高い空が段々低くなつてやがては下になり、急に眼界が開けて新しい村が見える。

朝露にぬれにし裾をほしもせで別れし君は峠路を行くたしか萬葉にそんなのがあつた筈だ。

歩け、山を野を峯を峠を、理屈屋は心身の鍛練と云ふが矢張り河豚の味だ。

## 所 感

特別會員 東久雄

名實共に天下の萩中學校たらんが爲には如何なる覺悟を要するであらうか、三十五週年記念日に際して諸君と共に篤と考へて見たいものである。

## ジオメトリー及びジオメ

## の起原に就いて

特別會員 岩本益雄

幾何學は今から五千年前エジプトに起つたものであつて土地を測量することを目的としたため、之を測地術と言つた。幾何學即ち Geometry の Geo は土地を意味し、metry は測るといふ意味である。

エジプト文化の中樞をなすナイル河は、年々歳々、降雨期に河水が氾濫し、流域の土地を破壊した。そこで復舊工事を起し、耕地の整理、道路の設定、租税の徴收等のため

精密な測量によつて、土地の廣さや境界等を調査する必要が起つた。實に幾何學は此の自然の要求から發達したものである。

私が始めて當校に奉職したのは大正十四年四月七日で、最初の授業は三年の幾何であつた。生徒は生れて始めて習ふ學科ではあり、又その先生は新任で、學校出だちのホヤ／＼と云ふ譯で、餘程興味を以て私を迎へたに違ひない。

「幾何學は英語でジオメトリーと云ふ。」との第一聲が起原となり、早速ジオメトリー、略してジオメと云ふニツクネームをつけられてしまつた。それから十年の歲月を経た今日に至るも尙ほ之が通用されて居る。

## 釣の醍醐味

特別會員 山本博

魚の大と小を問はず、糸を銜へてグン／＼曳いて行く時と、うまくアハして釣り上げる瞬間までの快感が、私をして海に最も大きな關心を持たして呉れた。澤山とること

が目的ならば網を用ひたらい。だが網にはこの魅力はない、勤くとも一本の絲に自分の注意力を注ぎこんで、眼に見えない水中の釣の餌に集つてゐるであらう魚と、その大きさを想像してゐる時に、そして竿の尖が微かに動く時に俄然注意力は緊張の極度に到達する。私はこの注意力と緊張の精神を味ひたいばかりに、暇のある限り磯へ出かける。この醍醐味を私に教へて呉れた萩の海に、私は限りない感謝を持つてゐる。ボンヤリと運動場に立つて諸君の活動を見てゐる時、諸君の全部がチヌに見えることすらある田の蛙が古墳に見えた考古學の醍醐味と共通するであらう。

### 蛙の教

特別會員 安部 豊明

小野道風は蛙の柳に跳びつくを見て、努力の結果書道の大家となつた。ロバート、ブルースは蜘蛛の巣を作る根氣に教へられ、立つて外敵を撃破し、蘇國を泰山の安きに置

いた。何れも無心の動物に教へられて、自己の蒙を克く啓いたのだ。常に苦心する者には、必ず行くべき指針を授かる。西諺にも「意志のある處道あり」とあるではないか。

### 所感

特別會員 福田 照夫

日章旗はへんぼんと翻り、大空の底深く、花火が轟き渡つた。記念歌がゆるやかに校庭を流れ、そして、小使室では、主のやうに住み古りた飯田が、記念の置時計を抱いて顔をゆがめ泣いてゐた。

### 偶感

特別會員 山川 恒久

今朝も出がけに海邊を見れば鴨が居ります五六びき。射ちたいけれど時間がない。

### 祈り

特別會員 山口 季吉

バーナード・ショウが會つて「多くの人は祈る (pray) のではない、乞ふ (beg) のだ」と云ふ意味のことを言つた。近時我國に宗教復興の機運が起つて、ラヂオに、出版に、甚だ隆んなものがある。これは個人主義と唯物主義とに於て、唯不安焦躁しか得なかつた現代人が、靈の故郷を求めて彷徨う姿である。だが一體、禁斷の木の實を喫した現代人が、眞に自己を空しくして祈る敬虔な心持になり得るかどうか。「現代人と祈り」斯う並べて見ると随分隔絶した感ある語の組合せになつて來る。然し事實は、人間の求める處に満足はなくして、求めざる處、自己を否定する處、祈る處にのみ満足がある。加之、總て人間の事業は宗教に迄高められるのでなければ、偉大なものにはなり得ない。我國の學校教育に、安教的要素を加味する事の必要が唱へられ出したのも當然である。

高慢邪惡を棄て、謙虚にならう。其處に祈る心が生れ、

現代が救はれるであらう。

### レコード

特別會員 池田 文雄

本校の陸上競技の記録も年々に更新せられて行く。之を本縣中等學校公認記録と比較すれば、

	縣公認記録	本校公認記録	
100米	11秒	11秒2	松岡 巖
200米	23秒4	24秒	能美 誠一
400米	54秒4	55秒	田中 茂一
800米	2分9秒	2分9秒4	來島 秀男
1500米	4分32秒2	4分44秒6	中村 四郎
5000米	17分21秒4	17分18秒1	大谷 仁三郎
低障	27秒	27秒4	山崎 内匠
障九	12米62	12米30	米廣 松王
圓盤	33米37	33米80	近藤 信一
走幅	7米02	6米45	田中 茂一
走高	1米81	1米79	山崎 内匠
三段	13米57	13米32	大田 肇
棒高	3米65	3米66	山崎 内匠
400米繼走	46秒4	47秒2	(岩城吉岡富田山崎)
1600米繼走	3分42秒6	3分44秒2	(田邊山崎杉原田村)

## 川 柳

特別會員 尾崎 信一

學問に國境のない恐ろしさ

五四

## 堀内の地理的斷片二三

特別會員 岡庭 秀男

我等の中學校は堀内にある。此處で中學校生活を送り、又送りつゝある者にとつては、此の地の懐しさ、思ひ出には又一しほのものがあらう。創立三十五周年に對しては僅四年餘の生活に過ぎないが、此の年月を送らんとして居る私には、堀内の地理的印象は興味深く忘れ得ないもの一つである。以下堀内の地理的特色、地理的姿相の二三について語つて見よう。

### 昔の面影

堀内の地域的特色の一つは、取り残された惣門、土壁、お長屋、夏橙畑の中に散見する古風の井戸等、昔の面影を

### 住 宅 區

堀内は萩市の住宅區として、これを把握する事が出来やう。時代の流は城下核心的地域だつた堀内を近代的住宅區に變へようとして居る。昔の邸宅跡、商業街としては位置の偏在してゐる事、良好な飲料水、静けさ等は住宅區として恰好の地域である。土壁に變るコンクリート塀、鐵門、改築された木の香の新しい住宅漏れ、來るラヂオ、蓄音機の音は、住宅區として近代化されて行く堀内の姿ではあるまいか。

### 指月公園と菊ヶ濱

春の指月と夏の菊ヶ濱は、季節的にはあるが堀内を保養遊覽的地域と化す。靜から動、昔風から近代風の堀内へ

此の時が堀内道路の交通量の最も大なる時である。臨時に運轉されるバスの警笛と砂塵と雑踏に静けさが打ち消されて行く。實に指月と菊ヶ濱は堀内の地域性にとつて特異な存在である。

### 夏 橙

堀内には夏橙畑が多い。昔のお屋敷跡が利用され、排水の良い砂地、而も氣溫の和らげられる海濱、堀内は秋夏橙の重要産地である。夏橙收穫期の堀内風景は堀内の産業的機能を明示してくれる時である。これが消費的靜的住宅區としての堀内に對して、生産的動的堀内の地域的現れである。

### 靜かな地理的環境

昔の面影に配するに、どつしりと坐したお城山、靜かな住宅、指月と菊ヶ濱、常緑の夏橙、四季によつて動靜の變化はあるが、總じて堀内の地域性の中には、靜けさと奥床しさが求められ味ははしないか。

此の靜かな地理的環境にあつて中學校生活を營み來ると三十五周年、其の間の靜けさは多くの人達にどんな感化

を興へたであらうか。

而し此の静けき地域性が變へられる時があるとするれば、堀内にどんな文化營力の作用しかける時であらうか。

## 創立三十五周年と緑化主義

特別會員 岡崎 正信

緑は野原の色であり、海の色であり、大空の色である。植物の緑に包まれた中で朝夕各自に興へられたる業務に従事する事の出来るのは、吾人の生活に大なる潤ひを興へ、吾人の精神に大なる落付を興へる。同時に其間無限の感喜と幸福に浸ることが出来る。

本校創立以來既に三十有五年、其間各種の記念事業として、或は植樹が營まれ、或は築庭が設けられ、最近各處に花壇が設けらるゝ等吾等の學園の周圍は年と共に緑化の實現を見つゝあるは心から喜びに堪えぬ。

然し私はこの平和的にして奥床しさを豊富にもつ緑化主義を學園より各家庭へあまねく推弘めたい。永遠に記念す

五五

べき三十五周年を契機として、永久に返えらぬ中學時代の  
思出の爲に、各自の家庭の周圍を校友諸君自の手で緑化さ  
れんことを切に奨むる所以である。

## 所 感

特別會員 森 本 徳 雄

今年初めて草花の球根を植えて毎日見てゐると、やがて  
可憐な芽が小さいながらも力強く土壌に龜裂を作つて出て  
くる。その生命力の若々しさに感歎した。

明日に生くる者達よ。嵐と寒苦を凌ぐ強靱な忍耐力を以  
つて、利根的な享樂、頹廢、自棄を揚棄し、今日を明日へ  
の基礎たらしむべく努力し勵め。

太陽の光輝と大空の朗朗は永遠に、明日をめざして生く  
る者にとつての祝福であらう。

## 所 感

特別會員 三 上 純 象

八月四日

自轉車を驅つてK君とO君と碁を圍みに行くことにした  
いざ出發といふ時にO君の自轉車がバンクしてゐるといふ  
ので、とある自轉車屋にいつた。ところがその小僧さん  
年にしたら十三四才を越えまい、それがなか／＼おちつい  
てゐる。此方はすきなところへ行くのだから心がせく、O  
君などお金まで出してちやんと待つてゐる。それにお小僧  
さんはタイヤからゆつくりチューブを取り出す。先づムシ  
ゴムを新らしくする。水を持つて来る。ゴムを切る鉄をた  
づね廻ることが頗る丁寧。その落ちつき拂つた態度、待つ  
てゐる人の氣持など、てんでお構ひなしといふ風である。  
何でも二十分あまりでやつと出來上つた。

然し使はれる身になつて見ると、先づ主人の命令は絶対  
的服従だ。身體にはいつも餘裕がなければなるまい。無暗  
と仕事を急いだら朝から晩まで、到底やりきれない。

り人生は不如學と思ふ。

## 所 感

特別會員 須 子 五 郎

萩中もスコブル發展したものだ。うちからも子供が一人  
中途で幼年學校に行き一人は卒業し、一人は卒業しかけて  
ゐる。スコブルお世話になりました。

この夏トマトを栽培した。花がつくだけ實が結ぶかと思つ  
てこれは剪鋳しなければいけないなど思つてゐたら、花が  
ポツリ／＼と落ちる。造作はない。自己調節を立派にやつ  
て行く。

使はれる人間もこの自己調節が必要らしい小僧さんなど  
誰が教へたといふわけでもあるまいが、立派にこの調節を  
やつて行く。お小僧さんは偉い。

## 偶 感

特別會員 三 輪 易

暗くなつた。南明寺の灯が見える。あゝ家は遠いよ。

## 不 如 學

特別會員 野 田 淳 一 郎

是は或小學校の玄關に掲げてあつた額面の語を思ひ出し  
たのである。學成り難し、なか／＼勉強は進まないがやは

## 所 感

特別會員 中 尾 彰

愛の心を以つて草花の萼を見ん、花瓣を見ん、蕊を見ん  
花粉を見ん、枝を見ん、根を見ん、而して匂を嗅ぎ、蜜を  
舐めん。然らば我等は容易くその精に觸れるであらう。

## 三十五年前の思ひ出

特別會員 木津谷泰夫

私は本校開校の年に第一年生として入学した者であります。校長さんは雨谷丞太郎氏と云ふて寡言實行家の方でした。元本校教諭で四方に薫りをの記念歌の作者なる安藤紀一先生も開校と同時に明倫小學校の校長さんから本校に教鞭を取らるゝ事になりました。其當時の先生は今本校には一人も居られません。生徒数は一年より四年(當時は五年生なし)を通じて参百五六十名位にて學級は一、二、三年が各二つ四年が一つ位なりと思ひます。

現在の講堂の所には小使部屋があり、合併教室が元の講堂でした。寄宿舎の建物などは無論無くて、彼所邊は運動場でありました。今の運動場は其後買ひたされたものであります。門衛所にはラツパ手が居つて始業終業を唳々とラツパで報じたものです。士氣を鼓舞するには中々よいものです。現今の様に理科實驗室、工作々業場、農園等の設備は無論ありません。今日では施設萬端結構にて研究にも至

五八  
極便利ですから、學生諸君は奮勵一番大に其目的に向つて一路邁進せられん事を祈る次第であります。

## 開校三十五周年所感

特別會員 八木澤 元

高 開 巍 然 聳 半 天  
俊 髦 來 學 繼 前 賢  
追 思 三 十 五 年 事  
松 下 遺 風 今 尙 傳

## 鬚の自叙傳

特別會員 村岡徹介

十八で生え、十九で立てて、今は剃つたり伸ばしたり。

## 繪畫は單純化へ

特別會員 水沼兼雄

純粹な繪畫は、目で讀むものでもなければ、物を知らせるため、説明するための挿繪でもない、あくまでも只見られるためにのみ、描かれるべきものである。

どんな作家にしても、何れの畫派にしても、純粹な繪畫にしようとして、企てないものはないであらう。けれどもこんな簡單な問題がなかくに行はれないのである。

試みに近世の美術史を掃いて見ても、繪畫が宗教のために描かれたり、國王のため、一貴族のため、或は博物館や記録のために、描かれてゐる事に氣附くであらう。十九世紀末のモネーや、ピサロでさへ目に映じたまゝの自然を記録しようとしてゐるのである。

其れがセザンヌの反省に依つて漸く、繪畫を本道へ立ち歸へらしめる事が出来たのである。此のセザンヌやゴッホ、ゴーギャン、などの繪畫は強烈な個性と藝術的自我と自覺との上に築かれたもので、此の後を承けて現代の繪畫は

目覺ましい進展を見せたのである。

人は現代の繪畫を見て驚くべき教育の不足だと見たり、又粗暴な外形の破壊だと見るかも知れぬが、それは外面的な見方で、未だ繪畫の本格に觸れぬものの、見方である。現代の繪畫は決して教育の不足でもなければ、外形の破壊でもない、其れは作家の強烈な感激を表現する繪畫の効果として生れて來た必然的な要求である。見る人は其の感激が如何に高い精神を持つてゐるか、又如何に深かい繪畫的精神の醗酵であるかを、知らねばならないのである。

藝術が外物の模倣ではなくして内的精神の表現であると、いふ自覺は必然的に表現の單純化に導いたのである。即ち内的精神を表現するために、表面的に小細な屬性にとらはれずに「單純化された線」に依つて感情の純眞さを出来るだけ簡單に、効果的に表現することを考へる様になつたのである。

これは單に線のみ止まらず色彩に於ても構圖に於ても此の精神に醒める様になつたのである。  
繪畫と言はれるものは自然を寫眞の様に忠實に模倣再現

するものではなく、純粹な美的感覺を持つ線と色彩とに依つて畫面を構成するにあると云ふ思想は益々最小限の手段を以つて最大限の表現的効果を獲得せんとする要求！即ち單純化に進まねばならないのではなからうかと思ふのである。

### いが栗

特別會員 久永祐藏

栗の小枝の いが栗は

ちら／＼光る 青い陽に

ちら／＼かける 青い葉に

坊やと二人 見て居れば

さびしいさびしい 山の中

栗鼠でもちよつと 降りて來い

僕も此の壯舉參加者の一人なのだ。如何に辛くとも、苦しくとも、最後まで頑張り通す決心である。  
あゝ、秋空高く翻へる日章旗よ。見よその雄々しさを。

### 三十五周年を迎へて

一年 森重龍馬

我が萩中學校は創立以來はや三十五星霜を経た。此の間、此の校門を潜り、此の校舎に學んだ人々は、はた幾千人あつたであらうか。其の中には、此の非常時日本を背負つて或は陸軍に海軍に、或は政界に學界に、活躍して居られる人々もあるのだ。

我等若人の心は、此れ等の譽ある先輩の事を思ふ時、將來の希望は犇々と胸に迫り、何んとなく勇氣が湧き出るのを覺える。

我等は此の思ひ出深い三十五周年を迎へると共に、過去三十五箇年間に幾多の先輩の飾られた榮譽ある萩中の歴史を續ける爲めに、又國家の爲めに、大いに勉勵努力しよう



### 三十五周年を 迎へて

一年 田中 寛

英雄の地！ 聖賢の地！ 史蹟の地！ 名勝の地！ 榮えある萩その西方にそびゆる指月山。元は毛利公の城五の天守閣のそり立つところ、その下に立つは、我が萩中學校。あゝ由緒ある我が萩中の、その校舎は古いけれど、その中で學ぶ健兒の雄々しさよ、こゝに三十五周年を迎へ、健兒の意氣は躍り立つ。

頃は稻穂もみのる十月の十八日、神嘗祭の其の翌日、あゝ譽ある萩中。この榮えある日、運動會並びに展覽會を開催するといふ。この壯舉耳に聞き目に見て、心はいよ／＼勇むではないか。

時は恰も非常時、數百の健兒の心は今有頂天に達してゐる。然し決して喜悅亂舞の裏に潜む緊張を忘れては居らぬ

ではないか。  
あゝ三十五年の間、人は去來し、時は推移した。けれども我が萩中の譽は、阿武の清流と共に永遠に盡きせぬものである。

### 三十五周年に際して

一年 古谷佐一郎

「色に花咲く萩の名の、中學校と呼びそめし……」  
昨日も今日も、かうした記念歌が、運動場の隅から聞えて来る。三十五周年記念日は、もう其處に來てゐるのだ。  
本校の記念日は、十月十八日であるが、今年は特に前日より展覽會があつて一層賑はしい。  
萩中が建設されて、はや三十五年の月日は流れた。その間各方面に傑出し、各方面に活躍せられつゝある幾多の先輩は、燃ゆるが如き愛好心のもとに、光輝ある歴史を築かれたのだ。汚すべからず、損ふべからざるは、此の歴史である。

三十五周年を祝福すると共に、後輩の一員を承つて、すべてに努力精勵しよう。

### 創立三十五周年

#### 記念日を迎へて

二年 末永太一郎

どーんぱり、と突然四隣の静けさを破つてのろしが上つた。おや？ あつさうだつた！ 今日十月十八日而かも萩中創立三十五周年の意義有る日だつた。  
しかしつく／＼考へて見ると、此の様な記念日に一度も會はずに卒業した者もあるであらう。さう思ふと僕等は、大へん幸福である、そこで「僕等は一層の努力をして質實義勇をもつて學徳を勵まねばならない」と思ふと急に全身に力が入る。  
蒲團を蹴つて飛び起きると障子を明けて見晴し臺に出た冷たい風が頬を撫でる、夜はもうすっかり明けて朝だ、すが／＼しい朝だ、日本晴に晴れ渡つた空、天も今日を祝つ

てくれるのだらう？ 僕は今日學校から歸つて記念に松を植えよう、と思ひながら階下へ降りて行つた。  
新しい朝だ身も心も。僕はさう思ひながら、よろこびの學校へ向つた。運動場に出て見る、鮮かな白線が足下から眞直に遠く延びてゐるのは、僕等の前途の希望のやうである。

### 創立三十五周年を迎へて

二年 日野公德

我が校は三十五周年記念祭を迎へた。外では大運動會、内では展覽會が催され、空に響く狼火の爆音、地には歡呼の聲、静かな秋の日を破つて、此の學を祝福してゐるやうであつた。回顧すれば此の榮ある我が校を卒えて、武人となり、文人となり又實業家となり、世界人類の福祉に貢獻せんとする崇高なる根本觀念の下に活動してゐる多くの先輩の士も、此の運動會で體を練り、此の展覽會に成績品を出品したのであらう。時恰も、我が國は非常時である。此

の非常時の日本は、何を待ち望んでゐるのであらうか。我等の「勉勵」「努力」である。此の機に當り、此の一大決心を固めてます／＼我が校の精華を祈つてこそ、非常時の打開となり  
創立三十五周年を迎えた眞意義があるのである。

### 創立第三十五周年を迎へて

二年 大田頼久

橙の葉ゆらく水郷の萩は、明治維新の發祥地としてあまりにも天下に有名である。此の地にある萩中に、我々がはいつて光輝ある創立三十五周年記念日を迎へたことは、大變うれしいことだつた。其の記念日に盛大なる運動會が催された。前日までは、雨がふつたり止んだりして、運動會は出來まいと、僕等に思はせた雲も、當日はからりと晴れて、日本晴であつた。朝は大變寒さが激しく、身體を寒さがつらぬく様であつたが、舍生は朝早くから、協同一致して、コースを引いた。まもなく記念式が終り、のろしと共に



に、第三十五回開校記念大運動會が舉行せられた。

六四

### 三十五周年記念日を迎へて

三年 小河 博

浦賀灣頭一發の砲聲に世人の迷夢は破られ、王政復古の旗幟の下、東西に奔走し、一躍今日の日本を築いた英傑は我が萩の一角から續出した。此の誇示すべき松下村塾の精神を繼承する學舎は何處に。いふまでもなく我が萩中でなくてはならぬ。

考ふるに、我が校が、諸先覺、諸先生、諸先輩の獻身的努力により、巴城の地に、色に花咲く萩の名の中學校と呼び初められてから月日は流れて今や三十五星霜を経た。我が校は實に此の榮ある歴史を背景に、後には指月舊城を控へ前には阿武の洋々たる流を控へ、輝かしき現在及び將來の飛躍を物語つて意氣軒昂たるものがある。

今や我が國は政治に、經濟に、外交に、或は思想に文字通の非常時に際會してゐるのだ。此の難事を打開し、進ん

で國家の隆昌をも扶翼すべき者は誰ぞ。それは松陰先生の血を受けた我が萩中健兒の重大なる任務だ。

立たう、質實義勇協同の校訓を頭上高く標榜して、就さう昭和維新の大業を。歌へ、大和男子の歌を、盛へ行く校運、盛へ行く光輝日本の足踏みに合せて。

徒には立たじ、學びの道に。

徒には讀まじ、千卷の書を。

文の林に、花は咲くとも。

實を結ばずは、何にかはせむ。

### 三十五周年記念を迎へて

三年 梅屋 薫

萩の一角、指月山の麓に、我が校が創立せられたのは、實に明治三十二年のことであつた。

三角洲上に春は幾度か去來して、早くも茲に三十五年の歲月が流れた。今や當時の芽は延びて太い幹となり、枝葉繁茂し、美しい花を咲かせようとしてゐるとも言へる。

十月十八日には壯嚴な記念式や盛大な運動會や大規模な作品展覽會が催された。然し我等は單にそのやうな形式的なもので満足してよからうか。

私は思ふ、記念の眞意義は我等の心に在ると、即ち學業に勵み、運動に勉め、名譽ある我が校の生徒として恥しからぬ者となることである。更に我等は充分に努力して母校の歴史を一段と光輝あらしめねばならぬ。これが三十五周年記念を祝する眞の方法ではなからうか。

### 三十五周年記念日を迎へて

三年 日 溪 靱 負

茲に我が萩中學校が創立三十五周年記念の日を迎へたことは、我等六百の健兒にとつて、等しく喜びに堪へない所である。

顧ふに我が校は明治三十有二年十月十八日、維新に數多の傑物を出した萩の地に、孤々の聲をあげたのである。松陰先生の後を受けた第二の松下村塾たる我が萩中は、爾來

幾多の英才を生み出し、縣下有數の學校となつた。

斯く多くの偉大なる先輩を送り出した本校に、その後を受けた我々は、名譽ある我が校の歴史を傷つけぬよう細心の注意を拂はねばならぬ。

### 創立三十五周年記念日を

迎ふるに當りて

四年 福 永 義 晴

今より三十五年前十月十八日本校は山口縣立萩中學校として又に萩に於ける唯一の中等學校として勇ましくも誕生したのである。

我々は今此の古い歴史と傳統を有する本校に於て學を受けて居る。此は我々の誇であり且又名譽である。然して我々は此の名譽を傷けない様に傳統を破たない様に努力せねばならない。第三十五周年記念日を迎ふるに當りて更に強く此の思を深うする。

我等の先輩は如何にして此の誇を持續して本校を今日あ

らしめたか又我等は如何にすれば、此の傳統を後輩に傳へ得るか、其はたゞ秋中精神に立脚し質實・義勇・協同の校訓を守りて勉勵努力する外はないのである。

### 創立三十五周年記念日を 迎ふるに當りて

四年 河村 定一

第二の松下村塾を以て任ずる我が中學校は今や三十有五  
星霜を経て由緒深い萩の地に嚴然としてその英姿を横たへ  
てゐる。

明治三十二年十月十八日の創立を記念するために舉行す  
る今日の記念式こそ、この學園に教へを受ける者には最も  
意義深いものである。我等の先輩もかゝる思ひ出の式を三  
十回餘も行つて深い感慨に強く胸をうたれた事であらう。  
我が中學が誇りとするは先づ士規七則である。我々はあ  
の維新の大事業を奮ひ起すに力のあつた偉人、松陰先生の  
志をついで、一日々々を徳の修養に努力してゐる。又日本

の聖地たる萩に我が學校の存在する事も亦大いなる誇りで  
ある。

我々は明治維新の英雄の郷土たる此の萩の地に於て螢雪  
の功を積む以上は必ず祖先に恥ぢぬ劣らぬ。

人とならねばならぬ運動場のポプラの若葉がそよぐ音を  
聞きつゝ先輩は體育に勵んだのである。明るい朝日の中で  
士規七則を唱へたのである。

嗚呼三十五周年。今我々は過去の歴史を誇りつゝ輝く未  
來の功績を作るために努力しなければならぬ。

我々は今日の記念日を祝すと共に母校の發展を祈るので  
ある。

### 創立三十五周年記念を 迎ふるに當りて

四年 吉屋 竹治

數多の偉人の出た萩の地に三十五年の星霜を経た我が中  
學校は輝く傳統の精神のもとに幾多の偉才を輩出した。か

うした由緒ある學舎に今日吾々は先輩の使つた机、先輩の  
踏んだ土の上に、ペンを走らせ運動をしてゐる。さうして  
みると我々には責務がある。先輩に負けない學徳と體力を  
養はねばならぬ先輩の名譽を苟にも汚してはならぬ。我々  
は唯ぼんやりと卒業してよからうか。學校の恩に報すべく  
努力せねばならぬ。天下に呼びかけた松下村塾の如く我が  
中學校を天下の中學校とせねばならぬ。講堂にある色褪せ  
た優勝旗を見よ。何を物語るか。

### 開校三十五周年大運動會

五年 西本 實

おい、君は何の役員か

通報係だ、樂なものだ。君は何か。

器具係だよ。

有難い役目を仰せつかつたな。

彼等は器具係を有難い役といふ。彼等の有難い役といふ  
のは有難くない役といふ意味だ。出来るだけ樂な仕事へ。

そして見榮えのよい、縁の下の力持を避けたがるのが人情  
の常かも知れない。

自分は此度始めて器具係になつた。しかし思つたより樂  
で面白いといふ氣がした。それは一つには物珍し屋の僕の  
心もあるが、又最後の運動會といふ心理も手傳つてゐたこ  
とは争はれない。自分は人一倍不精者だが、然し興味が湧  
くと骨の折れる仕事も苦にはならぬ。運動會の前日も皆歸  
つていつた後で障害物競争の色々の障害物を作  
日この障害物でどんな面白い場面が展開するかと思ふと、  
むづ／＼する様で仕事が獨りでに抄取つて行つた。

運動會の當日も爽やかな空気を呼吸しながら走りまはつ  
た。

「おいA君ハードルを出してくれ。僕はちよつと竹馬を  
準備しておくから。」

ハードルの競技がすむと次は竹馬の競技だ。

「おいA君次の障害物の梯子を持つて行かう。」

「おれも行くぞ」

とB君もやつて来る。器具係の者は皆愉快さうに立働いて

ある。やはり器具係の苦心は愉快な苦心であつた。

### 開校三十五周年記念式

五年 津野 一 二

僕は前に居る君を見詰めてゐた。汚れたカラーの上に灰色の産毛の生えた首筋のその赤黒い皮膚が火山のやうに圓く腫れ上つてゐる。窓硝子を透して秋晴れの太陽の光線が今日の恵まれた日を祝福するかのやうに射し込んでゐる。瀟洒な壇上から校長先生の暖れた重々しい聲がカーキ色の軍服や黒い紋服の上を通り越して来る。やがて紋切型の祝辭が朗々と羽仁大佐の明快な口から迸つた。急に又明るい光線が射しこんで壇上器物や屏や、人間までを神秘的に彩つた。僕のかうした式場にもあるまじき不真面目さは道徳的な理性を壓迫して、前に真面目に聴いてゐる君の首筋の火山に又しても視線をうつした。坐りつけてゐるこの講堂の腰掛にどうしたものか尻が落ち着かない。といつて式が早く済めばよいとは思つてゐなかつた。重壓的な言葉に

覆はれた祝辭は、僕にとつて大なる反應を起し得なかつた。轉校生といふ、いはゞ外樣的な僕の存在は、この祝典にいても學校の歴史と傳統とに漠然たる好意と誇りとを感じる位で、祝辭に述べられてゐる程の讚美的な實感が如何に努力しても發見——僕の精神の裏に——出来なかつた。それを偽つて迄も嬉しさうな顔は出来なかつた。過去の追憶より未來への建設と發展、母校の今後の躍進を祈る心は、さほど人後に落ちると思はないが、とにかくこの一見して矛盾してゐるやうな複雑な心理はどうしても自分には分析し得ない。もつと喜びたい、嬉しがりたいとあせるうちに僕にはお構ひなしに式はすんだ。

煙火が鳴つた。運動會だ。疑問を捨て、昂奮の中へ飛び込んだ。

### 開校三十五周年記念大運動會

五年 湯淺利夫

國旗掲揚！

體操の池田先生の聲が、周囲の靜寂な空氣を劈いて、我等の耳に滑り込んだ。と同時に全員を代表して各學年の首席伍長が、目的の國旗竿の下に駆け足で前進した。一同は鳴りを靜めて、國旗を注目した。國旗は徐々に揚り始めた。其の時である、擴聲機を通じて、嚴かに喇叭の「君か代」吹奏樂が流れ出たのは。

全生徒は神靈にうたれた者の如く、寂として聲一つなく眼は炯々として輝き、周囲の草木まで葉を垂れて聞き惚れてゐるやうであつた。やがて吹奏樂は終り、全員の「君か代」一唱が続いて始つた。

君か代は千代にやちよに……………

中天高く登つた日の丸は、さながら我等の開校第三十五周年記念を祝福するものの如く、秋晴の空にその全幅の英姿を顯した。あゝ偉大莊嚴な日章旗。我等は暫しわれを忘れて見つめてゐた。

夏日偶成

學半 河野通毅

炎熱不憂愛日長 薰風自入讀書堂  
三旬官暇娛無事 展采風忘一味涼



生徒作品

入學の喜び

一年 吉村弘章

試験も無事にすんだ。たゞ待ち遠しいのは二十九日である。

何日か過ぎ、やがて發表の日が来た。其の日は朝から試験の話で一ぱいだつた。正午も次第に近づいて来た。「かーん、かーん、かーん」時計が鳴り出した。もう晝だ。それから數十分の後には、もう僕は自動車に乗つて町の中を走つてゐた。暫くして中學校に着いた。

合格か。不合格か。心の中では其の事ばかり考へてゐる。

春はゆく

一年 内山博

あゝ、あの全盛を極めた春の大美觀も、「光陰は箭の如

し」の言に違はず、季は何時しか初夏に轉換しようとする時、春のか弱い微風は山野の草木に咽び哭き、此處に名残を惜しみつゝ、彼方の彼方に消え去らうとしてゐる。

紀元二千五百九十四年に其の精華を賞玩せられたる妖艶！ 美麗！ 天下の偉觀絶景を呈しつゝある頃、僕等の心に能力に疲労と倦怠を覺えるに當り、慰安の私語をして呉れたものが、今や季節の敗殘者となつた。

あゝ、春はゆく、夢の如くに、幻の如くに。

手に手を取り、勵まし合つた學友の感激ある春の日も、今は歸らぬ四季の旅路を辿りつゝ、刻々と過ぎ去つてゆくおゝ行く！ もう遙かの彼方に。

春はゆく

一年 小野七太

指月山より吹き下す風は、何んとなく我等に蒸し暑さを感じさせる様になつた。學校農園の夏蜜柑の花も咲き揃つて、我が校舎の窓に初

夏らしい氣分を注ぎ入れる。

彼方此方に續く山も、若芽一杯であつて、希望多き前途を待つて居るやうだ。

二三日前に聞いた雷鳴、それはあらゆる木の芽をねむりより醒ました様だ。蛙が、その仲間と聲を合せて鳴くのも、どうやら春を送り初夏を諷えてゐるやうに聞える。

「春の海ひねもすのたりのたりかな」の蕪村の句も今では其の一部分を味はせるだけである。

夕立

一年 吉富敏郎

どうも天氣が可笑しいぞ。遠くで鳴つてゐた雷が、近くに寄つて来た時には、もう大きな雨粒が音をたて、降つてきた。「カタビシ」と音をたて、忙しげに雨戸を閉めてゐた家の中が急に暗くなつた。

木の葉が躍るやうに揺れてゐる。近くの山が雨のために見えなくなつた。

トタン屋根から音楽が聞えるやうに面白い音がする。ど  
ん／＼と雨が降つて庭に川をつくつて、溜まつてゐた木の  
葉を流してゐる。  
遂に本降りとなつた。

### 新 涼

一年 山田松華

だらりと垂れた柳の枝が、幾筋も／＼ゆら／＼と揺れて  
ゐる。校庭のポプラは、一葉々々日光に反射してきら／＼  
と光る。櫻は春爛漫と咲亂れて人を呼んだ其の面影を、何  
處に秘めてゐるのか、今は黄色く染まつた葉がひら／＼と  
哀れげに散つて行くばかり。

空はあくまで澄み渡り、雲一つない青空を小鳥の群が過  
ぎてゆく。また軒下をすい／＼と飛んだ燕は？

此等はみんな新涼を思はせるに充分である。

リン／＼／＼と鈴を轉ろがしたような虫の聲、續いて傍  
の草むらでもギギと鳴く。さあつと氣持よい風が入つてく

る。その度毎に、カーテンが動き、柳の枝がゆれてゐる。  
淋しい沈んだ尺八の音が何處からともなく流れてくる。  
あゝ、涼しい夜だ。

### 秋

一年 山本一夫

もうめつきり秋らしくなつて、見る物、聞く物、みな秋  
の情趣を誘つてゐる。

道端に哀れつぼく餘生今にもつきそうに咲いてゐる夏草  
や、日毎に衰へを見て潤む蔓草など、又一段と秋を證明  
してゐる。

田一面を黄金の波と化してゐる稲も、今は頭を下げて何  
事かを私語きつゝさわめいてゐるのは、何處までも高く澄  
み渡つて時々雁の群を見る空とよき對象を示してゐる。

我々の心の奥へすき通つた氣高さと、凛とした快よさを  
打ち込んでくれるのも、秋特有なものであらう。  
身邊は皆涼しき秋だ。爽やかな秋だ。

### 新 涼

一年 森重龍馬

堪へかねし夏の暑さも漸く去りて、一雨ごとに涼しく秋  
が訪れ来る。

野外に出づれば、涼風をよ／＼と顔をなで、天高く氣は  
澄み渡り、二百十日を無事に過ぎし稻の穂は、さら／＼と  
鳴り、畠には、里芋の黒紫色の莖見事に延び、大いなる葉  
のゆら／＼と風に揺れる様、實に氣持よし。また光の中を  
赤とんぼすい／＼と飛びかふよし。

山の端に輝きそめし月影も、やがて鏡よりさやけく澄み  
渡り、千草にすだく虫の音の心地よさ。

あゝ、此の良き季節に、我等學びの窓に文を繙かむ。

### 叱 ら れ て

一年 河村康一

そろりと戸を開けた。

### 秋 を 歩 む

一年 廣瀬昇

ぶらりと土手に出て見た。秋の風がそよ／＼と僕の肌  
にふれる。其の度に落ち残つた櫻の葉が、枯れかゝつた草の

その時でした。母は僕をしきりに呼んでゐましたが、僕  
はその事には氣をかけないで外へ出ました。三十分ぐらゐ  
たつて家に歸ると母はゐなかつた。

お庭では、てふ／＼がさも嬉しさうに花から花へと體の  
むきをかへてゐる。それを見詰めてゐる時、何處からか歸  
つて来た母は、何故さつき呼んだ時、返事をしなかつたか  
と叱つた。僕は暫くうつむいてゐたが、「今から用事をし  
ます。」と言ふと、母は「もう用事は私がしたよ、」と言  
つてあちらへ行かれた。その時の母は、何時もの母ではな  
かつた。

過ぎた事は、とりもどしがつかないと思ひ、母にお詫び  
をすると、ゆくりなくも母は微笑んだ。

上にはらり／＼と落ちた。枯葉の蔭で蟋蟀が淋しく鳴いてゐる。

柿の木は實だけを殘して重さうにゆれてゐる。もう四邊の田は黄色に色づいて、雀が其處此處に一羽二羽と飛んで行く。

とう／＼太鼓灣まで来た。あの賑やかだつた所も、今はあとかたもなく、櫻は冬支度をして、たゞ杉・松のみが緑に茂つてゐる。

## 秋 祭

一年 佐々木 夔太

「ワツシヨイ、ワツシヨイ」「今年や豊年どし穂に穂が咲いて……」神輿を擔ぐ若者衆が、かう面白可笑しく節をつけて唱つて居る。

今日は十月一日。我等の氏神日吉様の御祭だ。今八幡宮より御神幸だ。神輿の後から太鼓が、「ドン／＼／＼」とやつて来る。其の後から長蛇の如く、ぞろ／＼とついて來

七四

るのは、御迎に行つた人達だ。皆な紋附に袴と云ふ扮装だ。道の兩側を黄金の波が打つ。小川の水がよく澄んで、水底に小鮒が二三匹ちよろ／＼する。岸のおもだかに紫の花が咲いて蛙がそれにつかまつてぽかんと上を見てゐる。

神輿が公會堂に入るのだらう。又ひとしきり先刻の唄が聞えてくる。

## 秋を聞く

一年 白石 明

「あゝ」あまり上天氣だつたから、ついうつとりとしたもう夕方だらうか。遠く近く寺の鐘が夕闇にひびく。明日も晴天か夕陽が眞赤に西空をそめ出し、あちらこちらに、ちぎつて撒いた様な雲にまで光をそ／＼いで居る。小鳥がす／＼と頭上を過ぎる。

あちらを見てゐる内に、もう太陽は沈んだのだらう。急に四邊が薄暗くなつて來た。あゝ何處かで虫が鳴く。こほろぎかな？……僕の心を虫が慰めるのだらうよ。

## 新 涼

一年 杉 山 誠

或る日曜日のことである。何時もより早く起きて散歩に出た。いかにも秋のはじめらしく、草も木も新涼の氣を一杯に含んでゐた。まだ露のある路を歩いてゆくうちに、何時の間にか土手に出てゐた。黄味が／＼つた木の葉が二三枚づゝ風が吹くたんびに、くる／＼廻つて地に落ちる。それを踏みながら僕は山縣誕生地の垣根まで來た。積み柴の間から、萩の花の咲いたのが、ちらりほらりと見える。

僕はつく／＼とかう思つた。  
あゝ秋だ。新涼の秋だ！と。

## 秋に思ふ

一年 中村 大十郎

空はからりと晴れてゐる。指月山は一層美しく見える。青々とした橙畠の中に、一本、柿の木が目立つて眼につく

あゝ！また鳴いた。

此のまゝ虫の聲と共に沈んで行つたら、或ひは秋の神に觸れるかも知れない。

## 秋を歩む

一年 吉田 成三

木蔭の小徑を歩む。涼しい風がそよ／＼と吹く。あちらこちらに栗の殻が落ちてゐる。實に静かだ。向ふの谷の水がちよろ／＼と帯の如くに白く流れてゐる。

僕は暑いので上衣を脱いだ。またしても涼しい風が、僕の肌を快よく撫で／＼ゆく。あちらこちらの柿は、今眞盛りだ。傍の石に腰をかける。踏みつけてゐる落葉の何であるかには氣付かう筈がない。たゞ向ふの美しい景色に見入つた。秋でなくては見るこの出来ない實に美しい景色だ。秋を歩まなくては味ふことの出来ない實によい氣持である。

七五

屋根の上では、小鳥が秋を讃えるやうに鳴く。うれしさうだ。でも僕の心は曇つてゐる。

西の濱の波の音が、微かに聞える。弟が十年前に彼の世へ去つたのも、此の秋だつた。頭はない弟の顔が、まさしくと目に浮ぶ。

いや秋は愉快であらねばならぬ。空は日本晴、山は紅葉阿武の清流は、たう／＼と流れ、柔かい秋の日射は藁を照らす。所々に秋の氣配を感じる。この秋！

嗚呼、やつぱり僕は秋が好きなのだ。でも、弟の事を思へば、何んだかもの淋しい。

### 秋のけはひ

一年 吉村源治

朝晩めつきり涼しくなつた。四五日降つた雨で、山の紅葉は赤味がさして來た。鶉などは時を得顔に轉つてゐる。或る日は縁側で遊んでゐると、こほろぎが膝の上にあがつて來たので、追ふと、からかふ様にして逃げて行つた。

僕は後でかう思つた。こほろぎまでも秋の訪れを知らせにやつて來たのだと。やがて秋のけはひを、何處にも感じる様になるだらう。

### 春は土から

二年 久保一郎

春の日に農夫が畑を耕してゐるのを遠くから眺めてゐると、のどかな風景だ。今まで冬のために閉ぢこめられてゐた農夫等は、春が來ると申し合はせたやうに急に野に山に活躍する。ふり上げる鍬の先にきりり、／＼、春の日がおどる。さく、／＼と碎ける土は春の香がするやうだ。

僕は今、鍬を把つて麥田の中に佇んでゐる。コバルト色に晴れた空に薄い雲がたなびいてゐる。ちい、／＼と雲雀の朗かな聲が春の空氣を傳つて聞える。母と二人、楽しい春休に畑に出たことが思ひ出される。

春は若人の活力の天地だ。土に親まう。

### 春は土から

二年 吉田宗正

畠の麥の純緑の若芽が一層伸び出した。春雲は日を籠め空氣は酒よりも濃かである。田の水はやゝ温み、雜草青み水を充分吸つた大地は、復活の満足を／＼と似てゐる。田の畦や、野原や、辻堂の縁の下等あらゆる場所からは、ぶく／＼と軟かい土を盛り上げて、小さい芽が頭を出し、春の暖い日光を受けて、すく／＼と伸びてゐる。その芽は土から生れたのである。川の堤には、若草の中に、ぼち／＼と色美しい童、蒲公英が咲き亂れてゐる。その間を白や黄の蝶々が、ひら／＼と舞つてゐる。春の若草や、花の美はしい莖、爛漫と咲き亂れた櫻、すべての植物が土から生れ、ある生命は土からよく水をあたへられて、日光を受け、あるものは住家をあたへられて、若葉をつけ、紫、黄様々の花をつけて、春光の天地の下に美しい花園を作つてゐる。さうして蛇や蜂は天使の如き衣を着てその間を飛び廻つてゐるのである。

### 秋 靜か

二年 藤田坦

カーテンは暖かい日光に照されながら靜かに風で揺れてゐる。庭の椿の木は緩かな日光をまだらに浴びて影と光のあたる所が亂れて美しく少し赤が／＼つた實が細い枝にぶら下つてゆるやかにかすかに動いてゐる。しかしじつと見ている内に何となく打沈んでゐる様である。今は眞晝すぎだのに何だか少し夕方の様な氣がする、何ものもじつと打沈んでゐる唯こほろぎがじ——と鳴くのが耳に異様に響き胸につたはつて行く。夢現だ。日が雲の中に入つて一層物靜かで寂しくなる。夏の面影は跡かたもなくなつて虫の季節になつたのだ。

### 美しき空

二年 小原弘行

朝だ。「窓を開かう。」東の空はほんのりと色づいてゐる

た。「がらつ」と窓を開く。初秋の冷却した空気が窓から入り込んだ。「寒いな。」寒むがりやの僕は再び床中に潜つた。

空は刻々と蒼まさり行く。やがてあの雲母のやうな美しき雲のカーテンから、お天道様がまん丸い圓滿なにこやかなお顔をひよつこりお出しになるのだ。

段々四方の山が赤くなつて来た。空も雲も。

「ばつ。」お、出た！。まん丸い一塊の朱玉が金光をぼつと四散させその光波は四方に傳播して行く。美しき青空にその圓滿具足な顔を躍如させてゐる。餘りに莊嚴な、餘りにも元気に満ちたこの美しき光景。

暫くの間、我を忘れて見てゐた僕は、ふと氣がついて見ると、「さあーッ」と日光が目覺めの床を消毒するやうにさし込んでゐた。

七八  
静かなる秋の姿

二年 澤本良秋

乙女の笑窪から溢れて咲く碧色の露草の如く澄みきつた秋の空、これを寫す鏡の如き水、どちらも碧色である、静かだ……。自分の心否總ての人の心が此の二つの中に融け込む。心が碧色の空と水とに混り同じく露草の如く碧色に染まつて行くのを感じ。

自然に口笛を吹くともなく吹く、音色も妙に静かであるこの口笛は一つの波となつて四邊にひろがつて行くのが目に見える、この口笛の波が水面を微かに打てば緩く静かに揺れて秋の姿を動かす、その音まで聞える様である。

口笛の波、水の波、同じく擴がつて碧色に融けて秋の景色を醸し出す。この静かなる秋の氣持ち、あゝこの静かなる秋の姿。

林 檜

二年 田中大資

面白いものだなあと思ひながら僕は片手の林檎をじつと見つめてゐた。新鮮なつや／＼赤い皮の表面に白く僕の名が書いてある。「まだ青いうちに墨で字を書いて置き赤く熟れてからそれを洗ひ落とすとその字の部分だけが白くなるのです」と大きな林檎園を經營してゐる熊岳城の知人がしらせてくれた。だがちつと見つめてゐるとこの林檎に言ひ知れぬ懐しさを感じた。この林檎は僕の爲になつて僕の爲にうれて、そして僕の爲にはるばる汽車に乗つてやつて来たのではないか、これこそ本當の僕の林檎だと思つた。そしてそつと靜かに棚の中にしたつた。

／＼してゐるが如く、映じてゐた。晝間の此の波止場は、汽船の群が或は吼え或は叫び非常に騒がしかつたが、それに引きかへ夜は汽船の群が今は叫びつかれたかの如く、舷燈檣燈をあたかも星の如く闇の中に光らして、大きな溜息をついてゐると思はれる程静かである。海水は母親が子供を抱擁するが如く、びつたり石垣に充ち湛へて、汽船の胴體を包んでゐる。遠く門司港の方で鳴つた汽笛の音も何となく此の静けさにふさはしい、子守唄の様に聞えた。あれやこれや見てゐる中に、涼しくもなり又非常に夜がふけたので、下關港に左様ならを告げて、歸途へとついた。

臺 山

二年 三原莊作

兵士の靴跡と、砲車の轍の跡の三條の緒土の線の残つた路に、短い影を引きつゝ三頭の馬と三人の人が歩いてゐる。振向けば廣漠たる果しなき丘陵の、大波小波の打寄せる様に起伏した草原の中に、脈を爲したり散在したり、白衣の

港

二年 平野末雄

下關港の東の波止場へ行くと、倉庫の燈火は金龍のうね



行者の群集したかとも怪しまれる様な石灰岩、其の中に遠く一點暗緑色の長者ヶ森が、恰も砂漠のオアシスの様に。右には遙か東西風闘が秋吉臺との面白い對照を示して王者の様にそびえ立つてゐる。行く手には緩いスロープの丘が次から次へと展開され、生ゆるにまかせた深い緑の雜草にはさまれた、楮土路の兩側の此處彼處の漏斗型の陥没地に桐の木と蕎麥の栽培されてゐるのが目立つ。

くるりと角を廻ると、脚本からはるか北方に擴がる洋々たる大原野に、或は猛虎の相搏つが如く、或ひは大海に怒號する海獸の如く、石又石。其數無慮二十數万。來る秋を待つて、一段と色を濃くした見渡す限りの緑の野に、眞白い雪の様な石が遠く、遠く。遙かのコバルト色の空に續く。

### 静かな秋の姿

二年 信國 基 堅

山は青く染つて何となく落つてゐるやうに見える。川

れど心中甚だつらかつた。御飯もろく／＼食べないで、「あゝ！今日は大へんねむい」と云ひながら其後直ぐに寢床を敷いて横になつた。「大へん早寢だなあ」と笑ふ／＼側を通つて行つた父が、もどつて來て聲をかけたが、しらぬ風をして寢た眞似をしてゐた。幾ら考へても駄目だから寢ようと思ふけれど仲々ねむれない。

### 静かなる秋の姿

二年 土屋 康 紀

秋だ。なんとなく氣持の良い静かな秋だ。夏の名残をわづかに残して、秋がおとすれて來た。夕方である。風呂に浴した良い氣持で、外へ出て見る。赤蜻蛉は、すみわたつた空を、或は、夕焼けを喜んで、すい／＼と、とんでゐる。と、そのとき、夕飯支度の茶碗の音が、ちやらん／＼と靜かに身にしみ入る。畠の方には夕日をあびた柿が、赤くて、葉と實とがくつきりと、きわだつて見える。つい、それに見とれてゐると、コホロギの音にまじつて、隣の風呂

は夏の姿を一新して餘りにも寂しく、又靜である、時々舟が「コツコツ」と櫓の音緩かに下つて來る。後には小さな波を残してゐる。水面は全く鏡と同じだ。又夏休み後の試験の沸騰した氣分も鎮まつて、心までが秋の靜かな心になる。夜電燈の下で默讀してゐると、こぼろぎや鈴蟲の聲が床の下や草の中から聞え、又道路を通る人の足音がたまに聞えて來る。もうその頃には本も閉ぢて靜けさも一段と靜かになり、やがて眼を閉ぢる頃は秋でも一番靜かな時だ。

### その前日

二年 松浦 幹 雄

夕食中に突然「おい、明日は通知書を貰ふ日であるのだらう」と父が言つた。はつとして只「ハイ」と言つたきりで他の話に替へようと思ひ、色々苦心したが駄目だ。「どんならしいか」と問ひ出す。明日と云ふ日が來なかつたらよいがなあ！と思ひながらも「さあ！貰つてみないとよく分らんが……」と答へて其の場逃れをしたけ

場から、ちやぶ／＼と、秋の静けさを含んだ音が、聞えて來る。

### 秋 靜 か

二年 久 芳 一 人

暑苦しげに鳴く蟬の聲も消えて、銀杏色の空は一風ごとに澄んで來た。八東足徳の稻はさはやかな波を打たせ、さながら黄金世界の如く。山は霧深く立ちこめて、光なく登つた朝日は池にうつゝた月よりも白い。まだ誰も來ないのであらう、田の畦には犬が足跡のみつけて、はるか彼方で時々黒い背を見せてはしやいでゐる。しつとりと水氣をはらんだ草、水晶をとかしたやうな空氣實に秋の朝こそは吾等の心を詩人の境に入らしむものである。

### 静かなる秋の姿

二年 河内 壽 昭

「チンチロリン」と何處かの草むらの蔭で松虫が鳴く。あゝ、もう秋が来たのかと虫の音で驚かされた。

夏の暑さに喘ぎながら待ちに待つてゐた秋は、何時の間に来たのだらう。それを僕は気づかなかつた。しかし濃く澄み渡つた青空、鏡の如く澄みきつた小川の面、何を見ても皆静かなる秋の姿が描き出されてゐる。

秋の氣は山から、野に、里にだん／＼と、そのすが／＼しい氣がたゞよひ、又天地のあらゆるものにかすかな寂しみが滲る。

月は夜毎にさやけさをまし、頬を撫で、行く秋の風も何となく快よく冷たい。

### 秋 静 か

二年 綿 木 勤

二日間の休に多くの友はかへつた。

行くまでもすみ切つた秋の空にひろげてゐる。

あたりの里諸畑には、すらりとした諸の葉が行儀よく並んで、初秋の風に「クリンコ／＼」頭をふつて遊んでゐると初秋の静かな空氣を破つて、一臺の飛行機が銀翼を秋の日にキラツと輝しながら、流れるやうに飛び去つて行く。しばらくすると、あたりはもう秋の静けさに歸つてゐる。

### 紅葉の秋

三年 中 本 茂

秋は紅葉の時節である。明るい秋の日輪を浴びて、碧落の下、織り出される紅葉は、離塵無垢の天賜である。紅葉は山に、林に、庭のさゝやかな茂みに、書齋の窓にさへよ

う。紅葉の美しさは新緑の澄潤さに比較して、濃みがあり、何處となく寂しさがあるやうである。然し新緑の輕薄さには見ることの出来ない深い落着がある。それは華やかな洋

其のあと一人さびしく大きな寄宿舎の一と室にとじこもつて机に向へば秋の静けさが味はれる。

中庭の草むらではチンチロリン／＼とこぼろぎがないてゐる。

ポーと淋しさうな聲、其れは小畑の港を出る汽船であらう。

机の中で時計が一秒々々きさむ其の音もあたりにひびくねずみが屋根うらでさわいでゐる。

何と静かであらう。やかましきはねずみだけ。

「あゝ秋静か」涼風はあたりにみなぎつてゐる。

### 静かなる秋の姿

二年 阿 武 久 平

今まであれ程、早魃に騒いでゐた。稻も今は何もかも忘れて初秋の風に實り近き頭を重さうにふつてゐる。田園のそばに立ち並んで居る櫻の木も、やはり夏と變つた落着いた緑、いやむしる淋しみの緑……黄色くなつた葉……を心

畫に對する墨繪の素朴さに似てゐる。

又新緑から青葉、紅葉への變化は、盛者必衰の過程を無言の中に説明してゐる。更に落葉への行程は儂い人生を表したものと考へられる。

此の意味深刻な紅葉の秋は、今將に我等の眼前に訪れようとしてゐる。

### 暴風雨見舞の文

三年 秋 山 實

拜啓 長らく御無沙汰致しました。借、新聞によりますと此の度大阪及び其の附近の地方に突然颯風が襲來し、津浪押寄せ、瞬間にして多數の人命を奪ひ、學校其他建築物を跡方もなく破壊し、甚大の損害を與へたとのこと、一方ならず驚愕致しました。又御地の方も其れ相當に被害の大きかつたさうで、嗚何かと御不自由の多いこと、御察し申し上げます。自然の暴威の前には人力を以て如何ともすることは出来ません。此によつて御力を落されることなく、復

興の道へ雄々しく邁進されんことを望みます。又要るものがありましたら、御遠慮なく御言ひ下さい。何でもお送り致します。ではお體を大切に。さよなら。

### 初秋の朝

三年 岡崎寛人

茶緑の草の葉裏を返して秋風が吹く。濛々と罩めた霧は  
禿げる様に吹き晴れて行く。廣い橙畑を彩る瓦屋根が、あ  
ちこちと現れる。はら／＼と、露がボブラの葉を傳ふ。

木々のもろ葉は、纏て来るべき最後の装の爲に、残れる  
全生命力を絞つて、悲しくも色づかんとする。その一縷の  
望もかなはで一葉又一葉、小さい悲しみを梢に止めて、す  
うつと冷やかな大地に吸はれて行く。

落葉で埋もれた木の下を、傘を手にした老人が通つて行  
く。老人の足が、老人の杖が動く毎に、かさ／＼と落葉の  
囁を聴く、亡びんとする者の囁きを。

ひら／＼と舞つて落ちる葉、何の氣なしに受けて見た。

黄色く艶々しい其の葉にも、堪へられぬ哀愁の色が巢くつ  
てゐた。

又、一葉、くる／＼と廻つて音もなく泉水の水の面に落  
ちた。

### 解 纜

三年 小野博康

紺碧の空澄渡る日曜の午後だつた。友達と横濱埠頭に行  
つた。

岸邊には山のやうな巨船が悠然として横たはり、時なら  
ぬ雑踏を呈してゐる、聞けば今日午後三時二十分アメリカ  
航路の船が出帆するとの事、送る人、送られる人で非常な  
混雑である。彼方には兄妹らしき若者が「どうぞ御身を大切  
にして下さいね。」と一掬の涙さへ見える。此方ではスポー  
ツマンらしき學生が、「大いに奮闘して我校の名を輝かし  
てくれ」等々悲喜交々の握手が交される。

やがて、船舷より落ちて来る五色のテープをしつかと握

る。解纜は刻々と迫る。時しも船から流れ出す別離の歌。

私は思ひ出した。數年前私の義兄が南アメリカへと志し、  
旅立たれた當時の便りに「故國を後に横濱出帆の折、多數  
の同胞の愛に送られ、實に感極まる。人間到る處、青山有  
り。男子の本懐之に過ぎず。」と書かれてあつたのを。さう  
だ。の義兄を海外へ送つてくれた人々の爲に、今此の勇士  
の前途を祝し且つ見送らう。

忽然、出帆を知らせる汽笛が港一杯に響いた。刻々とし  
帆は迫る。甲板を眺めると遠大の希望に燃える同胞等は今  
正に故國を去らんとしてゐる。三時二十分！やがて汽船は  
徐々に滑り出した。持つたテープもぶつ／＼りと切れ盛大な  
晴のスタートは切られた。振るハンカチも次第／＼に遠ざ  
かり行く。我が海外在留邦人よ。外征の勇士よ。健かなれ

### 忘れ得ぬ思ひ出

三年 津村對介

一番幼い妹の手を握つてゐた醫者が、突如「臨終で御座

います。」と云つた。姉がわつと泣き出した。母の嗚咽が

耳に響く。數秋前の無音寂寞の夢は破られ、死に行く肉身  
の者に對する情懷は破れ、私の顔を數條の涙の滴が。

私の震へる手が、妹の療撃の爲にか。ひく／＼する乾き切  
つた口に別れの水を、涙と共にしめらす。終に息を引き取  
つてしまつた。

蒸暑い夏、六日間も疫痢に苦しめられ、食物一粒すら取  
ることも出来ず。あはれ、「リンゴを下さい。」「何か食  
べさして下さい。」と母に泣きせがみ、高熱の爲に山へ行  
くとか、迷ひ子になつたとか恐ろしさうに泣き訴へた妹は  
あはれ六才で死んで行つて終つた。もう歸つては來ない。  
妹はあの悲しい／＼あの世界に行つて終つたのである。

### 秋

三年 野村晃

赤蜻蛉は青空の大氣を一杯に吸ひ込んで、ふわり／＼或  
は高く、或は低く。

詩人は此の秋を春よりも、夏よりも、冬よりも、一番趣味深く感ずるであらう。月に、薄に、蟲の音に、或は山、或は水、或は草花に、落葉に。

嗚呼、秋の落葉。淋しくばら／＼と、何處へ飛んで行くやら、一枚、二枚。

自分は老木を背に、大自然の遣るせない悲哀を感じつつ、一人ぼんやりと佇んでゐた。嗚呼、何時かは我々も秋の葉のやうに、一度は儚く散つて行かねばならぬのだ。かうして遣るせない情緒が縷々として續いて行く。自己にも分らぬ或る何物か胸に迫るものがあつた。

急に暮れ易くなつた此の頃では、はや夕闇が迫つてゐた。散り行く木の葉も黒く、空を仰げば星五つ六つ。「チリ、／＼」蟲が鳴く、世の儚さを物語るかのやうに。

### 秋の調べ

三年 山根忠雄

秋の一夜、私は縁側の藤椅子につくねんと、凭れた。秋

り／＼元氣に「さようなら。」「シュツ／＼／＼」汽車は本式に走り出した。草、木、山、川を尻目にかけて蠶々と走り行く。

乗換へも無事に済んで後は大阪へ一文字だ。明日も天気か、夕方の空は眞赤に焼けて山が黒く浮き出して見える。やがて、小郡邊に來れば、日はとつぷり暮れて空に星がキラ／＼光る。だん／＼と黒い山が低くなり、海が見え、島が見えた。そして空には月が一層冴えてゐた。窓を閉め、楽しい夢路の門出、をうつら／＼と迎ふ。

何時かふと目を開いて見れば、廣島だ。多くの人々の交す言葉の中にも、あの思ひ出の大阪辯が交つてゐた。驛の賣子の聲が眠さうに聞える。

### 日記の一節

三年 吉村重和

朝から雨だ。秋の時雨の感じを多分に含んだ小さな雨に遠山は霞んで、幽邃な山水の墨繪を見てゐるやうな心持に

風は冷え／＼と背筋を通つて、向ふの襟に、はた／＼と當る。實に静かだ。

「コロ／＼」彼方の草地から蟋蟀の音が聞える。すぐ間近からも聞える。ほろりとさせられるその音！ 彼等は楽しい秋の夜長を銀玉宿る草蔭に過すのだ。

「コロ／＼／＼」又一段と強く聞えた。私は、はつきり聞かうと思つて耳を傾けて心持ち面を上へあげた、突如音は止んだ。有ると思へば、有り、無いと思へば、無い虫の音だと思つて池の面を見てゐると、青白い月の光が洩れ始めた。

寂！又寂！

### 旅行

三年 高崎武夫

「ボオーツ」では往つて参ります。一「氣をつけておいで。」

ガタン／＼／＼。もう母から大分離れゐた。帽子を振なる。庭の池は老梅の梢から落ちる滴で、静かな波紋が水の面を這ふ。其の岸の平たい岩の上を、赤蟹が二三疋不器用な恰好で大きな鎌を振り／＼調子を取つて漫ろ歩き。土蛙は例の咽喉を鳴らす。この道化者達は、詩的な雨の日の一日を、彼等の所有權にでも屬して居る天地と心得てゐるらしい。僕は朝から、庭と山に面して居る座敷に机を置いて、自動車縦斷面圖の仕上げをした。所用時間八時間。其の間、勞を慰めてくれた蟹も、蛙も、もう見えない。雨は止んだ。寺の鐘が響く。暮色は亂色の靄と共に谷から野に青い稻田の上を這ひ、夕風は初秋禮讚の歌をボブラの梢に唄ふ。

### 秋雨

三年 岡村大一郎

うす暗い今日、朝から降り續いた雨は依然として降つてゐる。薄墨を流した様な空。青黒い連山。どちらを見てもどちらを向いても、其所には唯物淋しい秋景色が展開され

てゐる。ラヂオのアンテナが、雨の中に悄然として立つてゐる。家々の屋根も、何時もの様な色彩はなく、矢張り寂しい色を呈し、生えてゐる緑の苔までがよく目につく。鳩が二三羽元氣よく飛んで行く。煙突から出た煙も、重さうに高く低く上つて行く。

寂しい、冷い秋風が身に沁みる。子供の吹く笛の一聲も長く響いて腸に沁み入る様だ。工場の汽笛が重苦しく聞えてくる。

あゝ寂しい。何かしら物が思ひ出されてくる。物悲しい長い一日も暮れて行く。

寂しい秋雨よ、何時まで降り続くのだらう。

## 海

三年 茂刈靖一

明けきらぬ曉の空は、次第に白づんで来た。今闇の襷は打破れんとしてゐる。

沖には白帆が紺碧の海上に映えて、矢の様に走つて行く

青疊の眠れる此方の島、彼方の岬も、何事なく囁き始めた燃える様に灼熱した太陽は、その本領を發揮して、今日も朝から暑さを約束する様に、高く／＼昇つて行く。そして金色に輝く眼で下界を見下し始めた。

大海原はあくまで澄んで、麗しく、大きく、清らかに、さながら慈愛に溢れた様に、目を見開いてゐる。八月の太陽は赤銅のやうに焦げて、邪慳に見える労働者も、可愛らしい子供も、杖に身を委ねた老人も、皆等しく照りつけてゐる。

今紺碧の海上を白雲が二三片流れて行く。その間を磯千鳥が群をなして西に走る。あちこちの岸上では、甲羅を赤銅に染めた子供が、黒い籠を舐かして居る。

## 秋

三年 小橋安次郎

夏も漸く去り、灼熱の太陽は次第に光を失ひ、吹く風の音にさへ、秋の氣配が感じられる。折節注ぐ雨に濡された

木の葉、木の實は、とりどりの色に美しく染まり、濃緑の常盤木に交つて、交々美觀を呈して来る。

空はあく迄も高く澄み、秋の氣靜かに梢を渡る。女郎花雨に打たれて垣根に伏し、柿の葉はから／＼と地面を舞ふ小川の流れも心持よく、夜更けて鳴く様々の蟲の音にも、又秋は忍んで居る。

野も山も一面秋の色となれば、農家は稻の取り入に忙しく、案山子は唯獨り淋しく佇む。野邊に咲き出す小菊も美しく、百舌の鳴きて木の葉のはら／＼と散るのも面白い。飄然と何處からともなく來り、何處へともなく行く秋。見渡せば灰色の雲見る／＼空に擴り、荒涼たる山野には、裸の立木、木枯に鳴り、黄金の月、天空に懸る。あはれ、秋は行かんとす。

## 海水浴

三年 水津要人

「おーい、一飛び込むぞ。朗らかな聲がコバルト色の空

を流れる。海水浴場は人々で一杯だ。胸一杯に新鮮の空氣を吸つて、一瞬A君の體は空中に跳つた。  
ドボン……たまらない音。ラムネのやうにゴボ／＼と波が白く泡立つ。  
ばかりとA君の頭が浮かんだ。「飛び込め／＼、寒くはない。」大聲で呼ぶA君。

「よーし、今度は僕。」水平線にはむく／＼と盛上つた白雲がある。胸一杯に新鮮な空氣を吸つて、飛込臺の板を力強く蹴つた。

## 魚釣り

三年 竹内周二

靜かに澄んだ水に對岸の青葉が影を寫してゐる。青黒い水面に漣が立つと周圍の笹ががさ／＼と鳴る。

僕は苔の附いた石疊の穴に小さな釣竿を挿んで一心に浮きを見てゐる。小さな波紋が釣糸に湧いて次第に擴つて行く。唯もう無言であつた。隣の釣竿がひよいと上る。軽い

嫉みを覚えて又浮きを目を下した。向ふで大きな音を立て、ぼんやりとそれを見てゐる。何時の間にか浮きがびく／＼動いてゐた。はつと思つて上れば、もう餌が無くなつてゐる。する／＼する氣持の悪い蚯蚓を付けてひよいと降した。周りには三つ四つの浮きが無造作に浮いてゐる。

もう大分暗くなつた。對岸の蘆の茂みの向ふに夕餉の煙が風の無い夕空に上つてゐた。

## 初 秋

三年 田村正好

端居に夜寒を感じ、茂みに蟋蟀の聲を聞く時、秋は訪れる。黄金色に變つた稲穂や、澄んだ高い空を見る時、僕は初秋の景色に愛着を感じる。

蕃椒に羽が生えた様な赤蜻蛉が小春日の下に戯れて居るのを見たり、或は空高く黒胡麻を蒔き散らしたやうな鳥の群が、陽の光を背に浴びて飛んで行くのを見たりすると、

初秋の長閑さが感ぜられる。

清流に遊ぶ楽しそうな小魚の姿や、高く懸つた眞ん圓い月を見ると、初秋の清らかさが感ぜられる。

嗚呼、何と高く、深い、みやびやかな自然美ではない。

## 劍 之 筆

四年 安野 邦雄

古來、劍の力で立身成功した者が少なくない。又筆の力で其の名を天下に轟かし、人類の文化の爲に貢献し來つた者も少なくない。何れにしても、その名聲を謳歌されるものではあるが、劍の力で成功したものは殆んど何も、その影響を後世に及ぼして居ない。即ち、世界の歴史を回顧するに、盛んだつたローマも、今は全くその後射を現はして居ない。我が日本に於いても然うだ。諸々の幕府は、しばし間の、其のありつたけの榮耀榮華を極めたのみに過ぎない。然し乍ら、筆を以つて其の名を擧げられた者は殆んど全部と言つて差支へない位、皆、その餘澤を我々をして被

らしめて居る。あらゆる文藝家は各自獨特の筆體を以て多くの名作を残し、それに基いて、今日我々も亦、かうして精神の情的作用を働かせて居ることが出来るのである。現今では往時の如く武力を以て天下を制覇するなど云ふ事は出来なくなつた。尤も國際間の問題は別だがそれも色々條約や協定等に依つて阻止されて居る。だから我々はどうしても筆の力で以て、その才智能力を充分に發揮して、昭和の我國に盡す可きであると思ふ。然し乍ら、武を以て天下は、實際には制覇出来ないが、心に制覇する意氣込みで、又した積りで銘々の仕事を一心に勵めば御國に盡す可く成功する位は、朝飯前だと思ふ。

## 現代の英雄

四年 山中健一

現代の日本は海の内も海の外も山雨將に到らんとして風樓に滿つるの秋である。思想經濟外交の一切に亘つて我等は明白に明日の暴風雨を豫感するのである。

試みに我々は眼を放つて海の外を眺めて見やう。茫洋として際限なき太平洋を距てて亞米利加の勢力は大西洋岸からオハイオ河に、オハイオ河からミシシッピの流域にと東から西へ駁々乎として日に進み、遂には太平洋岸から飛石傳ひにサモア、布哇、比律賓にまで進出し、亞細亞の大陸に迫つて來た。斯る時亞細亞の大陸は何をしてゐるのだ？ サンヂエゴ、サンベドロ、パール各軍港に集結を完了した米國艦隊の存在を無視してゐるのか。振返つて北方に眼を轉じて視よ。其處には世界最強の陸軍を誇る赤露がある。毒々しい赤旗を朔風に靡かせて極東を狙つて居り、その赤化思想は外蒙古より新疆、青海より漸次侵擾し支那共產軍は跳梁を恣にして居る。而して明治二十七年、八年の日清戦争が「眠れる獅子」と恐れられた支那の面皮を剝いでしまふや否や今まで遠慮して居た歐洲列強の帝國主義が支那大陸に侵略して來た。然るに前後八十年の歐米強國の威力は歐洲戦争を以て引潮となつた。すると俄然として新興の力が亞細亞の地に擡頭して來た。——土耳其の復興、印度の風雲、さうして支那の國臣革命、滿洲國の獨立宣言等。

斯る太平洋上と亞細亞大陸との變勢は日本の世界政策の根本的立て直しを迫つて居る。明治の新政府の樹立した日本の世界政策は五十年を経て茲に徹底的な改革を斷行されなければならぬ時となつた。日本は今如何なる世界政策を立てて新しき全世界の大潮に船出して行かうといふのだ。日本は今何處に往くのだ。なれど現今の日本の姿を視よ。現在の日本は渦巻き流れる急湍を脚下に見て居るのだ。安政元年の開國から數へて七十餘年洪水の長堤を決する如くどつと流れ込んで來た凄じき西洋の文化と生活とが、我々の思想と生活とに激動を興へた。その結果思想界にも悪思想が輸入され、遂には共産分子の暗躍、檢舉等神國日本としてふさはしからぬ結果を招來するに至つた。

今や我が帝國は一九三五、六年の危機を控へて國家非常時に際會して居るのだ。國を建てて二千六百年、今こそ新しき天才の出づべき秋である。今こそは新しき人傑の現はるべき秋である。その天才は今何處に居るのだ。その人傑は今何處に準備されて居るのだ。

機を見るに敏なる者は天下を制す。秀吉が然り、南洲然

り、カヴール、ビスマルク、ディズレリイ亦皆然り。凡そ天下に事を成すの政治家は悉く炯眼一世に先立つて天下推移の方向を洞見したるの士である。而して能く活機を捉へその識見を現實に遂行したるのみ。今將來來襲せんとする暴風雨を叱咤し、かかる怒濤に駕して新日本の新しき生命を呼び起す英雄兒は今何處に居るのだ。第二の南洲、第二の山陽、第二の龍馬は今何處に居るのだ。天の靈に感じ地の精を體し九千萬同胞に呼びかける偉大なる英雄出でよ！奮起せよ！

### 上級生の覺悟

四年 貞本 尙

現に我が日本は諸外國より如何なる態度で注意され又恐怖されて居るか。抑も我が國の發展は日露戰役に始り、中頃には歐洲大戰に、最近に至つては日支事變に有る。日支間の種々雑多な紛争も漸く局を結び、日本の諸外國に對する位置は確乎と重要視されて來た事は我々の耳目に新な

る所である。その後未だ日尙淺きに既に移民問題經濟問題外交問題の窮境に在つて、全日本に暗澹たるものがある。

思ふに非常時日本の原因も此處にあるのである。我々上級生たる者は如何にすべきか？即ち吾々は何れの方面に向ふとも、軍人たる者は軍人として商人は商人として政治家としてはそれ相當に全力を盡して、國の爲に働くのであるから、努力して國威を發揚し、以てこの非常時を打破し文明を進め、海外に盛んに雄飛して新日本を建設せしめる様な立派な人間の素地を作るべきである。

我が國は土地狭くて四面皆海を廻らし、到底内地に在つて發展する事不可能である。進んで遠く海外に雄飛し、文化を取入れ、物産を吸収し、發明發見と相俟つて日本を強固にし、隆盛ならしむべきである。現今に至つて滿洲國も立派に成立を見、發展しつゝあるではないか。日滿相助け將來國難に當り、皇道の下に全世界を服せしめるのも一大任務であらう。

特に下級生の上位に立つ上級生たる吾々は、學生の本分を盡し、自覺自重して各自の目的に正々堂々と邁進し良く

この非常時を認識して益々學業に勵み、父母に仕へ、以て日本を將來雙肩に荷負つて立たねばならぬ。日常體力に精神に訓練修養を計り、第二の日本國民即ち將來この皇國の威光を益々保持すべき我々青年を強固にするのが各自の責務である。

上級生も下級生も一致團結し善に進み、剛健に一步一步も愚かにせず目標に進むのが上級生の覺悟ではあるまいか

### 太平洋

四年 吉松 陽

昔米國の水師提督ペリーが相模の浦賀に來航した頃の太平洋は名前通りにまだく太平洋な海であつた。しかし現代では太平洋は武装の海である。太平洋防備制限はあるものゝ、今にも戰はうとして居る。日本に於て太平洋の問題がやかましくなつて來たのも當然である。

太平洋の防備は近年益々大切となつて來た。我が國でははるかに米國の布哇軍港、サンフランシスコ軍港に相對し

横須賀軍港より南は小笠原父島要塞・北に大湊要港を連ね艦艇二百數十隻の精鋭を浮べてゐる陣形はいかにも壯大であり且頼母しいものである。

先年、日本が國際聯盟を脱退した時外人は無理な理窟をつけ、當然日本の領土たるべき南洋群島をかへせと迫つた時びくともしなかつたのはこの壯大な太平洋の守りが斷じて鞏固であつたからである。もしあくまでも正義にそむき、我が南の生命線である太平洋の權利を奪はうとする國があれば、實力を用ひこれを撃退せねばならぬ。この太平洋の危機は一千九百三十五・六年に迫つてゐる。我が國はこの外敵にそなへ難關を突破し得る軍備を充實し何時、いかなる時にも敵を撃退し得る力を養成し太平洋を名前通り太平に保つのが我が國の重大なる使命ではなからうか。

## 科學の力

四年 福田寛雄

我々は朝に枕を蹴り、夕に床に就くまで四六時中科學の

しく滅亡してしまつたかも知れないのであ。又科學はあらゆる神秘的な事物を現實の此の世に暴き出さうとして居るのである、地震・雷を恐れられて居た雷も燈火を興へ大工場の動力となる電氣に他ならなかつた。幽霊船と恐れられた北海の恐怖も自己の乗つて居る船の濃霧に投ずる船影であつたりした。あの大東京を數日にして焦土と化した大自然の威力をも征服して科學は人智の發達と共に進み其の後僅か數年にしてこれを舊に復し更に發展してその止まる所を知らないのである。何と科學の力の大きな事よ、！然し科學は大いに發展性を持つて居るのである。我々は此の科學の力を尊重すると同時に、益々此れを研究し一層此れを利用し以つて世界人類の幸福を招き、祖國に盡し、人生を有意義に過す様心掛けねばならないのである。

## 劍と筆

四年 石村豊徳

今や學問の進歩に伴ひて戰術も亦大いに進化せり。之れ

力によつて生活してゐるのである。然るに我々は科學があまりにも日常生活に有りふれてゐるので反つてその恩恵を忘れて居る様である。朝に晩に眞面目に科學の力の偉大さに感謝を捧げて居るものが果して幾人あるのであらうか。

科學の力はそれを應用する人智と相俟つて益々有用になり、電信・電話・航空機・船舶等の通信機關・交通機關を發達させ居ながらにして地球上到る所の消息を知り、自口の力を勞せずして遠隔の地に到達する事を可能ならしめ、爲めに此の地球を縮少して終つた。二十世紀の文明と云ふも科學あつてこそその文明ではないか。古人の夢にだに思はなかつた事をも實現して終ひ、その將來は如何になり行くか吾人の力では到底想像すらも許さないのである。

偉なる哉科學の力！若し此の世に科學なかりせば、若し人間にして科學に對する力がなかつたとすればどうであつたらうか？。恐らくは萬物の靈長と誇る人間も猿同様只食ひ只寝ね本能的生活をして昔も今も變化なく何の發達もしなかつたであらう。否天災に惱まされ、病に冒されても之を救ふ術もなく、猛獸等の強者に生命を奪はれ人類は端

必然の理にして偶然進歩せしには非ざるなり。西洋の古諺に曰く「文筆の力は劍の力に勝る」と。而して世界の歴史を繕きて見れば、彼の世界的大詩人にして、且文豪たるミルトンの雄麗なる辯駁文を草し、而して世間の反論を一掃せし如きは、武力を使用せずして、天下を自己の意見の下に風靡せしめしなり。故に明瞭に文筆の武方に勝れし事を證するなり。然れども國防の要素たる武力を空虛にせんか。

國民の優柔不斷となりて遂に滅亡に歸したる彼のローマ帝國も、一に國防を怠りし爲なり。我が戰國時代に於ける文武兩道に秀でたる士を求むれば、上杉謙信を得べし。

斯の如き、文にも明らかに且武力をも巧みに使用するを得る人の當今に輩出すること、當に必要なるべし。「今や祖國は超非常時に直前せんとす。誰か我が固有の文武の威力を發揚し得べき者ぞ。希くば一人たりとも英雄出づべし」と。之れ寸時も何人の念頭をも去る能はざる希望たるべし。此の日本文學、彼の大和魂、これぞ日本の世界的地位を得し所以に非ずして何ぞや。劍の使用も時には必要なり



巨して文學の興隆も亦必要なり。而して文學のみに走らせず、武事のみを専念せず、兩道の進歩發展に努めし結果こそ我が帝國の威力を世界に發揚するを得し所以に非ずや。

## 太平洋

四年 杉原大泰

太平洋といふ字は太平な洋といふのであるが、現代の太平洋は太平どころか大變である。

振り返つて世界の歴史を考へて見るに、大きく概略に云ふと文明と云ふものはある大海を中心として榮えるものと考へられる。何故かと言へば古代は世界の文明は地中海を取り巻く諸國に榮えた。世間では此を地中海文明と云つて居る。それから此の文明は次第に東漸して大西洋を舞臺とする大西洋文明となり地中海文明より更にすぐれたものであつた。當時我が國の狀勢を見るに徳川三百年の鎖國の夢はベリーの訪問によつてやつと覺めはつと氣付いたやうなものであつて非常に我國の文明は遅れてゐたのである。そ

れが時代の變遷によりコロンプスがアメリカ大陸を發見する迄は暗黒の海であつた。あの黒潮逆巻く太平洋に黎明の朝日が照らし出して來たのである。その太平洋を圍む國々も一國一國と目を覺し出して來た。是即ち太平洋文明の起りである。

又歴史を考へて見るに文明が榮える陰には血と血、肉と肉、劍と劍の争ひが起つてゐる。地中海文明の時にも數多の實例はあるが、就中十字軍の如きは述べるに足るべきものであり、大西洋文明の時代にしても然り、有史以來の大戦争とも云ふ可き歐洲大戦は實にそのものである。かう考へて來て見ると此の太平洋文明の時代にも必ず世界人類が總動員で血と肉とで戦ふ一大戦争が始まるであらう。さうなれば我が國は正義の爲に舉國一致して最後の一人になる迄戦ひ続けかくして太平洋文明を永久に太平に持續するのが當然である。いやそれが亞細亞の先導者たる大日本帝國の義務である。

今や太平洋上を照す太陽は眞晝であり、危機は吾等の眼前に迫つて居る。

## 太平洋

四年 田村精作

太平洋の地圖を開いて見よ！ 巨浪おしよせる東海に、巖然として浮ぶ孤島、これぞ大日本帝國の勇壯なる清き尊き姿である。米國大統領ルーズヴェルトは嘗て曰く、「古ローマ帝國の衰亡と共に、地中海時代は終りを告げた。地中海文明は轉じて大西洋文明となり、其れは目下其の絶頂にある。是れ亦遠からず資源の枯渴を見るであらう。而して其の後に來るものは、云々」と。おゝ！其の後轉じ來る所は何處なり乎？諸君の頭で考へたならば、否、考へずとも直覺的に浮び上るだらう。勿論太平洋だ。今將に來らんとする太平洋時代。故に世界列強は争つて、太平洋に、或は領土を、或は權利を得んとして居る。其の一例として、佛國は新南群島占領問題を口上として太平洋に進出せんとした。又縹渺たる太平洋の彼方には、米國が世界一を誇る海軍國の陣列、太平洋艦隊を組織して、時の到るを砲口を礎いて今やおそしとまつて居る。其の昔、十六世紀にマジ

エランが世界一週の時、此の大海は無事平穩であつたと云ふ事から、彼が太平なる海、即ち太平洋と命名したのであつた。誰れも渡つたことなき太平洋は、四世紀後の誰今は如何。太平なるべき海は、今や渦が巻いて居るではないか。或は交通上から、或は軍事上から、殊に世界軍事上から重大視して居る。故に我等は太平洋時代來ると叫べば直ちに運事方面から考へて見る。其の様に太平洋と云へば神經が鋭敏になつて居るのだ。然らば列國は、何故此の海を大事に見るか？其の一つは私の考へる處によると、我が帝國の發展を、太平洋で食ひ止めようとするのではないであらうか。黃禍々々と叫ぶ彼等こそ、洋鬼となつて我亞細亞の同胞を苦しめんとして居るのだ。世界の王者たる天命を受けた我が帝國は、大亞細亞民族のリーダーとして、亞細亞民族を覺醒せしめ、洋鬼に負けざる必勝の信念を以つて、天に向つ勇往邁進せねばならない。此の信する道を妨げんとするものは、如何なる文明、武器を以つてしても、正義と忠君愛國の凝固つた必勝の信念を有する大和魂に、うち退けられてしまふのだ。そして我が大日本帝國の日の丸の御

旗はあの太平洋の波に、永遠に其の清き姿を浮べねばならない。

九八

## 滿蒙發展策

四年 能美陽一

滿蒙は如何にすれば發展向上するか此れは等しく私達の考へねばならぬ所です。一般の人々の内には大人でさへ今以つて滿蒙の状態を知らない者があります。今發展の榮を述べるに如何様なる發達發展振か、又政治の模様はどうであらう等を追求して調べ、その結果見附け出した缺點を補つて行くのも滿蒙發展策の上策です。けれども私達中學生としての策は國境から滿蒙に對し惡心を抱く奴等を追ひ、日本の青年が渡滿し滿蒙人と共に手に／＼を取つて働いて行くのです。

今や滿蒙は後にロシアを受け前には支那が貪慾な眼を光らして滿洲を自分の物にしなければ、胸がおさまらないとも言ふ様に構へてゐます。米國は又どうですか、あの廣い

／＼太平洋を距ててゐるにかゝはらず、滿蒙に自國の資本を投じようとあせつてゐます。此の滿蒙の危機を脱するには何に頼るべきか、それは一も二もなく武力であります。しかし私の見た現在彼地の武力は甚だ幼稚な物であります。私は實際安心し得ないのであります。彼の兵を日本風に訓練し一步も速く東洋に於ける大日本帝國の子供を養成させたく思ひます。滿洲帝國は漸次諸外國に承認され國內に交通網を充満する様に行つてゐるがまだ／＼發展する餘裕を有してゐます。

大なる國土を有し豊富な自然の富を得てゐる滿蒙は確實なる發展の政策の下に一致團結し、赤い魔の手を遙かシベリヤの奥深くへ追ひ國內の匪賊を悉く平定し、永久に國家の安寧を保ち國民の福を計り、そして日本と心を相通せしめ東洋否世界の平和を維持すべきであります。

## 必勝の信念

五年 横山圭治

なせばなるなさねばならぬ何事も

ならぬは人の爲さぬなりけり。

やれば出来るんだと。いふ意味だ。

「我に不能の文字なし」といつたのは、あなたがち奈翁のみの獨占すべき言葉でもあるまい。殊に身心共に健全な若い時代に於て、一旦志した以上、どんなことでも出来ぬ事はない筈である。朝會の時村岡先生の訓辭にあつた如く「やつてみせると志した以上、必ずやる」これが必勝の信念だ。人類數千萬年の歴史を洗つて見れば、後に残るのはやはりこの語で盡きる。文明も文化も。

我等は若い。前途は遼遠だ。學校から社會へ。この間常に心すべきは此の語であらう。富もいらぬ。名譽もいらぬ。一切の我慾をすてた右の聖者にも猶心の戦ひはあつた。戦へば勝たねばならぬ。それが必勝の信念だ。

## 圓鏡先生の講演を聞く

五年 西本 實

演壇に立たれた鏡圓先生の姿には何とも云へぬ精神的餘裕が溢れてゐた。その法被からは「働くと云ふことは貴いことであるぞよ」と私達に呼びかけてゐる様だつた。

先生の講演は段々と熱を帯びて来て、時々私達の良心にピリツ／＼と何者か刺すやうに刺激を與へる。飽くことを知らない利慾の心を鞭打つ様だつた。

私は今まで鏡圓先生の語りの道に入られなかつた。小兒の時代と同じ道を辿つてゐた。我儘で、朝寝坊で、自分より年下の者には威張り度くて、全くいい人即ち拜む人になる道と眞反對の道を進んで来た。名譽も全も女も命も望みながら、一方お國に忠義を爲さうと、いかにも虫のよいことを考へてゐた。自分は身を殺さずして仁を爲さうとする世の屑であつた。

## 海野先生の講演を聞く

五年 松尾美男

「屑拾ひサン」の講演。

なんと奇抜なことだ。必ず普通の講演とは違つてゐるに違ひ無い。「よし本気で聞いてやらう」といふ考へが脳裏にピンと來た。ところが講堂の人となつて三上先生より「屑拾ひ海野先生」の履歴を聞くや、果して俺の考へが的中したナと……その瞬間今は東京に居られる、秋吉臺の聖者本間先生の姿が目の前に浮んだ愈々講壇に立たれた。

先生を見ると眞黒な法被に股引といふ姿だ。「勞働は神聖なり」といふ光が先生の體から放たれてゐるやうな氣がして、先生の人格のすべてが分つたやうに思はれた。

話は極くザツクバランに進んだ。これが又余の欲する所であつた。松岡サンの山口言葉をつくりの、あの強い趣が海野先生にも見られた。話が徹底してゐる。あぶな氣がない。末次大将の話されたやうに、「偉い人になるな。尊い人になれそれ」。には徳器を成就せよ。といふのが話の要

100

點である。その方法は？ 御飯は拜んでから食へ。終つたら茶碗を洗へ。といふのである。實に痛快だ。何等の文句もいらぬ唯「拜め」といふ主義には全く感服せしめられた余もこれ迄さう考へてゐた。神様の前に行つたら唯頭を下げ、拂前に出たら手を合せよ。これが余の主義だ。かくすれば昔のまゝの日本人となる。しかもその實行に何等の造作もいらぬ。

屑を拾つても立派な日本人になれる。中學生が日本人になれない理由がどこにあらうか。

## 我が郷土

五年 本石獨芳

百花爛漫の朝に故郷を想ひ黄葉落々の夕に父母を思ふ。私が赤坊の時無意識に母の懷に乳を求めたであらう、その様に今日自分が何かにつけて思ひ出すは唯なつかしき故里の昔と、人々の面影である。

わが故郷は、蒙古十萬筑紫の海の香高き博多の津。その

福岡こそ私の詩境であり、桃源である。世の人は誰しも自分の故郷を最美最善の巷と思はない者はあるまい。そこに自分は何かしら人間の温味を感じる。

故郷の事を人の言葉の中に耳にし、新聞の一頁に雑誌のとある一章に見出す時、まるで子供が自分の親を自分のものと思ひ、一番偉いものと信じてゐる様に、自分一人の福岡みたいに心臓が躍つて來る。幼なかりし時の楽しさの数々を思ひ浮かべては懐かしき甘美な夢の世界に誘はれ、薔薇色の思出のヴェールに包まれるのが常なのだ。

私がいも日本國中で一番良い所と問はれたら、言下に強く「我が福岡」と絶叫する。

## うら盆

五年 松浦二郎

「あと三日だ」翌日は又「もう二日だ」と僕の村の沖へ行く漁師達はそう言つてその一日々々を楽しんでゐる。

僕の様な者にとつては別段楽しくはないのだが、この人

達にとつては盆の五日間はそれこそ僕達の四十餘日の休みを壓縮したものである。盆が來たら沖へは絶対に出られない、そして彼等は自分の心のまゝに遊ぶ。この時こそ一年中唯一の極樂なのだ。夜は踊る。踊つて夜が明ける迄踊る。體の續く限りこの五日間は踊り抜く。この五日間の夜は吾々にはなかくゆつくり寝られない。太鼓の音が聞える。白川踊の歌がまじくになりわあと言ふ風に聞える。とうとう一夜僕も出かけた。踊る。その輪の大きさは長經五十米、短經二十米位もある大隋圓形だ。頭に花傘をつけた者、女の長襦袢を着てゐる者。文附あり、ころもあり、中には頭の髪をわざと半分剃り落してゐる者もある。踊りは簡單なものを繰り返すのみで見物人にはこの假装が一番面白いのだ。次から次へと色々なものが現れる。だから何時迄も見てゐられる。見てゐると、とうとう踊りたくなる。踊る者が皆得意顔してゐるのがうらやましくなつた。

誰か知らんが「おい。仕度へ歸らう。」と言ひ出した。

101

## 働いた日

五年 田邊利彦

長い日照り續きに皆あえいで毎日憎らしいまでに晴れた空を見つめて来たが今日は午前中恐ろしい勢で有難い雨が降った。

大地は悦びに満ちた、人もほつとして田畠は生返つた様に青々とした、可愛い田畑に手をこまぬいて見て居なければならなかつたお百姓は雪を見た子犬の様に勇んで野良へ出かけて行つた、僕もじつとして居られなかつた。

カラ／＼に乾き切つて居た畠は黒色に悦びを含んで柔かく何を植えてもすぐ芽が出さうだ。

長い畠の畝に一鍬打込んだ、ぐさと柔い手應と共に深々と三本鍬が入り込んだ、まだ水の通り切らない底の灰色の土がぬき取る鍬と共に黒い土の上に出た、心持良い土の感触を感じながら一ふり／＼力を加へて耕し續けた。

柔い土は面白い程よく掘れた。

一畝二畝と掌が熱くなつた。

1011

玉の様な汗が全身に滲み出た。行儀よく二つの畝が並んだ、「出来た」腰をのばすと同時にこう感じた、僅の労働だつたが人生の騎士と云つた氣持で仕上げた後をふり返り見た、西日が名残の光をなげて畠の面を照らす、夕風が汗ばんだ肌を洗ふ労働の尊さがしみ／＼感じられた。

祖母も母も褒めてくれた嬉しかつた。

もつと自分を愉快にした事はグラツドストーンの言葉だつた「自己の労働に對して報償を求めそれが得られなければ失望落膽する人がある。然しながら労働を盡す者は假令有形の報償は無くとも無形の報償を與へられてゐる。即ち労働は諸君の軟骨を燧石と化し血液より筋肉を作り出し薄弱な心を不撓不屈の精神たらしめる而して之などは是に天の報償なる事を知つて感謝しなければならぬ」と今労働の有難さは私を愉快にしてくれたそして今此の言葉のやうに力強いあるものを與へてくれた。

此の働いた日が休暇中で一番愉快だつた。

## 旅行の一日

五年 能美忠廣

自轉車旅行の我々四名はやつとの事で〇〇坂の麓に着いた。空は氣味悪い程晴れて、一片の雲すらなく、眞夏の太陽は射るが如き光線を道路へ、草へ、木へと送つて居た。暫らく木蔭に憩ひながら汗を拭いた。愈々此の坂路を征服せんものと意氣込んで出發。坂路は左手に山を負ひ、右手に谷を見下した急坂。自轉車では少し無理だ。それを我々は登らうと意氣込んで居るのだ。

つゞら折りの坂路を、唯一心にペダルを踏む事に全力を傾けて登つて行く。坂が一段と急になつた。二人の友が落伍した。「何哉、俺は負けないぞ。登りつめれば下りは楽だ」と自ら激勵した。我々を尻目に向け、砂塵を立て疾驅する自動車も、坂路には敵はないと見えて、騒々しくエンジンチンの響を立て、喘ぎ／＼苦しげに登る。

「やあ！もう少しだ。」と歡喜しつゝ頂の見た我々は勇氣百倍、身は軽く、車は宙に浮かんばかりにして、頂上

に着いた。

流れ落ちる汗も拭かずに、今登つた坂路を見やりながら思はず「萬歳」を連呼し、征服の快味に陶醉した。遂に我々は此の坂路を征服したのだと思へば、今迄の艱難は何處へやら、唯感ずるのは歡喜の二字ばかり。艱難苦勞を乗り切つた時の快感を我は切實に味はつたのだ。

此の意氣だ。此の努力だ。此の意氣と努力とを以て勉強すれば入學試験が何だ。此の意氣を以て努力すれば、競技の制覇も掌中にある。總てが努力だ。努力無き成功は眞の成功ではない。例へ失敗しても努力の跡さへ鮮やかであれば、それで人生は充實されるのだ。斯う考へながら、途中で挫折した友を待つた。

## 吾が郷土

五年 世良百之

刺激の乏しい、活氣のない閑寂な萩がわが愛する郷土である。旅の生活から此の靜かな萩に歸つた時、自分はひし

／＼と迫る寂しさに賑やかな九州の都市生活を憶ひ出してすゝり泣いたのである。都市に聞いた電車の轟きも都會の醸し出す華やかな雰圍氣も無い萩。

しかし近い過去に幾多の志士を出し、防長の政治的中心地だった過去もあつた。それも昔のこと封建の時代は過ぎた。そして新しい日本は建設されたそれと共にわが愛する萩は封建制度の瓦礫と一緒に淋しい落莫の道をたどつた。

今に見る武家屋敷の崩れかゝつた築地と歐化主義の犠牲となつた古城址に餘端を保つて居た萩に汽車が通じた。

淋しい町は汽車に呼び覺まされた。そして今や回復せんとしてゐる。萩は歴史と近代文明の過渡期にあるのだ。

橙の海に浮ぶ萩。史蹟の萩。懐古的な萩。今になつても史蹟の外に都人士を招く何者もない萩。山と海に圍まれた萩。萩の天下に誇り得るは唯一つ松下村塾。

松陰先生の改革精神に憂國の情熱に刺戟せられ、感激させられた青年、身分の低い輕輩が、新日本の礎を築いたと云ふ唯一つの誇は市民は淋しい自己慰安と自己辯解とを發見し其れに満足して變化なき安逸を貪つて居る。

阿武川は昔ながらに清く流れ、人は昔ながらに靜寂な享樂をして居るのだ。松が子守唄を歌つてくれた搖籃の萩だ。僕を育て呉れた萩よ、何故發展しないのだ。吾々の未來には萩の成功と幸福が大手を擴げて待つてゐるであらうか發展だ、向上だ、其の上に何を望まう。史蹟の萩よ、風景の萩よ、何時迄眠つてゐるのか。

### 海に遊ぶ

五年 横田十久夫

夏の日海の旅行けば

希望は雲に似たるかな

何かの詩集で見た事があるのを記憶してゐる。

——希望は雲に似たるかな——此の文句がすきなのだ。水平線上蒼穹に高く下界を壓して聳え立つあの力強い男性的な雲の姿が、我々の希望の象徴だと云ふのだ。私は急に海へ行つて見たくなつた。

S7——と染め抜いた見るからに輕快さうな緑色のヨット一隻、船に白泡を立てながら滑つて行く。

濱は午下りの炎天に焼けつく様な熱砂、日光がギラ／＼と反射して眩しい迄に眼を刺戟する。自分の瘦せた黒い影法師がそのまゝ砂の中に食ひ込んでゐる。

濱邊では毎年聞くあの歡喜に満ち／＼た明るい騒音。大人も子供も男も女も凡て一様に、此の世の愛さを心から忘れ切つてしまつた様な面持ちである。

「やあ、お父ちゃん泳げないぢやないか、かうするんだよお父ちゃん見といて。」

得意になつて十二三位の腕白らしい男の子が、その父親であらう、傍に立つて笑つてゐる人に蟹泳ぎの甚だ怪しげな泳ぎ振りを示してゐるのだつた。

去年の今頃は、病床に日を送つてゐた私には、暫く見なかつた懐しい夏の海濱の光景である。

男や女や子供の何かすばらしい寶物でも見付けた時の様な物狂はしい叫び聲に、私はサツ／＼と砂の上を歩みながら、思はず微笑させられた。

松並木の所迄來た私は、そこで立ち止つて遠く海上を望んだ。

持有の潮の香を、海風は、上氣した私の頬に靜かに、爽かに運ばせるのだつた。

私は一本の松の木の根方に腰を下して尙も沖を見續けるこゝは汀から大部離れてゐるので、磯で右往左往入り亂れて笑ひさざめく人々の聲は微かに聞えるのみで、このまゝこゝへごろりと横になれば、何時の間にか私を夢の國へでも誘つてくれさうな絶好な催眠劑になりさうだ。

併しさうしてゐる内に私は、少し悲しい氣持ちになつて來た。私にはあの健康な人々が羨ましくてたまらなくなつて來たのだ。病で打ちのめされた私は、人々の嬉戯してゐる様子を空しく傍で見つてゐなければならぬ事ですつかり憂鬱な嫌な氣持ちになつて來た。私はそのまゝ仰向けになつて遠くの空を眺める。暫くしてから私は上半身をグツと起して水平線の上を見やつた。出てゐなかつた。雲は僅かにその一端らしい物を覗かせてゐるだけであつた。私は輕い失望を感じて再び横にならうとしたが、その時私の傍を何

所からか迷つて来たらしい子蟹がよろ／＼と歩み去らうとするのを見逃さなかつた。

東海の小島の磯の白波に

我泣き濡れて蟹と戯る

私は何時か眠つてしまつてゐた。」

私の眠りはあまり長くなかつた様だ。

ふつと現實の世界に引きもどされて、私は海岸の方へ目をやつた。海に遊ぶ人々も大部少なくなつてゐた。だが、あつた、あつた、大きな雲の塊が、水平線にとつしりと根を下して天空に聲えてゐたのだ。しかも赤銅色の入道雲。何物かに怒つた様に恐ろしい形相で下界を睥睨してゐるのだ。これを私は忿してゐた。

——希望は雲に似たるかな——

送畢業生四首

學半 河野通毅

畢業辭鄉幾鳳兒 自今榮達又應期  
他年萬丈紅塵處 夢在巴城講學帷

螢窓雪案憶雄飛 贏得桑梓纏錦衣  
請見巴城多俊傑 勿招碌々續貂譏

螢窓畢業驥驎兒 錦衣歸鄉再會時  
金谷祠頭銀髮叟 迎君雀躍忘吾爲

桑弧蓬矢志中原 誰唱陽關淚欲吞  
請見瀾城花旣綻 揚々春鯉溯龍門



卒業生通信

東京外語を語る

同校 伊藤清次

花の都の中央麹町區に、宮城を前に控えて、横はつてゐる平屋のバラックの見すばらしい建物に、吾が外語なのです。本校は歴史も古く、こゝで育まれる者の實力は他の外語の追従を許さぬものであることを確信してゐます。吾が先輩は近くは支那滿洲より遠くは歐米その他の地に於て、堅實な活躍をしてゐます。現在萩中の卒業生で在學中のものはドイツ語四年の長瀬博兄、イタリー語一年の稻村君とマレー語三年に居る私の三人きりです。長瀬兄は今春目出

度く社會に出られる筈ですので、誠に心細く思つて居ります。少しでも語學に興味を持ち、海外に出て働いて見たいと思はれる方は、奮つて大學入學して戴き度いものです。吾が校の試験の特色は志望語部を二つまで選ぶことを許してゐる事でありませぬ。(但し英、佛、獨は受験者數の關係で第二志望とする事は出来ませぬ) 試験の結果高點者より、志望語部を無視して定員程採用し、次に受験者の志望に基いて、多い處は少い處へ埋合はせてゐる様です。私が受験した場合に就て申しますれば、採用者二十名の中、私共第一志望で入學したものは僅か八名で、他の十二名は英佛等を第一志望したものです。兎に角點さへ取れば入學出

來る譯です。ですから例へば英語部のみに執着する様な方は別ですが、第二志望もして置かれる方が得策でせう。各語部の人の頭には大した差は生じない様です。

試験問題は他の専門學校等と較べて實に容易です。私の如きもので入學してゐることも想像が付きませぬ。唯學校の性質上、英語には特に重きを置いてゐる様です。三百點の中、二百四五十點位取らねばと云ふ人がありますが、それ程でないとしても相當な自信をつけて置いて欲しいものです。唯問題のワナに掛りさへしなければ大丈夫です。その他のものは大した事はありませぬ。

志望語部については第三者の啄容を許しませんが、充分研究なさる必要があります。何しろ一生の運命が分岐する處ですから就職の點から云へば、近年華かな英佛獨等よりも地味な語部のの方が就職率が良いのは注目すべき事ではないかと思ひます。同じ語部の中でも文法科、拓殖科よりも貿易科がよい事は事實です。

現在私はマレー語と云ふ様な、凡そ文明と懸け離れた、亦そんな言葉があるかないか人が知らない様な言葉をやつ

を尙多少なりとも生徒諸君の御参考になれば幸いです。時節柄校長先生を始め諸先生の健康と生徒諸君の御奮闘を祈ります。

### 廣島高師を語る

同校 中野 茂

愈々秋も更けて参りました。黄金色の稻の穂波を渡る風もヒヤ／＼と快く、秋晴れの空は山に野に人の心を牽きつけます。稔りの秋、收穫の頃、自然の充實した姿を想むつゝ、あたかもその如く内面的に張り切つて來た廣島高師の有様を第三十三回の創立記念祭に際して萩中の諸君に御紹介出来るのを非常に嬉しく思ひます。

國運の興隆と文化の進展に於て教育の重要性は今更申すまでも無いことです。只私は廣島高師に學びつゝ感ずるまゝを御知らせ致し度し。

當校の創立は明治三十五年でありますから、萩中よりは一年後輩といふ事になります。當時東京には既に東京高等

てゐますが、その人の知らない處に私共の強みがあり、一寸外の所では習へない處に意義があるのではないかと思つてゐます。これは私一個人の感ずる處ではなくて、我田引水でない事をかたく信じて居ます。

勿論本校に入學されるならば、一、二學年の間は實に忙しく辛いものと覺悟してゐねばなりません。英語を除いては全く何事も字引と相談ですから勢ひ、病氣になつたりすることになります。この點は學校としても重要視してゐる様ですから、體の丈夫な事が何より必要なものであると思つてゐます。

不必要な事かも知れませんが、今年の卒業生の賣れ行きは南洋其の他の關稅問題の爲に残つた南米に大貿易商が目標を置いた爲か、スペイン語が一番よいとの評判です。一人で二ツ位の口を持つてゐるやうです。

拙らぬ事を長い事書きましてすみませんでした。ではこれ位にして筆を擱きます。

若し幸に受験される方がありましたら、出來得る限りの便宜を圖りますから、ドン／＼是非吾が校に入學されん事

師範がありました。識者間に當時の日清戰役後國力伸長の時勢に應ずる清新な學風、しかも東京とは異なつた學風を有する高等師範の設立が唱へられ、明治大帝の親しく大本營を進め給ひし水郷廣島の地に本校が生れ出でた譯です。爾來卒業生を出すこと四千數百名に及び、第一代北條時敬先生、第二代に弊原坦先生、第三代に古田賢龍先生を校長として戴き時潮と共に進展し來つた。學園の教育は各時期毎に色々特徴を示しては居るが、その根本である人の師たるべきものゝ養成機關であることは恒に不變であるは勿論の事でありませぬ。

近來師範教育問題が大分やかましく論議され、所謂師範型なるものが云々されて居ります。然し本校の教育は人間としての圓滿なる人格の修養に主眼が置かれ、もつと伸び／＼したものです。ペスタロツチが人間性を調和的に發展せしむることを説いたといふ事ですが、本校のペスタロツチ研究の盛な事も、學校の教育の一面を物語つて居る様と思ひます。だから本校の生活も師範教育の語から聯想される様な堅苦しいものではないです。大體本校生徒の平均年

齡は一年生で一八、九、四年生が二二、〇ですから皆元氣  
 瀟灑たる青少年です。文藝に、スポーツに、武道に、登山

に若人の意氣と情熱を以て精進する學生の姿こそは眞の若  
 人の姿です。此の方面に於ては學友會の存在が重要な役目  
 を殆んどあらゆる方面に於て果し、校長トロフィー競技は  
 水泳漕艇より乗馬に至るまで全十二種目の運動に亘つて、  
 クラス單位で覇を争ひ、十五名乃至三十名のクラス總動員  
 で若き日の感激に或は泣き或は喜ぶのです。然し自由はひ  
 いて放縱に走り勝なものである。感情の愛情の一面に力強  
 き鍛練がなければならぬ。本校では今年學長塚原政次氏の  
 新任を機とし再び學園創設當時の剛健な學風を顧りみる意  
 味に於て創立記念祭を催したのであります。此の様な事業  
 を學生の手で行ふ爲には學生一般の自覺がなくては行はれ  
 ないものです。今年七月學長問題の如き外部からの刺戟は  
 内に蓄積された熱と誠意の噴出となり、學園の平和を招  
 來しては、學園のルネッサンスとなつたものと思ふのであ  
 ります。今や形式内容共に新なる第一歩を踏み出して居る  
 本校としては、純眞な理想に燃ゆる青年の入學を大いに期

待して居ます。松陰先生の故地たる萩の諸君の入學を希ふ  
 ものは私共に限らないのです。  
 やがて冬來り休暇になると入學試験です。本校の試験問  
 題は一般に容易で定評もある位ですから、御勉強の際は確  
 實に一步步自分のものとして行く方法が一番好いやうで  
 す。一つの問題でもあらゆる角度から考へて見る事も必要  
 だと思ひます。

猶入學試験その他不審の點等は遠慮なく廣島高師寮内私  
 宛或は井町秀介君宛に御便り下されば御報せ致します。

亂文ながら本校の現状を御傳へし、有志の士の來廣を御  
 待ち致します。

### 江田島の聖地より

海軍兵學校

藤井清規

近藤信一

前略

御依頼により拙文を呈し萬一も諸子の爲激勵の言  
 葉とならば幸である。

四面海もて圍まれ地は聖なる茲日東帝國に生を享け、上  
 には 大元帥陛下を戴き奉り下には幾百幾千の部下を率い  
 海上に生活し海に死するは海國男子の本懐とするところだ  
 ある。今や世情混沌として平和に因みたる太平洋にも濤荒

れんとするも、我海軍ありて我邊境は全く東亞の平和は確  
 然たるものがある。

茲に護國の大任を全うすべき將校の養成所として世界第  
 一等の名と共に六十五年の永き歴史と傳統を誇る我海軍兵  
 學は、俗塵を去ること遠く秀峰古鷹聳ゆる江田島の聖地に  
 悠然として古色蒼然たる大建築に未來のアドミラル江田島  
 健兒を抱擁して横たはつてゐる。

兵學校は物識りを作るところではない。戦争に役立つ有  
 爲の人物を作る學校である。生徒は日夜孜孜として精神修  
 養、體育、學業に勉勵してゐる。誰が何と言はうと、將來  
 戦争の絶無は保し難い。然れば我々日夜の精進も護國の大  
 任を果すべく戰鬥目標に教育されるのは言ふ迄もない。従  
 て日常生活は嚴格多忙、時には鐵拳の飛ぶこともある。け  
 れど隊務外は實に愉快な生活である。

四ヶ年のシビヤーテストを終へ楽しい思ひ出の江田島を  
 去れば愈々憧れの遠洋航海だ。之を終ると艦に乘組み御奉  
 公の第一歩を踏み出すのである。

兵學校の事情御紹介の爲、不日小冊子が上梓の豫定だか  
 ら限られた紙上に述べべくもないが、合格の曉には精しい  
 事をお知らせする。兵學校の様子が知りたくば須らく入學  
 試験に合格すべしだ。

我兵學校は娑婆の平々凡々たる學校とは違ふ、中學生の  
 氣嫌をとる様な文句や内務の良い事ばかり並べて受験を希  
 望するものではない。天下には氣概ある秀才は多い。受験  
 勉強も依頼心を去り學業に精勵し自分で是と信じた方法に  
 より自信の附く迄勉強するのが最上の策であると思ふ。

打てば響あり、感激に充ち満つるのが有爲の中學生であ  
 る。眞に 陛下の御爲・皇國のため身命を捧げ護國の鬼と  
 化し得る氣概ある者は來れ。再び言ふ海軍兵學校は物識り  
 を作る處に非ず、實戰に役立つ有爲有能の士を作る學校な  
 り。暴言多謝



## 高松高商を語る

同校 田村 義 輔

オリヅの高き香かほる常夏の南國、澄み切つた青空と明るい高松の市街、我等の軽やかなステップは先づ宇野からの連絡船の上から、情熱溢るゝ許りの白壁で縁取られたる港からウエルカムと快い呼び聲で迎えてくれる高松、それは四國の大玄関なのです。其處からタキシード・バスなりで紫雲山麓の我等が紫雲學園に向上の意気みなぎる身を運ぶのです。前にコバルトの海の色を移した様な池と屋島を、後に天下の名所栗林公園をひかえたる學舎が我が高松高商なのです。此の學びの家の中は外の自然の静けさに引き換えて社會の一縮圖を見出すべき繁忙さを見付ける、其のコントラストの妙たるや實に我等の意を注ぎ込む感があります。將來の大實業家を夢みるもの一國の財を左右するも併し皆一様に社會をこの混沌たる世相を主觀し客觀するアカデミストの集ひなのです。

扱て本校の入試問題課目は英語、國漢、代數、口答試問

だけですが。英語は別に大した事ありませんが、只毎年時事問題が英和英の何れかに一問乃至二問出るので。國漢は漢文が一問他は國語で現代文古文及び書取りが一二問づつ出ます。代數は應用問題一問と利息問題が毎年出る様です。

次に我が校の卒業生の天地を見ますに、創立十年の若き此の學舎の出身者にも由來關西の財界に雄飛する姿を見ます。今年の卒業生の就職率を見ますに實に、歴史に輝く他の高商を壓して物凄き躍進振りです。卒業の時までに就職のきまりしもの百三十名の卒業生の中百餘名に垂んとせり又其の分布を見ますに日本銀行、三井物産、第一銀行を初めとし遠く滿洲に關西の貿易關係方面に著しき進出を試みて居ます。今年の就職率は全國商大専門部高商中、東京商大専門部に次いで斷然他校を壓して第二位です。全世界の動く處一つとして經濟によらざるものなきは萬人の認むる所、よろしくこの道を修めんとするものは南國の高松高商を襲ふべし。今年の受験者數に於ても昨年の七百八十名(募集人員百五十名)よりすつとビッチを上げて八百五

## 東京高藝を語る

同校 大塚 均

ウオ、、、と響き渡る畫のサイレンが休息を告げる。學校は芝浦にも似合はず緑の樹木に取圍まれてゐる。繪具だらけの、油だらけのブルーズを脱ぎ棄て、校内をぶらつく。展覽會など見に銀座あたりへ出かける連中もある其の姿が背廣だから面白い。いやに若いサラリーマンの一團かと思へば高藝の生徒だつたりする。

學校は背廣姿を辱しめず全く自由の世界です。非常に感じの良いアトモスフェアが流れてゐる。人數も少くミツチリ勉強出来る。先生も物の解つた人が多く充分親しめる實習は諸君の現像以上に面白いものです。自分の趣味の範圍に仕事が入り込んで来るのかも知れない。何處の學校にもよく居る與太モン氣分の人間が少く、居たとしても幅の利かない事おびたしい。

よく學生時代は面白いと云ふ。よく聞いて見ると大低遊ぶ事の方だつたりする。

十名に達しこれにても我等の高松高商の躍進振りを知る事が出来ます。次に本校の學友會の陣容を見ますに、總務部文藝部、辯論部、語學部、劍道部、柔道部、野球部、庭球部、陸上競技部、蹴球部、水泳部、旅行部、乗馬部、卓球部、籠球部、音楽部、の十七部より成り趣味研究の會としては經營研究會、廣告研究會、映畫研究會、刀劍研究會、イングリッシュユスビーキング・ソイエティ等枚舉にいとまがありません。又學友會各部の躍進目曜ましく昨年の水泳部の全國高商の覇を握りしより今年水泳部再度の覇を握り弓道部野球部の優勝を見ても分ります。

殊に山口縣人は同縣出身の商業英語方面で有名な中村教授を頭に戴き縣人會を組織して居り、山口縣人は色々な點で利する所が多いにも拘はらず從來秋中出身は餘り振はないのです。現在は僅かに三人で甚だ寂寥を感じて居る次第です。海の風清く吹く國讀岐の國は前途を祝福されたる若人の一度は勞を負ふべき所です。來れ、前途の幸福を約束されたる高松高商へ！終りにこのぞみ諸兄の益々御勉勵あらむ事を祈つて筆を止む。

學校の後にある玉突、マージャン屋、喫茶店、カフェー等が榮へに榮へ行くのも又むべなるかなだ。高藝に於てはこんな風景は見られない。各自もつと高級な趣味を持つてゐる。

自分の心の底に描いた、フアンタジーの世界がたゞフアンタチックに終る事なくリアルな物として實用的な物として表現出来る事は何と喜ばしい事ではありませんか。次に七ツに分れてゐる科を御紹介致しませう。

科別	萩中出身
圖案科	山根 繁、大塚 均
彫刻科	
木材科	藤井 太郎
精密科	佐伯 一男
金屬科	
印刷科	
寫真科	

各科は運動部・音楽部・縣人會等により親密さを加へる山口縣人は非常に多い。中でも萩中が一番多い。でも來春

は山根君藤井君侯と三人卒業する事になつてゐる。後は佐伯君一人になる。願はくは奮つて高藝を受験されん事を祈る。

各科共近代的な仕事でドン／＼社會には受入れられ、それ／＼の方面へ延びて行つてゐる。就職率は勿論非常に良い。

試験？色々書いても長くなりますから志望の方は直接お問ひ合せを願ひます。木材・精密志望の方は藤井君や佐伯君がくわしいでせう。終りに何時か聞いた言葉に「不注意ではいけない無注意でなくてはならない」と云ふ言葉がある。即心を虚にして何物をも受け付け心を集中するの姿でせう。何物をも貫く魂は虚なる心より生れる。

### 大阪商大高商部を語る

同校 窪田 熙

天高くして馬肥ゆるの候、來るべき試験に備へて上級生諸君は専心御勉學の事と存じます。最早志願校を定めて居

られる方もあり、或は未だ確定してゐない方もあるでせう若し高商を志願するの希望ある方は躊躇なく本校を推します。かくとも高商を志す者ならば、或は然らずとも大阪が天下の臺所として、經濟上の實權を握つてゐる事は御存知と思ひます。この商業都市には他所には見られざる設備や便宜があつて學生に常に活用を許してくれます。帝都に於ても見られざる獨特の機關も多々にあります。この點大阪に學ぶ者のみに與へられた特權でせう。

本校はその地理的經濟的事情と五十餘年の古き歴史と相俟つて名實共に全國高商の冠たる地位を占めてゐます。學部は大學に志す者の爲に優先的地位を與へてくれます。本年新築なつた三階建の白亜の殿堂は清澄なる空氣の下に諸君の入學を心から待望してゐます。卒業生は京阪神より全國に擴り、海外に雄飛する者もあります。第二外國語として獨語、佛語、支那語があつて諸君の選擇に任せてゐます。諸君が本校を志願されても決して御失望はないと確信します。次に本校に受験せんとする方に望む所は試験は決して難問ではない。普通のレベルを少し越した位で充分であ

るのです。都會の學校と言へば兎角志願率の大なるに辟易する人がありますが、内容は空虚なものです。相手となる者は極く小數です。地方で眞面目に勉強してゐる方が實力は大であり都會の學生よりも内容の充實してゐる事を忘れて下さい。諸君は自負心を持つてよいでせう。本年は歴史が課せられるとの事です。尙種々御質問あらば遠慮なく申して下さい。御便宜を計ります。萩よりの在學生は萩中二名萩商二名です。諸君の御入學を切望して止みません。最後に諸君の努力を祈る。

### 高岡高商を語る

同校 服部 正 吾

懐しき母校の諸君に。  
萩中校友會雜誌第三三號の發刊を心から御祝ひし、併せて拙文を以て高岡高商を紹介する光榮を感謝致します。諸君は孜孜として勉勵され、來るべき希望の門出に胸を躍らせて、學園に楽しき毎日を過して居らるゝ事と存じます。

されど、上級生諸君には、輝く希望の中にも一抹の暗影を宿すものがある事を否定する人は無いと思ひますが、曰く「受験地獄。」等しく諸君の懐みではないでせうか。然しかゝる漠とした不安は諸君の懸命の努力が、之を拂ひ除く事を疑ひません。現在の苦しみより、近き將來に到來する感喜の情を想ひ、只管前進されん事を切望します。求むる所に必ず道が拓けて参ります。苦しみを經ての喜びこそ本當の喜びです。

若し諸君が、その學校の選擇に高岡高商を受験される方が有るならば、この紹介文はより有意義になる事と信じます。

本校は裏日本に立つ唯一の官立高等商業學校で所在地は富山縣高岡市の郊外に校舎を持つてゐます。地理的に云へば金澤と富山の中間に位し、或は諸君の記憶を呼び起すかも知れない伏木港は市と隣接してゐます。更に地圖上から云へば能登半島が諸君の注意の眼を引くでせう。本市は人口六万餘新興の商業都市で滿洲の發達と關連して、將來の發展を約束されてゐます。校舎は遠く立山を望み、アルプ

スの連山は雲に聳へ、夏に至るも白雪に化粧し、近くは二上山の落陽を眺めて、志貴野ヶ原に遠く想ひを故郷の空に馳せる事も出来るでせう。

學生の大都市集中を避けて、地方に分散し、静かな落ついた空氣を吸つて三ヶ年を學ぶのも、善き路ではないかと思ひます。

創立は大正十四年、未だ學校の歴史としては新しい學校です。卒業生は本年第七回を社會に送り、來年は滿十周年記念祭が盛大に催され且富山市と本市と聯合して、日滿産業博覽會が開催され、此の機會に入學されれば絶好の機會かと存じます。校風は眞面目、思想は堅固を以て任じ、未だ一度も思想的事件を起さぬ所に學校の特色を見られます。傳統の點に至つては、歴史の浅い爲、未だ完成されぬ遺憾な點も有りますが、年を經るに従つて完成の域に近づき、之等を行くのは、吾々の義務で、考へて見れば未完成的の所に希望は將來に輝いてゐます。諸君の四月の入學を祝つて呉れるものは、先づ古城公園の櫻でせう。指月の櫻に親しむ諸君に尙一層の素晴らしさを與へる事でせう。休

講の時間に、晝の休みに、直ぐ側にあるこの公園に流れます。スポーツをやらうと思ふ諸君には、四百米のトラックと二百米直線コースを持つて居り、プールも飛込臺を持つて廿五米の六コースを持つてゐます。その他部は柔、劍、蹴、籠、弓、排、射、馬、文、音、寫眞、山嶽、スキー、相撲、庭、野、卓、講演、語學部が有ります。冬のスキーは諸君を充分に楽しませる事が出来ると思ひます。

教授のプロフェルも様々で、精しくは述べられませんが、大熊信行教授の經濟原論、矢口、上生兩教授の民法、佐原教授の貨幣、又本校在學中弱冠の身を以て高文を、パスされた向井教授の經營學等有意義の講義かと存じます。一年の寮祭、クラスマッチ、秋の運動會、春秋の音樂會は諸君を喜ばせると思ひます。

最後に受験の事ですが、定員百五十名の募集ですが、實際に入學許可される者は百六、七十名有ります。又昨年まで商、中學、別々に二對一の割合で採用されましたが、本年からは全部統一して試験され、商業出は二拾餘人なるに中學出は百六十名ばかり居りて大分競争率が低下した様で

す。平均應募者は大體、七百―八百位に見て置けば間違ひないでせう。問題は容易で誰にも出来るのを出して試験されます。英、數、國、作の四課目ですが、大體六十點位取つて置けば大丈夫でせう。數學は級數、對數、應用問題が必ず出る様です。英語は單語の暗記なんか止めて、文章を多く讀む事です。國語、作文は一寸變つたのが出ますが大して難しくは有りません。英作は基本をしつかりやつて下さい。精しくは學校宛御手紙下されば、出来る限り御取計ひします。では之にて、健康を第一にして御勉強を祈ります。

### 名古屋高工を語る

同校 大谷 敬 信

光陰矢の如く私が名高工に入學してから早一年半になります。今回學校の様子に就いて何か書けとの事ですので些か述べさせて頂きます。幾分でも諸君の御参考になれば幸甚です。

先づ入試に就いて述べますと課目は數學(代數・平面及立體幾何・三角)・物理・化學・英語です。但し建築科は化學の代りに自在畫があります。代數では級數がよく出る様です。數學の教授は幾人かゝりますが、僕等の今の教授は下手な解き方をすると例令答が出てもうんと減點すると自分でも云つて居られましたから、此の教授のときは用心して頭を捻る必要がありますね。

化學が容易な様で點が取り難いさうです。此の教授はとても點が厳しく、何しろ誤字があると減點され、字が汚いと減點され遂にはマイナスになる者もあると云ふ話ですがまさか……。三角は電氣科にはとても必要で毎日 *the* *cos* を聞かねばなりませんから電氣志望の方はよくやつて置く必要があります。

次は身體検査ですが、此れは病氣さへなかつたら大抵大丈夫です。身長等規定に足りなくて、入學してゐる者もあります。身體に相當丈夫でない困ります。學期試験後三日も續けて製圖を書いた事もあります、此等相當辛いものです。期日が迫つて夜一時頃迄、日頃さぼつてゐる者は

徹夜して書上げねばならない事もあります。次に口頭試問ですが此れは大した事はありませんから省略します。

學校の様子に就いて述べますと、我が名高工には土木・建築・機械・紡織・色染・電氣の六科があり、約七百近くの未來の若きエンジニアが孜々として學校に勤んでゐます高工は忙しい所です。七時間授業ですが實驗等旨く行かぬ時は放課後もやらねばなりません。先日も「フラックスメーターの實驗は夜やつてもらはぬと出来ませんよ。此れからがん／＼しほりますから其の積りで」と助手に嚇されました。

電氣科は創立が新しく建物もコンクリート三階建の立派なものです。學校が御器所ヶ丘と云ふ小高い所にありますから、屋上に上ると名古屋城其他高層建築物がよく見えます。

別に萌黄色窓の二階建強電流實驗室があります。電氣科長は山口縣の人で三年間獨逸留學の後今年五月歸朝されました。僕達は今交流機械を教はつてゐます。

五月開校記念日には一年中の最大行事たる記念祭をやりますが、三週間位準備作業を放課後やります。昔は間に合はぬと徹夜をやつた事もあるさうですが、私は十二時迄しか残つた經驗はないです。こんな事も身體が丈夫でないと續きませんね。中學生活中うんと鍛練して置くべきです最後にどうか高工志望の方は御都合さへ宜しければ、我が名古屋高工に來られん事を望みます。出来るだけ御便宜を圖ります。

白たへのころもできむし秋の夜の月なかぞらにすみわたるかも

君が山はや／＼色つきぬ此ごろのしぐれの雨やわきてそめむ

良 寛



京阪地方修學旅行おぼえがき

旅行地	松江、天橋立、京都、伏見、奈良、大阪、神戸
期間	昭和九年四月一日ヨリ五泊六日間
人員	生徒七十名 教員三名

四月一日 曇後晴

午前六時、一行東萩驛前に集合。河内校長先生、河野、三上、阿部、齋藤諸先生の御見送を受け同四十八分出發。左手遙かに見島を煙る海上に淋しく見残して須佐の松の小島を追ふが如くに列車は東へ。出發の際には陰鬱な

S T 生

りし灰空も今濱田を過ぐる頃より次第々々に晴れ上り一團の元氣爲めに百倍す。白き砂丘連綿として長く日本海岸を縁取る。

午前十一時三十七分出雲今市驛着。遠山今猶ほ白雪を戴く。午後零時十六分大社驛着。官幣大社出雲大社に参拜す。伊勢大神宮と並び稱せられ

幽冥を主宰し給ふ大國大神を祀り、驛より北十二三町蒼樹深き八雲山麓に鎮座します。老松樹の並木の左側には建築新なる勅使館、齋館あり。天日隅宮の稱ある本殿には朱碧の極彩なく形式の特異なる手法は神代建築の倂を偲ばしむ。幾多の攝社末社あり。寶物館あり、任意參觀す。此處にて一時解散し神苑附近にて晝食をした、午後三時半驛前に集合。大社より四町太鼓原には歌舞伎の元祖出雲お國の墓ありと聞く、詣ずる能はざりしは残念なりき。青瑤瑤の産地とて社前到着處に同材料の土産物を列ね頻りに一行の視線を惹く。

午後三時四十九分、一行は一車借切の状態にて大社驛を出發。同四時二分出雲今市驛着。乗換へて同四時七分同驛發。

午後四時五十五分松江驛に着けば本日の宿所大橋館若主人の出迎あり。案内されて松江大橋を渡る。水郷松江の靜かなる姿……明るき空氣の中に勝れて柔かき線を長く引く宍道湖……御一家松平氏累代の城下町に相應しく何處となく圓滿應揚にして、而かも一種古風なる靜けさをさへ含む

日本のジュネーヴ。宿に到り雜糞其他一切の荷物を其處に預けて再び立出で、世界的文豪小泉八雲先生の舊宅を訪問す。庭内には種々の花卉を集め、家の建方と庭の造方とは何處か床しき萩の氣分を傳ふ。裏に先生愛好の小池あり、古色を帯ぶ。縁に近く先生の勉強部屋あり、居間あり。今度新築されし記念館の白壁直ぐ横手に見ゆ。濠に沿ひ樹木の間に縫ひて松江城に登り、天主閣の下にて山本先生より築城法に就きての説明を聴く。降りて縣廳構内を通り抜くるに、櫻の蕾、萩にては既に綻びかけしも此處にては未だ固く閉せり。商品陳列所前を通りて無事歸宿す。蹴り上げシフトボールの如き月、松江大橋はるか掠めて。十時半就寢。

四月二日 晴

起床五時半。六時過ぎ若主人の案内にて宿を退出し霜を踏みて松江驛に到る。其間約二十分。萩のとは何處か異なる朝の空氣、頭心を清め去るが如き、薺々と冷やかさをさへ傳ふる爽かなる大氣。深き朝霧の漸く晴る、頃午前六時五十六分、懐かしき松江を後にす。旭光に照り映えて金波

銀波を豊かに盛り上げたる海面に彼方此方と點々白く連れるは鷗の群か將た捨網の浮子か。米子の驛を離るゝ頃、四圍の山々を斷然威壓せる偉大なる伯耆大山の雄姿、全山殆んど今猶ほ白雪に被はれて右手高く中天に聳立す。白皚々たる大山が、日本アルプスの一端を思ひ起さしめん、峻嶮なる峯々の鋭き鋸齒狀の輪廓を、惜しげもなく而も誇らしやかに、紺青の空に描けるその壯大さよ！これこそ實に

サブライムとや云はん。午前十時過鳥取驛着。活動の化身たる汽車は朗らかに暖風通ふ春の最只中を全身日影を浴びてひた走る……遙か奥地の連山の冬なほためらひて去り難く、冷き姿を暗き静寂の中に残して。隧道重なりて眺望を遮り光輝の世界は暗黒の世界に急轉し光は闇、闇は光と交はりて、光と闇の綾織なして進み行く。

午後零時十四分豊岡驛着乗換。此頃天氣晴朗にして一片の雲影もなし。午後零時二十五分同驛發。二時八分天橋立驛着。

先づ文珠堂智恩寺に參詣し切戸渡より松並木の間を白砂を踏みて進むこと三町四町、岩見重太郎の舊跡あり。天橋

立神社に參拜。附近に磯清水湧出づ。傍に古き石碑を立つ蕪村の句を刻む。

波し立や松は月日のこぼれ種

此處にて解散、四時二十分驛前に集合。噫、成相山上に攀登りて翠松連る一里の長橋が水天髣髴の間に浮ぶ青龍渡海の一偉觀を俯瞰すること能はざりしは返すも遺憾なりき。

四時三十三分天橋立驛を發して京都に向ふ。午後八時京都二條驛着。

驛頭、齋藤先生の知人吉武保安課長及び東山ホテル主人の出迎を受け、直ちにバスに分乗して宿に到る。繁華にして美装をこらす町並、右に左にのた打つ雑沓の波、流星の如く疾過する自動車電車、總て一行の耳をうつ。これぞ舊都大京都の現の姿。鎌田一馬氏宿に來訪さる。無事就寢十一時。

四月三日 晴

起床七時。吉武氏の配慮にて警部池谷伊助氏案内役となり、一行はバス三臺に分乗して八時宿を出發。

烏丸々太町を通りて烏丸下長者町電車停留所側にて下車鎌田氏一行中に加はる。我々と因縁淺からざる蛤御門を潜り建禮門前にて襟を正して御所を拜し奉り、同志社を左に眺めつゝ烏丸今出川、千本今出川に出で小路を抜けて金閣寺に到り同所を見學。室町時代の藝術の粹。今に残れる幾多の寶物は足利義滿の豪華のあとを無言の中に物語り、庭園の泉石の妙、南天の床柱の大、特に忘れ難し。

之より今來し道を歸りて百萬遍より右轉。京都帝國大學を左に大學病院を右に見て東山二條より左に折れ工藝館、公會堂を近くに眺めつゝ平安神宮前にて下車參拜。枝垂れ櫻幾株も立並ぶも未だ蕾綻びず。龍尾壇を上り大極殿の左側より裏の庭園に出で白虎池、蒼龍池を半周して泰平閣を左に眺めつゝ應天門の横手に出づ。此處にて記念寫眞を撮る。之より動物園の獅子虎を車中眺めつゝインクラインに到る。折しも小舟二艘鐵索に引かれて徐々に水中より陸上へと現はれ來る。これ琵琶湖疎水に通ずるなり。

浄土宗總本山知恩院にては守衛係谷口氏に案内さる。本殿の正面には元祖「明照」大師の額を高く掲ぐ。屋根裏高

く左甚五郎の忘れ傘あり、鶯張りの椽を渡りて寶物類を一覽し鶴の間にて小憩。それより東山三條に出で八坂神社前より四條大橋に出で烏丸四條より南に折れて東本願寺前を通過し烏丸七條より西に曲りて西本願寺前にて下車。同寺所藏の寶物を見る。武藏野の雄大なる繪。百花を置はしく描き分けたる天井、怒濤飛沫を浴せる浪の間等印象深く、豊太閤秀吉が明の使者を撥ねつけしと言はるゝ大ホールには、側面に見事なる綠色繪具にて着色せる大なる松樹の繪を配し、正面には韓信、孔雀等を配せる壁畫ありて面白き特種の遠近法を用ふ。廣間の角柱は巧に配置され爲めに一段と邊りが引立ちて見ゆるは妙なり。庭園に奥行の淺きに係らず大小の岩石をよく配列して雄大深遠の感を抱かしめ清焚閑寂の雅致を遺憾なく味はしむ。三閣の一なる飛雲閣は九條武子夫人を偲ばしめ勾欄聳立して高く、建築の美あり特別保護建築物なり。月見臺を廻りて寺内の廣間にて晝食。

練兵場を右に見つゝ伏見桃山御陵、桃山東陵に參拜して歸途乃木神社に詣で日靈戰役當時のことを熱々想起す。此

處にてバスを乗捨て、これ迄一行と行動を共にされ専ら案内に當られし池谷、鎌田兩氏に別れを告げ豫定より二列車早く午後三時十八分奈良に向けて桃山驛を出發。同四時十分奈良驛着。直ちに猿澤池に程近き今日の宿所三陽館に入る。十一時就寢。

四月四日 晴

七時に起床して八時に宿を立つ。青柳の絲垂るゝ猿澤池畔を半周し、緑の芝の起伏地に空突く古杉の間を右に左に縫ひ縫ひて、靜かにして雅やかなる奈良情緒を満喫しつゝ、春日神社に向ふ。樹間に想ふ神鹿の姿も亦し。参拜の後、三笠山の麓にて休憩すること半時。下りて法華堂經庫を見學して三月堂に入る、見れば扉柱の一に古き落書殘存す。これより二月堂に至る間に石碑あり、芭蕉の句を刻めり。

水取や籠りの僧の杵の音

二月堂の石段を下れば鐘樓あり。一行中の力自慢の者競もて鐘をつく、餘韻囂々。宏大なる建築物先づ目を驚かす之れぞ鎮護國家の本場、南都七大寺の一にして華嚴宗の本山、大佛殿。大佛に默禮して堂内を一巡し、出で、暫時休

息。正倉院前を通過し淺茅ヶ原にて少憩、神鹿に取巻かれて糞食をしたむ。二回記念撮影をなす。一は南圓寺の五重塔を背景とし、一は博物館の横手の小池を背景とす。

奈良博物館に入れば肖像畫展あり、寺社の國寶肖像畫を始めとし御物其他個人所藏のものを廣く蒐む。中にも藤原時代の色彩妍麗なる藥師寺及び興福寺の兩慈恩大師像赤松林中に瞑想せる明惠上人像、法然が重源をして海外に求めしめしと言ふ南宋の逸物淨土五祖像、鎌倉時代初頭の似繪群、禪宗の肖像畫中にては線と色とに異彩ある法燈國師像倭繪式の優秀なる大燈國師像等特に人目を惹く。其他白鳳、天平、貞觀、推古、藤原諸時代の特徴ある彫刻羅列せり。

奈良驛前に集合せしは午後三時、大阪に向ふ。車中右手に法隆寺の塔を遠望す。午後四時前大阪天王寺驛着。驛にて有田社會館の一事務員の出迎を受け一同電車を利用して今日の宿所たる内本町二丁目の有田社會館に到る。卒業生龜井直人君來訪。十一時就床。

四月五日 晴一時雨

つゝ「神戸よ、さらば。」とて戻り列車に投じぬ。旅行團戻りの汽車は高射。

四月六日 晴

朝六時二十三分厚狹驛着乗換、同三十分同驛發。いざ郷里も程近し……一同元氣回復。八時に正明市驛着。乗換へて同十四分同驛を出發して午前八時四十七分恙なく終點玉江驛に歸着す。校長先生初め河野、玉井、岩本、齋藤、中尾諸先生の御出迎を受く。點呼解散。

### 旅のグリーンブス

四年 田村克介

奈古をすぎた頃から、車内の賑かさは一層増して來た。丁度僕達と一緒に齋藤先生の御令息が居られたが、久永先生が、「坊や居るか。」と云はれたので田中が、「はい」と答へて伸び上つたが、先生は齋藤君を呼ばれたのであつたので車内はひつくり返るやうな笑の渦に巻き込まれた。

七時起床。今日は待ちに待ちたる大大阪を縦横に疾驅して凡ゆる近代文明の尖端に親しく接せんものと出發の仕度も甲斐々々しく、八時宿を出で先づ大阪城に向ふ。今更その規模の大なるに驚く。千疊敷裏の小池畔にて少憩の後、大天主閣を背景に記念撮影をなす。城を下りて陸軍造兵廠大阪工廠を見學す。萩川島の人平瀨國雄氏の案内にて廠内を巡覽し各種の彈丸、鐵材、火砲、戰車等の製造實況を見るコンクリートの廣壯なる大建築物、その名に相應しき大阪府廳前より電車を利用して渡邊橋なる朝日ビルに到り、糸井某氏の案内にて大阪朝日新聞本社を訪問し、活字鑄造、紙型製造、編輯室、輪轉機の運轉狀態等を見學し大いに得る所あり。屋上にて記念寫眞を撮る。見物を終りて大阪驛に向ひ、附近の阪急デパートにて一切の土産物を整ふ。午後三時大阪を後にして神戸に向ふ。恰も新造されし湊川神社にては來年の六百年祭を前に正遷座祭行はれ町々には幕を張りめぐらし提灯を飾りて装ひも美しく賑かし。斯くして午後七時十四分、我が旅行團は略々豫定通り京阪神地を見學し盡して大いに見聞を廣むるを得たるを喜び

出雲今市で十五分間休憩し大社行の列車に乗った。途中の車窓から見た比の地方の田には、非常に桑畑が多く、又特に珍しく奇妙に思はれたのは、麥が煉瓦のやうに土の塊を積みあげた高い畝の上に植えてあることである。此の地方は田に水が多く、麥田には不適であるが爲に、かうして水を避けるのかも知れない。大社驛に着いて真先に感じた事は、驛の構造が他の多くの驛と全く異つて居ることである。外觀は芝居小屋か又は支那の廟のやうで、屋根は紫色の銅板で葺いてあり、内部は切符賣場も改札口もすべてが神祕的か佛閣的で、天井も木目の美しい格天井である。驛前からアスファルトの廣い道路で途中一部分それが切れて再び二の鳥居の手前の坂の所から、今度は石疊の通路となり、それが盡きて美しい小砂利を敷いた道がすうつと神社まで續いて居る。此の町は、左程賑やかと云ふわけではないが、参拜者と門前店とは非常に多く、街も萩よりは美しい。僕の新しい靴が石道の上でコツ／＼鳴るのも嬉しかった。神社はさすが官幣大社だけに荘嚴で美しく、大きい

公園もあり、豫想以上に立派なものだった。自由に驛迄歸る時、一の鳥居の根元を抱へて見たら四抱へ程あつた。

四年 福永義晴

松江で五時起床。洗面後窓を開けてすがすがしい氣持になる。湖の傍にあるためか仲々寒い。残月は西に片寄りながら湖上に銀鱗を投げてゐる。段々と明るくなつて汀の美しい曲線が明瞭になつた。此の下にあるのが松江大橋、飯の時女中の云ふのには、此の橋が落ちて負傷者が出来たさうだが、三月三十一日渡初めであつた。「あなた達は丁度よい時いらつしやいました。」と云つた。出發の際旅館の者が全部見送つたのは氣持がよくて印象に残つた。

四年 河村定一

六時五十六分發列車で水の都松江を後に山陰線を天の橋立に向つて進んだ。遠く右に横たわる中國山脈の連峰は皚々たる雪を戴き、かすめる春空にまばゆい位だ。車窓に近い日あたりの良い赤土の丘に、梨島や葡萄島があつた。近

くの山は一帶に低く大い赤松の林である。左には廣く平野がひろがり、朝の太陽は霜の平野に輝いて一面に明るく天地だつた。耕地整理の行はれた廣い眞四角な田、眞直な新道、汽車は明るいレールをきしり進んだ。

やがて名峯大山の雄姿を仰いだ。頂上はもとよりなだらかな廣い裾野も深い雪に被はれてまぶしい程に明るく輝いてゐる。千七百米の秀峯、春光に映え、そのかなたに一群の白雲ゆるやかに流れて崇巖さ極みなかつた。「いゝなあ」と誰もその尊き美にうたれてじつと見守つた。廣い田のとしやくと電信棒が目にもとまらぬ速さでとり残された。然し彼方に望む大山と長くひく裾野の尾とは汽車と共に東へ／＼と進む様に見えた。左の平野には桑島や松林や背の低い叢の竹林もあつた。長く連らなつた防風林の向うに日本海が見渡された。晴れ渡つた紺碧の空は美しかつたがその下に見渡しのつかぬ日本海の青海原は更にあざやかだつた。

四年 香川朝政

いよ／＼橋を渡つて天の橋立へ行つた。然し何處にもそれらしい所は見えなかつたので、友達に聞いて見たら今歩いてゐる所が天の橋立だと云ふ事だつた。「何だ。こんな所が昔日本三景の一つと云はれたのか。」と思ふと大にがっかりした。

四年 河村定一

午前八時三臺の乗合自動車に各小隊は分乗し、廣い京都の大通を第一に御所に向つた。京都の市街圖を見てもわかるとほり京都の御所はとて廣く何となく靜かな中に神々しさが感ぜられた。此處に來た時、前の萩中柔道の先生の鎌田先生が大きな體で相變らず物凄く歩き方で砂利の道を僕等の團體へ尋ねておいでになつた。

四年 吉松陽

バスに乗つて西本願寺へ向つた。本堂の禮拜をすませて建物の見學に移つた。うす暗い一間に雜囊を置いて案内者に従つた。客室を見學して大廣間へ行つた。「ここは太閤



が諸大名と會つた室で、上座の繪畫は、描き方が反對で  
す。」と案内者が言つた。よく見ると遠い方を大きく描き  
近い方を小さく描いてある。則ち遠近が反對に描かれてあ  
つた。案内者の説明によつて、だん／＼退いて行くと、繪  
は不思議にも、普通のものよりよく見え、繪の中の小さい  
人間を退くに從つて大きく感じた。案内者は自慢してゐ  
た。僕は感心した。

◇

四年 浅原昌佑

永い間自動車に乗つてやつと桃山に着いた。御陵近くに  
なると廣い氣持のいゝ道が十町許り續いて居る。兩側には  
針葉樹林が青々しい葉をつけて居る。参道は緩くうねつて  
一路参拜者を御陵に導く。やがて神苑に入れば一面にすく  
／＼と杉の若木が整然と立ち並んで居る。あたりは一しほ  
森嚴の氣を漂して僕はおのづと身も心も引緊るのを覺えた  
が、いつしか石段を登りきつて御陵の御前に出た。おゝ其  
の奥を見上げた僕の目には、明治天皇の英靈とこしへに鎮  
ります御陵が仰がれたのだ。僕は清らかな山水に口をそゝ

があると見えて、鹿が數匹ついて居て先生は弱つて居られ  
た。

◇

四年 浅野力

春日神社を後に、今度は三笠山に向つた。僕は一金參錢  
也の登山料を出して登つた。僕は今迄三笠山は一寸した築  
山位のものだらうと思つてゐたが、案外登るに骨が折れ中  
途までくたばつたが、頂上迄登らねばと元氣を出して馳せ  
登つた。頂からは奈良市は云ふに及ばず遠く紀州の連山も  
見えた。天氣のよい日には大臺ヶ原迄も見えると云ふ事だ  
つた。

◇

四年 三戸開夫

大佛の大きな事は想像以上であつた。こんな建築物がよ  
くまあ千餘年の昔に出来たものと、當時の雄大莊重な藝  
術に感心せざるを得ない。大佛の裏手の柱に穴が明けてあ  
つて田中坊やがそれを通り脱けて皆を笑はせた。

◇

一一八

ぎ御陵の御前に立つた。其の瞬間僕の心は何とも云へない  
神氣にうたれて水の様に澄んだ。あたりの参拜者も寂とし  
て聲を立てない。たゞ吹く風の幽遠な杉林をわたる音が微  
かに傳つて來るばかりだつた。やゝあつて漸く首を上げた  
僕の心に我知らず浮んだのは、あの 明治大帝の偉大なる  
御功績であつた。麻の如くに亂れ衰弱しきつた天下を平定  
し、維新をなされて、今日の如く日本をあらしめられた  
明治天皇の御姿がくつきりと僕の胸に蘇つて來た。

◇

四年 刀禰彌太郎

三陽旅館を出ると、すぐ春日神社に向つた。奈良公園を  
通つて行く時、鹿が澤山居たが、皆角がなかつたのでつま  
らなかつた。春日神社の入口に一匹角のあるのが居たが、  
貧弱な角で折れさうであつた。神社は藤原氏の氏神で燈籠  
が澤山並んでゐて、中には千年も経つてゐるものもあるさう  
だ。三月堂、二月堂を見て八千貫もあると云ふ大釣鐘の所  
へ來た。數人ついて見たけれど、本當の鐘の音は出なかつ  
た。奈良公園で晝食したが、先生達の辨當には美味しい物

四年 山縣憲三

大阪に着いたのは、豫定より少し早かつたやうだ。有田  
會館と云ふから、どんな所かと思ひながら行つて見ると四  
階しかない。山本先生は八階と云はれたのにと思ひながら  
裏に行くと、本當に八階の素晴しく高いことがわかつた。  
此處で生れて始めてエレベーターに乗つた。「來てみれば  
左程にもない有田會館」と口の中から出た。寢室はまるで  
ライオンの檻みたいだ。又船の中のやうだ。とにかく八階  
まで上つて見ようと云つて四五人と一緒に頂上に上り、下  
を見た時の驚き、僕は生れて始めてだつた。飛行機で低空  
飛行したら丁度このやうだらうと思はれた。人間でも頭の  
頂上だけ見える。

心齋橋からの歸途、店屋にレンズと書いた廣告が出てゐ  
るのを見て、僕も友達もあんな物は大好きなので、すぐ飛  
んで行つて、顕微鏡を二つ買つて持つて歸つて皆の者に見  
せびらかした。

◇

一一九

二月堂には國寶になつた樂書もありました。そこから山路を下り、東大寺の大釣鐘の所に出ました。浮里君は早速力一杯に鐘をつきました。「ゴオン……」鐘の音はあたかも古の奈良の文化の末路を悲しむ様に靜かに寂しく消えてゆきました。

大阪で夕飯を會館の階下食堂ですませ、その後は自由外出が許されたので、僕は三戸君や伊藤君等とぶら／＼出かけた。道でタクシイを拾ひ大丸まで行き百貨店内を見物した。階上からエレベーターで下る時、三戸君が思はず「ヒヤア、コリヤタマラン。」と云つて一緒に乗つて居る者を笑はせた。實際あまり良い氣持はしなかつた。其所で二三の土産を買つて道頓堀へ出た。どちらを見ても火、火、火、火だ。赤や青のネオンサインは輝き、幾萬もある電球の灯は流れを射ました。實にあそこの夜景は美しくて筆にも口にも表はせません。

焚くほどは風がくれたる落葉かな  
ともかくもあなたまかせの年の暮

一 茶

校 報



第三十四回卒業式

昭和九年三月三日午前十時より第三十四回卒業式を講堂に於て舉行す。生徒父兄及保證人並に來賓多數の蒞席あり。河内校長舉式の辭に次ぎ勸語奉讀あり。次に卒業證書及び賞品授與ありて學校長の告辭、來賓を代表市川助役藤田中將の祝辭、父兄保證人を代表して吉賀恒太郎氏の挨拶あり午前十一時に終了す。當日卒業生にして受賞せる者左の如し。  
一、特等賞(學力俊秀にして能く校則を守り平素勤勉にして皆勤五箇年に及び且伍長となりて能く其の任務を盡したる者)

- 金山 繁
  - 一、一等賞(平素勤勉にして能く校則を守り本學年間皆勤し學力俊秀にして伍長となりて能く其の任務を盡したる者)
  - 長谷和夫 小方 司
  - 一、一等賞(平素勤勉にして能く校則を守り學力俊秀にして伍長室長となりて能く其の任務を盡したる者)
  - 林 幸男(伍室) 辻野三郎(伍)
  - 一、一等賞(平素勤勉にして能く校則を守り皆勤五箇年に及び室長となりては能く其の任務を盡したる者)
  - 江島 修 後藤榮一 飯田典之
  - 一、二等賞(平素勤勉にして能く校則を

- 守り皆(精) 勤五箇年に及べる者)
  - 田坂 茂 二階 晋 楊井 茂
  - 小倉信夫 岩河好一
  - 一、三等賞(平素勤勉にして能く校則を守り本學年間皆勤し伍長(室長)となりて能く其の任務を盡したる者)
  - 小田武夫 原 正藏 阿部義人 中原正久
  - 一、四等賞(平素勤勉にして能く校則を守り伍長(室長)となりて能く其の任務を盡したる者)
  - 玉木和彦 菊屋嘉十郎 岡藤龍夫
  - 三吉二三男 阿川正六 檜崎隆二
  - 澤田大頭 伊東美一 中原芳美
  - 中村喜雄 田中理責 寺島直太郎 神保徳喜 野上信行
  - 一、五等賞(本學年間皆(精)勤せる者)
  - 龜井直人 大野孝祐 柴田清作
  - 津村朝三 桐山七郎 三浦尙彦
  - 河内敬朝 佐伯孝友 室田 了
  - 松井 洋 三浦 久 上田達三
  - 藤田 誠 松尾岩雄
  - 進歩賞(同窓會より)

(學年の進むに従ひ成績向上せる者)  
 桐山七郎 田坂 茂  
 前學年に比し著しく成績向上せる者  
 金山 繁 後藤榮一

**賞品授與式**

四月八日、新學年の始業式後、前學年度に於ける第四學年以下の生徒に對し賞品賞狀授與式行はれたり。

- 一、特等賞(平素勤勉にして能く校則を守り學力俊秀にして伍長(室長)となりて能く其の任務を盡したる者)
- 四年 西本 實 岡敬太郎
  - 三年 淺原昌佑 杉原大泰 貞本 尚
  - 二年 山根忠雄 新谷皓俊 小橋 安次郎 岡村大一郎
  - 一年 厚東雅夫 新谷勇二
- 一、一等賞(學力俊秀にして能く校則を守り伍長となりて能く其の任務を盡したる者)
- 四年 山下誠一 本石獨芳
  - 三年 石村豊徳
  - 二年 岡崎寛人

一、一等賞(平素勤勉にして能く校則を守り學力俊秀なる者)

- 四年 能美忠廣
- 一年 藤山昭次

- 一、二等賞(平素勤勉にして能く校則を守り伍長(室長)となりて能く其の任務を盡したる者)
- 四年 新谷 幸 北出松太郎 三 村巖 木村壽巳
  - 三年 中村五郎 能美陽一 田邊 正通 淺野 力 安野 忠
  - 長野征逸 福田寛雄 田中 正明
  - 二年 竹内周二 梅屋 薫 土井 千幸 有田 敬 山田隆彦 弘永巖一
  - 一年 久芳一人 末永太一郎 明 山清觀 阿部 隆 山内恒 直 玉木博彦 林 良夫 大野政雄 杉山 巖
- 一、三等賞(本學年間伍長(室長)となりて能く其の任務を盡したる者)
- 四年 松尾美男 中川修二 村岡

統一 藤本盛人 吉武龍彦  
 高橋達人 田邊實彦 吉津 孝甫 早川正毅 杉山 憲 吉田孝二

- 三年 香川朝政 神村 正 阿村定一  
 吉屋竹治 山中健一 瀧口吉世  
 二年 吉村安時 熊谷正雄 新谷 保治 竹本經夫 堀 啓一 藤本雅巳 濱村武徳  
 一年 水津久夫 土屋康紀 藤田 坦 森井 潔 梅地 定 伊藤伸彦 金子直佑 河内 壽昭
- 一、四等賞(本學年間皆勤者)
- 四年 一九名
  - 三年 一九名
  - 二年 四一名
  - 一年 五〇名
- 一、四等賞(本學年間精勤者)
- 四年 二名
  - 三年 一〇名
  - 二年 二名
  - 一年 七名

同日同窓會よりも各學年成績進歩著しき者に進歩賞の授與あり。

- 四年 秋村 明 永田元三郎 三村 巖
- 三年 福永義晴
- 二年 小河 博

**共研會設置**

昭和九年度新學年より陸海軍將校生徒志願者の爲に共研會設けらる。

- 共研會規約**
- 第一條 本會ハ共研會ト稱シ山口縣立萩中學校生徒中陸海軍將校生徒志願者ヲ以テ組織ス
- 第二條 本會ハ會員自ら進ンテ優秀ナル帝國陸海軍將校タランコトヲ主眼トシ會員相互ニ切磋琢磨シテ志操ヲ確實ニシ品性ヲ陶冶シ體格ヲ優良ニシ學術ノ向上ヲ期スルヲ目的トス
- 第三條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
- 會長 萩中學校長之ニ當ル
  - 副會長 萩中學校首席教諭ニ囑託ス
  - 幹事 萩中學校體操科教員ニ囑託ス

指導者 萩中學校配屬將校ニ囑託ス  
 委員 各學年會員中ヨリ一名ヲ互選ス任期ハ一年トス  
 顧問 左ノ人々ニ囑託ス

- 萩將校會長 帝國在郷軍人會阿武郡聯合分會會長
  - 帝國在郷軍人會萩市聯合分會會長
  - 在郷在郷軍人萩聯合分會海軍部長
  - 防長武學生養成所山口支部長 (萩在住ノ場合)
- 第四條 本會ハ其ノ目的達成ノ爲大要左記事項ヲ實施スルモノトス
- 一、機會アル毎ニ精神教育ヲ行フ
  - 二、學術向上ニ就テ特別指導ヲ行フ
  - 三、體格向上ニ就テ特別指導ヲ行フ
  - 四、本校出身陸海軍諸學校在校生トノ懇談會ヲ行フ
  - 五、其他先輩名士ノ訓話會員相互砥礪ノ爲臨時集會ヲ行フ
- 第五條 會員ハ會費トシテ毎月金五錢ヲ

醸出スルモノトス  
 第六條 本會行事ニシテ特ニ費用ヲ要スルモノアル時ハ臨時徵集スルコトアルヘシ

- 第七條 會員中左ノ何レカニ該當スルモノハ退會セシムルコトアルヘシ
- 一、本會々員トシテノ目的ヲ達成スルニ不適當ト認ムル者
  - 二、學術又ハ體格不良ニシテ向上ノ見込ナキ者
- 第八條 入會又ハ退會セントスル者ハ幹事ニ願出ツヘシ

**附 則**

- 第一條 本規約ヲ變更セントスル時ハ關係者協議ノ上ニ於テ決定スヘシ
- 第二條 本會ノ會計ハ幹事之ニ當ル
- 先生の更迭**
- 昭和八年十一月以後(前號報告後)  
 ▲木津谷書記 昭和九年一月十九日御新任寄宿舍書記として就任せらる  
 ▲柳屋少佐教官 昭和九年三月三十一日第五師團司令部附として廣島市へ御榮

轉

- ▲深町少佐教官 昭和九年四月濱田第二十一聯隊より配屬將校として御新任 教練科御擔任
- ▲岡崎先生 昭和九年三月三十一日御新任 作業科御擔任 先生は本校第二十九回卒業生にして鳥取高等農業學校を御卒業の上廣島歩兵第十一聯隊幹部候補生を経て本校に赴任せられたり

### 厚母書記を悼む

厚母清賢氏は昭和八年四月以來本校寄宿舎の書記として恪勤精勵せられたが、不幸にして病を得られ昭和九年一月三日忍焉として逝去せられた。氏は永年萩市の教育界のために盡瘁せられ徳望高かりし人、茲に謹しんで哀悼の意を表す。

### 校誌(簡略)(自昭和八年十一月)

十一月七日 三上先生新任式

- ▲四月二十日 井上陸軍大將の講話あり
- ▲四月廿三日 招魂祭参拜
- ▲四月廿九日 天長節拜賀式舉行
- ▲四月三十日 午後より萩聯盟體育協會主催對抗競技大會本校庭に於て行はる
- ▲五月二日 第四五學年辯論小會
- ▲五月三日 第一二三學年辯論小會
- ▲五月五日 武道競技小會
- ▲五月八日 原田部隊の滿洲渡航を玉江驛に見送る
- ▲五月九日 大坪學務部長來校
- ▲五月十二日 全校一日修學旅行
- ▲五月十八日 火災豫防演習舉行
- ▲五月廿五日 松陰神社参拜
- ▲五月廿六日 海軍紀念日に關する田村海軍大佐の講話あり
- ▲五月三十日 行啓記念競技大會舉行
- ▲六月一日 本校卒業生楊井歩兵少尉の滿洲實戰談あり
- ▲六月五日 東郷元帥國葬當日に就き哀悼式舉行
- ▲七月六日 第一艦隊來萩本校卒業生阿

- ▲十一月十日 國民精神作興に關する詔書換發十週年に就き奉讀式舉行
- ▲十一月十一日 中等學校青年團聯合演習に参加す
- ▲十一月十二日 朝香宮允子内親王殿下御葬儀につき遙拜式舉行
- ▲十一月十八日 防府に於ける少年體育大會に三年以下選手三十四名出發
- ▲十一月廿一日 松陰先生追慕會開催後松陰神社に参拜
- ▲十一月廿七日 教練查閱實施 查閱官赤松第四十二聯隊長
- ▲十一月廿九日 辯論大會
- ▲十一月卅日 消防演習後沖本萩警察署長の講話批評あり
- ▲十二月廿三日 終業式
- ▲昭和九年一月一日 拜賀式舉行
- ▲一月八日 第三學期始業式
- ▲一月九日 寒稽古開始
- ▲一月十八日 寒稽古終了後武道大會開催
- ▲一月廿九日 午後一時より萩市公會堂に志道陸軍大佐の滿洲熱河戰を聽く

武潔少將の講話あり 午前十時より軍艦日向に便乗し油谷灣に赴く

- ▲七月十六日 武道大會開催
- ▲七月二十日 終業式
- ▲九月一日 第二學期始業式
- ▲九月九日 第三學年及び第五學年生徒の保證人會開催
- ▲九月十日 五學年生夜間演習を志都岐に行ふ
- ▲九月十三日 乃木大將退墓會香川先生の講話あり
- ▲九月十四日 縣體主催水上競技大會に本校選手出發翌日歸校
- ▲九月十五日 生徒出身小學校長招待會開催
- ▲九月十六日 萩市體育聯盟主催武道對抗競技に出場す
- ▲九月十八日 滿洲事變記念講演(深町教官)後武道競技小會
- ▲九月廿二日 海野鏡圓氏の精神講話あり
- ▲九月廿九日 縣體主催體育大會に出場選手の壯行會舉行

一三四

- ▲二月十一日 紀元節拜賀式後萩縣に故江本少佐の遺骨を迎ふ
- ▲二月十八日 故江本少佐慰靈發明倫小學校講堂に行はれ職員生徒参列す
- ▲二月廿三日 皇太子殿下御降誕奉祝式舉行
- ▲二月廿六日 中等學校射擊大會に選手十名派遣
- ▲三月三日 第三十四回卒業式舉行
- ▲三月十日 陸軍紀念日に就き林少將の講話あり
- ▲三月十九日 藩論統一記念祭に就き河野先生の講話あり終りて志都岐公園に於ける記念祭に参列し旗行列を行ふ
- ▲三月廿二日 終業式後柳屋教官告別式あり
- ▲三月廿七日 入學考査開始
- ▲三月廿八日 入學考査終了
- ▲四月九日 新學年始業式後 深町教官岡崎先生新任式あり午後一時より入學式
- ▲四月十一日 新舊生徒紹介式
- ▲四月十四日 學級自治會

- ▲十月一日 縣體出揚選手の報告會あり
- ▲十月十七日 展覽會第一日
- ▲十月十八日 展覽會第二日第三十五周年創立記念式舉行後大運動會開催
- ▲十月廿七日 器械體操大會出場選手及び籠球選手山口市に出發翌日歸校
- ▲十月卅日 教育勅語奉讀式後學校長の講話あり



一三五



### 校友會報

#### 書道部

突ツ端が小學生作品の部!

並んだ並んだ。その無邪氣な繪!「祭り」「祭り」「運動會」「運動會」「運動會」「人」全く微笑せずには居られない。その無邪な童心で描いた繪!自由な繪!祭りといへば、とにかく鳥居と店屋を畫いたらいふんだといふ。運動會には色々なものを一枚の紙に並べようとする。指を一本一本分けて描いてゐる所に共通した子供心が流れてゐるのだらう。「お父さんなるものも、その優しい顔に顎鬚をそへた事がたまらなく可愛い。聊の哀愁をも含まない自由な世界!

第二室は圖案、連続模様等の本校以前からの傑作を集め見るべき物が有つた。その他入選作品も大部有つた。第三室!此所が我々の室。室に入って直ぐ目についたのが一等の「赤い屋根」其の他非常に多くの優秀作! 皆技巧を無視した大膽さ!其のタッチの自由!何らの束縛も許さぬ。あらゆる心が、あらゆる腕が描き出した美の萩の延長! 萩!それは山

#### 書道部

秋當に耐なる神嘗の祝典並びに、我々の運動會の二日に亘りて、萩中三十五周年記念を記念すべく、我等成績品展覽會はめでたく開催された。雨天であつた前日も忘れずかの様に、十八日は天あくまで澄みて、地は喜びに溢れて、展覽會は夥しく雑踏した。書道部は例年の如く、四學年二組、三組の兩教室に生徒の作品を陳列し、特に三組には、先輩の筆蹟を掲げた。このみごとな筆蹟は、我等を三十五年前の昔に引き込まずには居らなかつた。

二組では一部と二部とを掲げた。一部

は寧ろ高原と言ひたい位。變化に富んだ曲線に市街を掩れてゐる。海は水平線に嶋を浮ばして居り、磯は美しき白布を擴げ、朝に夕に、變化の多い萩の景色! 枯淡の美! 動的の美! 靜的の美! 全く美のカクテルと言つてもよい位だ。靜に見た萩には靜の繪が生れ、動に見た萩には動の繪が生れてゐる。各人の見たまゝの萩の姿。殆んど全部がそれである。自由な。大膽な伸びのした個性の表れである。……次の第四室は先輩の作品室として今年特別に設けられたものだ。其の平行に垂れ下つた樹色の幕は室内に柔かい光線を包んでゐる。鑑賞者も無口だ! 多分此の美しき境地を意識して居たに想違ない。先生の作!「百合」笑ひを含めた優雅な女神を思はせる花の香! 黒と白……總べてが洞ひの有るすがすがしい階調だ。「岩」鈍い水の色! 七つ〱した岩。漁り人、岩陰、その中に力強い海の詩が漂ふて居た。「緑の田園」には其の柔い色彩とタッチに印象づけられた。圖案、ポスター等も新味を與へ

とは現在三學年、二部とは現在の二學年である。二部の杉山君の巧みな書法には何人も激賞の言葉を放つた。在學生の部では、少しく書法に元氣が缺けてゐる様だつた。又一學年には、巧筆乏しく名譽の一等がなかつた事は遺憾な事である。今後の奮闘を祈る。次の三學年三組の教室では小學校成績品を掲げた。その無邪氣な元氣な書には、著しく觀覽者の目が惹かれた。終りに臨みまして、今後の一二年生諸君が専心書道に勉勵されまして、萩中書道部を榮えある地位に築かれん事を切に祈願します。(山根生)

て居た。人を畫題にした「自畫像」も靜物、風景と又異つた滋味を含み、明暗のとれた立體的な美がうかゞはれる、黄色調の「矢車草」の大作のピンとした強い花の性質が見られる様な氣がした。故平田氏の老練な繪畫、此の會場の空氣を支配してゐる様な。「晩鐘」とも言ひ度い黄昏の森! 空に浮ぶ雲は無常感を偲ばせてゐた。森の神秘! 暮れようとする自然! 故人といふ字に一入感じ深く思はれた。「百合」の笑ひ出しそうな顔! 先生のそれとの對照が殊に面白い。先生の十重二十重のお座敷とすれば、此の作は正に洋装の婦人といへよう。靜と動! 優雅と快活! 同じく蕪高い百合の香だ。「春の岸邊」のチヨコレートの様な甘つたるい色彩。「舟着き場」の大陽の光線、屋根の影、水の色は此の畫面の釣合ひを立派に保つてゐる。「ホブラの並木道」、朝早く流れ出た自然の力、そのさわやかさ、百舌鳥でも鳴いて渡らうとする朝の空! ニュークな存在であつた。棕櫚も秋風にきら／＼と音を立てゝゐるの

が、うかがはれる俳味のある繪である。日本畫としては一番右手にあつた大作は澄み切つた信州あたりの景色を聯想させた。此の時この詩境を、つきぬけて頭上に鋭い百舌鳥の叫が獨り不可思議な餘韻を漂して行つた。其の他數點の日本畫を見受けられたが、その道でない我々は、これについてくど／＼しい感じを逃る危険をさげたい。(原・中野記)

#### 地歴部

絢爛を咲き競ふ美藝の秋、萩中第三十五周年大展覽會は秋深き清澄な中に序幕を神嘗祭と共に開いた。殊に創立記念大運動會たる十八日は參觀人陸續として後を絶たず。たゞ驚歎と稱贊とのみ、我が地歴部は三ノ二、四ノ一の二教室にて一部を歴史科、一部を地理科とす。一般方面よりして成績優良、昨年に比して一入の満足を加ふ。概略的に推して、地理科の陳列作品は第一を模範に置き、地圖、繪葉書、參考物これに次ぐ。我が天下に誇る模範は年々に改良し來つて今日の榮ある實を得たのであるが、殊に今年に至

つて、其の特種獨特性を發揮して、正確精密、刻苦の跡歴然たり。實に其の努力と云ひ、工作點にしても模範たるものなり。實理、實觀、いづれも力作、快作、超大作の氣焔を擧げて來た事を特に深く感ずる。地圖此れは稱すべきものは無い。今一度努力を要す。又繪葉書の出品多數に上つた様だが、此れは實に面白い考案だ。觀覽者も相當見入つた様である。

歴史科は肖像畫と研究物に於て優をなす。肖像畫も刻苦實觀されたる點、研究物も各自研究的精神を發揮して、實務に接近して來た事は將來の發展を萌せり。今や此の光輝ある地歴科を全ふするに當り、諸君の一大努力と奮氣とに對し感謝と、感謝の情のみ。然れども諸君よ！満足する勿れ！目的は一つだ。先づ目を開けそして遠大なる地歴を達成すべきだ。先づ實現なり、空想にあらず、弊ありて新あり、吾人の天賦の性能は大にして大なり。之を修めて十分なる發達を爲さしめ、之を用ひて地歴に充て、萩中の地歴

把握されんことを祈つてペンを置く。

#### 博物科

本部は主として一、二年諸君の作品で本年の記念にふきはしき、努力の跡が窺はれる。暑中休暇中陸に海に昆蟲植物を一心に採取せし諸君の作品は五ノ一及博物教室に満ちて運動會と共に一異彩を放つた事は感謝に堪へぬ。

今年は出品數に於ては先年に比して多くとも劣らず研究の新方面への發展作品の美的藝術化は稱讚の的であつた。終りにのみ今一層の研究と努力を拂ひ藝術的作品を多數に出品し今一段の進歩を見られんことを切望して筆を擱く。

(佐伯貢記)

#### 國防部

十月十七日、前日までの雨模様様の天氣も、我が萩中學校創立三十五週年記念日を祝せしか、からりと晴れ渡り、創立記念大展覽會場には、早朝より續々と觀覽者の出入をみた。

特に本年より深町教官の御盡力により新しき試として設置されし我が國防部は

地歴の萩中とし、校光を揚げ母校の進運を扶翼せば吾人の務めは全くせられん。

(秋村 明記)

#### 理科部

昨日來の雨も小降となりやがて燦然として太陽が開校第卅五週年の記念に輝く本校の上に榮光齎せし十月十七日、次の十八日と共に生徒諸君の酷暑焼くが如く夏と戦つて完成したる苦心の結晶を實驗室及び、階段教室五ノ一の教室に陳列して雲集せる觀覽者に午前九時開場して觀覽に供せしめた。こゝかしこに讃歎の聲が起る。特に五ノ一の教室は評判だ、實際目のあたりに見るが如き感を興へる數隻の軍艦が雄壯な英姿を波ならぬ帆に浮べてゐた。一方ならぬ苦心の跡がひし／＼と胸を打つ。就中二年澤本君の如き一人で四隻も出品せしは、觀衆一同をして驚歎せしめ實驗室に於ては五年徳久君の蒸氣機關車が斷然頭角を現し、三年小橋安次郎君の寫眞機も多大の稱讚を博した。又階段教室に於ては飛行機オンパレ

老幼ことごとく、その意を解し得て二日に亘る展覽會中、絶えず觀覽者の大半を獨占しつゞけたのである。

我が國防部は三ノ一の教室内及南控所を以てあてられた。而して幾多の尊き染血の出品物ある爲、嚴重に觀覽者の脱帽敬意を表せられん事を請ひ、且つ警視の生徒をおきて荷も觀覽者をして不敬にあたる如き舉をなさしめぬ様充分に注意した。

先づ脱帽靜肅にして入口を入れば、右手の壁には滿洲事變の口火を切りし柳條溝附近の實寫及び數多忠勇の土の花とちりし、滿洲事變の主戦闘の圖を掲げ、先づ觀覽者をしていたく感激せしめたり。しばらく進めば我が校の先輩故江本少佐の尊き面影と、御奮闘の跡生々しき御軍刀を拜す。涙又更なるものあり。その左手には當時鬼神とうたはれ、世人をして齊しくその壯烈なる最後を仰がしめし、故古賀聯隊長一家の御寫眞及び御戦死の際の御軍服に附着せる血粉を示せり。觀覽者一同知らず／＼頭の下るのを覺え

ら下の如き感あらしめ、三年新谷君のラヂオを据へ附け觀衆の耳を驚かしめた。その他色々苦心の跡の窺はれる作品も有り努力に對して感謝の意を表する。

今年二日間に涉つて行はれたこの大展覽會を通覽するに、全く獨創的な作品の僅少であつたこと出品物の少なかつた事は遺憾だ。この卅五週年の記念に恥かしくないものはどれだけあつたか、もつと熱心でなくてはならぬ。作品について云へばよいものもあつたが、粗末なものや精巧でないもの既成品を買つて出品せしものこれは飛行機に多くあつたがこれでどうする。今や吾等が祖國は一大危機に面してゐると同時に、産業界に於ては目覺しい活躍をなして來た。この發達は皆科學の進歩のお陰であるに諸君の中には可憐な不熱心なものがあると思へば前途は暗だ。年々出品物の數が減じて行く傾向があるがこんなことではならぬ。研究して何處に損がある。將來に於ては更に／＼に進歩して萩中名物のこの展覽會をして科學王國としての誇りを

たり。

更に眼を左に轉すれば、匪賊討伐の實寫あり、あくまで自己の任務を遂行して己まざりし勇士の戦死の狀を見る。

進みて正面壁に到れば、「尊き染血の軍服。」の七字、強く吾人の胸を打つ。近寄れば濃黒き血に染みたる軍服あり、附貼の記事を見るに、この軍服を着せる勇士の奮戦の狀を記し、遂に戦死とあるおゝ服の左胸部を見よ、血に染みたる部分に突き破られし所あり。あゝ敵彈の貫通せしあと……勇士の靈あたかも吾人に呼びかけるかと思はれて、鬼氣身に逼るを覺えたり。更に左に眼を轉ずれば、又こゝに血染の軍服あり。敵彈につらぬかれし水筒あり。觀覽者一同是に至りて感極り、愛國の情勃々として湧くを覺えぬ者なし。血染類に目禮して中央部に陳列せる軍需品を見る。

鐵兜をはじめ、飛行帽、飛行服、防寒着等又、防暑服、防暑帽等もあり、既に防暑の用意までも成れるかと思へば皇軍の用意周到なるを喜び、大いに意を

強うした。又観覧者の最も珍しく感ぜしものは、飛行用の食料品であつた。こゝを出で、南控所に入る。教練掛圖及び生徒夏季休業中の製作品を掲ぐ。慨して努力の跡認め得るも二年、三年の作品は、まだ上出来とはいへまい。この他五年生製作のタンク模型を観覧に供した。顧ふに観覧者一同、何物か大きい感銘を興へられ、力強きものを胸に印して会場を去つたことであらう。

我が國防部は、始めての試に於て斯の如き好成绩をおさめ得たのだ。これを期とし今後、年毎にこの「國防部」を設けて、たとへ本年の如く貴重なる出品物は得られぬとしても、少くとも一般人の軍事智識を養成せしむるに足るだけの資料を集め、これを一般人に提供し、刺戟少き山陰の民に少しなりとも刺戟を興へ、愛國の熱情を絶えず鼓舞すべきであらう終に臨んで國防部の永續發展を祈る。

### 競技部

(岡崎實人記)

第四回萩中、萩商、青年、陸上競技対抗

けるに至り、山崎君は三等、吉武君五等此處に一舉<sup>5</sup>。續いてトラックでは低障害、これは青年の出場者なく中學、商業の鏡り合ひ、先づA組に於て山崎君難なく入選、松尾君練習不足の爲失敗。B組の杉原君は樂に入選したが松浦君惜しくも失敗せり。時にフィールドでは圓盤投だ、我々の松浦、田邊、田村、阿武君皆意氣旺盛なり。試合は始つた美しい弓形の弧を描いた圓盤は27米前後に落ちる。レコードは餘り思はしくないらしい。そして師範出の古豪山根君昔の力、未だ衰へず第一位、レコード27米39。田村君吉君と僅かの差で第三位。然し落膽する勿れ、君のアームモーションには將來に望みをかける。松浦君案外調子よく四等に喰ひ込む。こゝに又5點を上げる。其の時トラックでは百米決勝。おとトラツクの花形百米決勝。吾杉原、山崎君萩商の強敵佐野、松岡を何處迄追撃するか。佐野、松岡油断をすな新進杉原を知らんか。とは萩中應援團の均しく切望するところ……愈々若き選手は平素の實力を

### 試合(萩市體育聯盟主催)

指月の機も青葉と化し五層の天守のそり立つ其の萩城の麓にて、教を受けて育ちたる吾々六百の萩中健兒は、前年の優勝旗を還すまじと勇士達を勵ます應援歌の中で第四回萩中、萩商、青年對抗陸上競技大會の幕は切つて落された。

此の日天長節雨天の爲延期されたる今日四月廿日も、前日の雨の爲、コンデイションは上等とは言へぬが、それでも選手達の意氣激濁たる顔を見れば、此れ位ひの事何のその……。先づ會長の挨拶に續いて萩中山崎君の優勝旗返還の劇的シートの後百米豫選のビストルと共に始つた。吾校よりはA組に吾等の名スプリンター山崎君輕く入選。田邊君練習不足の爲か僅かの差で失格。B組の杉原君、此れ又輕く入選、村田君惜敗す。此れで二人決勝に臨む事が出来た。

此の時フィールドでは砲丸投決勝、吾校よりは柔道の巨人松浦君と、二十貫に近い怪物とまで稱へられてゐる田村君と阿武、山崎君出場。十一米の白ラインが

發揮せんと白いラインに並んだ。「位置について。用意。ドン」

立つた白い煙が、と最早や三十米も彼等は走り出でゐる。「オ、」杉原があの腕を前後にグン／＼振り出した。皆並行だ。「アツ」山崎スタートを遅れたな、少し後だ。然し出だしました。山崎が出ました。四等をグン／＼つめてゐます。杉原も懸命に走つてゐます、八十米八十五米「ア」佐野出ました。松岡出ました。杉原少し遅れ氣味です。然しグン／＼つめてゐます。が果せんかな佐野一着でゴールイン、次いで松岡、杉原ゴールイン、少し遅れて山崎ゴールイン。然し四着を少し抜けなかつたらしい。此の時統制のそれた物凄い應援團が喰り出すところが場内アンウンサーの報告によれば、我山崎君が六着として落ちてゐるとか。「何を！」山崎が落ちた、そんな事があるもんか。先づ松尾の奴がどなりだした。皆憤慨した。そして抗議を申込んだが駄目。何だ糞！商賣人が相手になるか。一點位他でとり直すんだ。と吾々

### 一四〇

人目を惹く。そのラインを越さず者ぞ誰吾の松浦君ではないか、それに商業マンの中村吉雨君だ。山崎は他種目出場の爲唯の小手馴し、そして阿武、田村君日常の實力を發揮し得ずして惜しくも點を他へ譲つた。唯松浦君の闘志に頼るのみとなつた。松浦君頑張れ！そして僅かの所で三位に落ちた、然し君の力投に大いに感謝する。貴き三點は採點表の一隅を飾つた。次でトラックでは四百米豫選萩中よりはA組に田村君、B組に山崎、田邊君難なく入選。杉野君惜しくも落選然し君の將來に多大の望みを有す。あのアームモーションにて頑張れ！次が走高跳決勝、吾校からは山崎、松浦、瀧口、吉武四君出場。瀧口君練習不足にて踏切り遠く失敗、然し松浦、山崎君のバネ物凄く、バーはズン／＼上り、遂に一六〇米。此を誰が跳ぶだらうか。それや！諸君松浦、山崎だよ！ところで山崎君實力はあるが後を頼んで、愈々松浦君と萩商の吉富君の大接戦、恰も昨秋縣體のポールを思はせた、勝敗遂に決せず點を分

の決心益々固く涙を吞んで次は走幅飛。今度こそはと山崎、杉原、吉賀、池田の選手を送る。今度こそはと、あの物凄いアンサー、バネでヒューと空中に飛んで行く。遂に一等だ。杉原は踏切り合はず吉賀、池田は練習不足の爲め失敗。然し吉賀君の將來は恃むに足る。次はトラックの千五百米決勝。足の長い來島彼獨特のフォームで古豪師範の小田君と先輩來島さんとよく善戦して三着となる。他の若連中長谷川、帥井もよく頑張つたが僅に負けた。こゝに又三點。續くは大接戦を豫想された低障害。吾が山崎、半田と如何に戦ふか。のすか、のされるか。吾々は握つた大きな汗を。然し多種目出場の彼は間一髪之差で二着となつた。杉原は四着。こゝで又も六點。次で棒高跳。此れこそ今日の大會を飾るフィールドの花。西日本選手権ホルダー山崎アンサーは他は問題にせず一本の棒に氣を合せ空中に舞ひ上り難なく一等。次は一万米これは若連中將來の萩中はこのこなものだから、長谷川二、豊田四、中村五の順序で

ドン、拍手に迎へられつゝ歸つた。試合もだん／＼終りに近き、四百米決勝と聲高らかに場内に響く。吾校は精銳山崎、田邊、田村の三君。名を聞いても物凄いな奴の揃ひぢやうがや。スタートした。「あ」驚くなよ萩中三人並んで仲よく第一線に立つてゐる。時計はズン／＼廻る。三十秒もかゝつた時だらう、突然山崎猛スピードで他をリードします。田村も出てゐます。然し青年來島出てまいりました。出てまいりました。「あ」山崎、田村を抜きそうです。後八十米。八十米。七十米。出ました來島が、田村を抜きました。山崎も抜かれんとしてゐます。後十米、五米、兩人共ゴールイン。然しアナウンサーの報せは一等來島です。山崎二等、田村三等、田邊五着。次は愈々最後を飾る百米繼走。

思ふに繼走のメンバーは休養して今か今かと待つてゐるが、後二人はすぐ前に四百米に走つて大變疲れてゐる。山崎は殊に多種目出場したので弱り氣味で誰か代つて呉れ頼むとその光景は目も當てら

れぬ涙ぐましさ。然しこれからは魂で行くのだ「頼む山崎」と哀願すれば、山崎「よつし」引受けたと雄々しく立つた。それだその意氣だ。應援團も唸り出す。間もなくトップの杉原、松岡、齋藤が位置につく。と飛び出た。やつた杉原トップです。松岡より先んじました。半米リードその儘直線に出でグン／＼出ました。が残念ながら半米位後になつてその儘セカンド杉野へ君は若年ながらアームモーション物凄く大草をぐん／＼つめてゐます。後一米。も少しだ頑張れ／＼。

應援團は狂氣してゐる。そして第三走者田邊へ、田邊は四百米の復讐戦だ。その効果見る／＼表はれ音吉をつめました。そしてラストスパート凄く殆んど同着でラスト走者山崎へ、バトンタッチ万點、その瞬間萩商を断然のして佐野より一米先んじ吾萩中一等を走ります。直線コーヌに出ました。双方共グン／＼滑つてゐます。然し山崎は四百米の疲れで果せるかな佐野に抜かれ僅かの差で負けた。然し實力に於ては決して負けぬ。斯くして

總計點は萩商の勝となり、優勝旗は音吉君の手に渡された。吾々は唯黙然と頭を垂れて拍手した。致し方ない今度の關西の大會には必ず勝つといふ決心を選手は各々持つて此の大會をとげた。然し個人試合にては吾山崎君二十點にて一等、松浦君二等で萩中が一、二等を占めたわけだ。此の元氣で行けば來年は必ず勝てるぞ後輩諸君大いに奮闘あれ。

西日本對抗陸上競技大會

昭和九年七月二十二日第一回西日本男子中等學校對抗陸上競技大會は、山口縣陸上競技協會及び大毎新聞關門支局主催の本に公認長府競技場に於て舉行さる。前日の雨も物ともせず参加せるもの實に二十四校にして山口縣並に九州四縣にわたる。

午前九時選手入場式あり。開會辭、選手宣誓、森競技委員長の挨拶ありて式を終り、引續き競技にうつる。不幸にも終日絶間なく驟雨に襲はれたトラックは水浸りになり選手は雨水と泥濘に苦しんだ。

この上なき悪コンディションと戦はねばならなかつた。

我が萩中よりは團體としては出場せざりしも、個人競技に試む。山崎、田邊、杉原、田村の四君のマイルリレーチーム棒高跳、ハードルに山崎君、それに五千米に小生の四種目である。九時三十分、低障碍第一豫選にて本大會の火蓋は切つて落された。折から煙るが如き小雨の中を物ともせず若き戰士は一校の名譽のために必死となつて走つた。山崎君B組に入る。ハードラーとしても關西にその名を知られた君である。何の苦もなくテープを切る。然し君の力とする棒高跳と我が校のほこりであるリレーへ全力のため棄權せらる。

ついで百米第一豫選、四百米第一豫選あり。雨のためいづれも好記録を見ず、フィールドでは走高跳決勝あり。興風中の田中君は出す宇佐中の井本君一米七五を跳んで優勝す。

水田の如き泥濘をけつて榮冠を目ざし奮戦する様はげに壯烈そのものである。

風光明媚で鳴る瀬戸の海もどんよりと曇り雲足は早くしば／＼土砂降りに見舞はる。背後に連なる山の松の緑はいやに濃くしげつてゐる。

十一時より四百米繼走豫選、八百米競走豫選、千五百米豫選あり。中距離界のナムバーワン、宇部工業の石田君見事なフォームで走り樂々と八百、千五百米共に他をリードす。砲丸投もかんばしからず。圓盤投にも好記録出す。

十二時半、待望のマイルリレー第一豫選行はる。我がチームはB組に門司商業小倉工業、鞍手中學、下關商業、八幡中學と組む。トップ杉原君セカンド山崎君サード田村君、ラスト田邊君、強剛ぞろひの我がチーム樂に走つて決勝への餘力を残す。

低障碍第二豫選に續き百米決勝あり、一着九州の築上中の内丸君タイム十二秒三萩商佐野君之に次ぐ數十分をおきて低障碍決勝又も豪雨ありてグラウンド川の如し多數の工夫が溝を作つて排水を行ふ有様。萩商半田君、それでも見事に走

る。タイム二十九秒三。山中野津君之につぐ。低障碍と時を前後してフィールドでは棒高跳の決勝である。縣下は云ふに及ばず關西にその名を轟かしてゐる我が山崎君、そしてその前途は實に有望視されてゐる君。

バーは二米九〇より上げる。山崎君難なく跳ぶ。萩商中村君山崎君に先んず。三米、中村君オーバー、山崎君オーバー三米一〇、中村君落つ。山崎君かゝる。二度とも二人かゝる。三回目。中村君オーバーす。「あ」山崎君どうしても跳んでくれ。「心の中に祈る。然し同志に強き君である。關西大會と同じ運命を繰返してゐるのだ。心配は不用。未だバーは三米一〇、小降りの中に山崎君ボールをもつて立てり。助走。ふみきり。そして難なくオーバー。もう勝てり。勝つたも同じである。その頃又も驟雨せまり一時テント内に休憩す。やゝありて雨あがり明るき空模様となり競技にうつる。山崎君、中村君の優勝争ひである。しばしの休息に調子を整へて山崎君見違ふ程凌



い技を發揮す。三米二〇、軽くオーバー  
三〇之も難なし。四〇、樂々と、しかも  
餘裕はるかに見えり。萩商中村君良く戦  
ひしもどうして山崎君の敵ではない。四  
〇で落つ。バーは五〇。山崎君遂に五〇  
をオーバーす。かくして山崎君棒高跳に  
優勝す。あのくづれた助走路にもかゝは  
らず三米五〇とは中等界驚異に充分であ  
る。

二百米競走決勝には萩商佐野君二十五  
秒三で走る。午後四時八百米決勝。宇部  
工石田君良く走る。千五百にも優勝す。  
四時半。五千米決勝に進む。小生練習、  
試合のために出場した。総勢四十人あま  
り。グラウンド一週三百米であるから十  
六週あまり。號砲と共に跳び出し自重し  
て二着を目ざす。しばらく萩商岩崎君ト  
ツブに立ちしも宇部中藤田君に制せられ  
小生之につぐ。二千米ばかりにして間に  
多々良中の長田君入る。そこで三着をね  
らひ間をあけぬ様努力す。走つてみて驚  
いた。前の人のあとばねが顔やユニフォーム  
とんとんできて全く困つた。五千米も

つらい競技だ。それでも大聲の應援にむ  
くいるため全力をつくす。そしてやつと  
三着を得た。

四百米競走には萩商勝つ。次は大會ラ  
ストを飾るマイルリレー決勝。残れるチ  
ームは我れを筆頭に萩商、鞍手中。八女  
工、大津中、八幡中の六チーム。萩中豫  
選とメムバー順位を變へトツブ田邊君、  
セカンド田村君、サード山崎君、ラスト  
杉原君。

「ドン」。それは爆雷よりも強いひ  
どきをもつて我等の耳を壓した。田邊君  
好調にめぐまれ軽いフォームで二着を走  
る。萩中古剛、田邊君せかず劣らず走り  
てバトンは輕足田村君の手に。あの巨軀  
ですばらしい速力を以て走る。君より前  
に三人の一グループあり。君はそれを目  
ざして走る。二百米、三百米、君は次第に  
接近し後六十米、突然物すさまじいラス  
トダツシユ。利いた／＼見る／＼中に抜  
てしかもあます處數米、ひきうけて續く  
我が重鎮山崎君、棒高跳のつかれも見え

ず突き進む。思ふ存分その老練ぶりを發  
揮して、走る／＼。そしてその後には續く  
は八幡工バトンがうつるや瞬間もはや杉  
原君はピッチをあげて走つてゐる。駈走  
杉原君頼む。勝敗は君の鐵脚にありだ。  
走る追ひかける。敵八幡工も物凄い、素  
晴らしくノツボの敵が杉原君を追ひかけ  
る。百米、二百米。そして三百米、彼は  
すぐ後にせまつてゐる。杉原君あせらず  
ラストのストレイトに出るや君のダツシ  
ユよくきゝ到底追ひ着くを得ず、君は益  
々ピッチをあげてつき進み遂にテープを  
切る。喚聲あがる。勝てり我等がチーム  
我等感極まつて語なし唯歡喜に拍手を以  
てす。

然し、思はなつた。我等が軍がオミツ  
トされやうとは。インタフニアを語とし  
て我が軍をオミツトシテしまつた残念。  
が我等はスポーツマンである。我等は來  
年の大會には必ず優勝する。そして此の  
憾を雪辱する。泣くに涙出ず。長府の空  
に晴れぬ心を投げつけて八幡工業にその  
榮をゆづる。

時に午後六時。瀬戸の沖合も次第に晴  
れて空には白雲が我が物顔に疾走する。  
我等一行重い體を長府球場より運び出し  
た。(河村記)

- 尚。師範部は山口師範一校のみであつた  
から低々中等校と時を等しくして行ふ。  
参考のため當日の決勝記録を左に示さう
- | 種目    | 優賞者                 | 記録     |
|-------|---------------------|--------|
| 二百米   | 内丸(築上中)             | 十二秒三   |
| 二百米   | 佐野(萩商)              | 二十五秒七  |
| 四百米   | 木村(中津)              | 五十七秒四  |
| 八百米   | 石田(宇部工)             | 二分十六秒  |
| 千五百米  | 石田(宇部工)             | 四分四〇秒四 |
| 五千米   | 藤田(宇部中)             | 八分十六秒三 |
| 低障礙   | 半田(萩商)              | 二十九秒三  |
| 四百米繼米 | 萩商チーム               | 四十八秒八  |
| 千六百繼米 | 萩中一着なりしも失格タイ<br>ムなし |        |
| 走高跳   | 井本(宇佐中)             | 一米七十五  |
| 走巾跳   | 村方(八女工)             | 六米五十五  |
| 棒高跳   | 山崎(萩中)              | 三米五〇   |
| 砲丸投   | 音吉(萩商)              | 十一米七十九 |
| 圓盤投   | 音吉(萩商)              | 二十八米二〇 |

山口高専陸上競技聯盟主催

近縣中等學校陸上競技大會

焼けつく様な日光を浴びて、昨年の優  
勝校を先頭にトラックを一周し、入場式  
優勝旗及個人優勝杯返還、君ヶ代二唱、  
選手宣誓等型の如く終る。總べて嵐の前  
の静けさだ。やがて午前八時半第一  
豫選の號砲と共に、高商グラウンドは息づ  
まる接戦展開し、高い青空に力強いスバ  
イクの響は擴つてゆく。

トラックの部。先づ百米第一豫選に依  
り大會の幕は落された。本校から五年吉  
廣君、四年杉原君、三年杉野君の三君を  
送る杉原君フォームも鮮かに一着、吉廣  
君も力走すれば二着で入選す。若冠杉野  
君奮戦せられしも力及ばず終に落選せし  
は遺憾。次が二百米第一豫選、杉原、杉  
野の二君出場、杉原君組に萩商佐野君  
を抜き堂々入選。杉野君又もや涙を吞む  
八百米豫選、來島君一着で入選すれば、  
田村君も劣らじと奮ひ、二着で入選。次  
が二百米第二豫選、杉原君二着で入選す  
千五百米豫選。來島、河村、師井の三君

を送る。來島君、君独自のフォームで一  
着で入選す。河村君、病氣で練習を休ん  
でゐた爲調子出ず。豫選で倒れやうとは  
……師井君初陣の意氣物凄く終に二着で  
入選。次が百米第二豫選。杉原君二着で  
入選、吉廣君頑張りしも三着で惜しくも  
落選す。コールに應じて、吾が名ハイド  
ラー山崎君及新人松尾君出場。山崎君輕  
くテープを切れれば、松尾君も必死に戦へ  
ど、カークを廻るやバツタリ。次は八百  
米決勝、來島君力走よく四等に喰込み一  
點を獲得す。田村君奮闘せど利あらず六  
着となる。次は大會の呼物マイルリレー  
豫選。我が校は他校棄権の爲、山師と二  
人、一輕くウオーミングアップの如く力  
をセーブして。一百米決勝、「位置ニ」  
就イテ「用意ツ」「ドン」！アツ、杉  
原が後れた。五十米、八十米、迫る！  
迫る！然し、あゝ終に六着。しばらく  
して二百米決勝。杉原君大いに頑張りし  
も之又無得點に終る。次は五千米決勝。  
來島、長谷川、豊田の三君よく戦へども  
終に枕を並べて討死。ローハイドル決勝

吾々の最も期待をかけ、又可能性のある競技だ。「山崎頑張つて呉れ」が然し連続の出場の疲勞の爲、萩商半田君に譲り三着に入賞し二點を獲得す。大會の終りを飾る千六百米繼走決勝。本校は第三コーン、ドンと號砲に一齊に飛出した。

アツもまれた、杉原君は最後だ、が見よ君の凄い力を！カーヴを廻るやぐらん、出て、遂に他を壓し、五米餘も隔て、ペトンはセカンド田邊君へ、田邊君自重して走る、アツ山師が迫つた。抜かれる、と思つた瞬間、走る、く、物凄いらすとへビー、又五米餘隔てサード山崎君へ山崎君前のボールの疲れも見せず間を保つてラスト田村君へ渡す、二百米「二百五十」三百米、後から山師が迫る、危い「田村頑張れ」「ラストだ死んでも頑張れ」十米、五米、三米、ゴールイン、然し終に彼に一日の長ありしか。勝負決するや山崎、田邊兩君はワット泣き伏した殘念だ、殘念だ、此の競技程心配なものはない。そして又待遠いものはなかつた。それ程優勝が必要だつた。そして

皆自信があつた。それだけに執着が強い然し泣く山崎、歎く田邊、君達は自己の最善を盡した筈だ。最善を盡して、而も敗れたりとも何の恥があらうか。總べては天命だ。

フィールドの部 百米第一豫選と同時にフィールドでは砲丸投、走高跳決勝開始さる。飛ぶ、素晴らしいフォームで、一米五五、山崎、瀧口兩君先づオーバー、六五の實力ある松浦君、砲丸投と重なつた爲か調子出ず、終にオミットされしは殘念。六十は二人共難無くオーバー、充分落着きを見て飛ぶ山崎君、力強い踏切に六五を一回で越える、瀧口君自重して飛びしが成功せず、茲に山崎君二等になり最初の三點を得。砲丸投、松浦、田村阿武三君出場せしが、奮闘空しくベストに入らず。次が走幅跳、山崎、田邊、村田三君を送る、田邊、村田の兩君練習の日も凄き爲、踏切合はず終に失格、殘る山崎君ベストを窺ふ様子だつたが惜しくも失格す。流星の様に白い尾を引いて槍が飛んでゆく、槍投決勝だ、山崎、田邊

田村の三君出場せしが日頃練習せざりし爲これ又敗る、嗚呼富田君の後淋し。三段跳村田、吉廣、瀧口三君出場、大いに奮闘せしが實力の差如何とも爲難く又もや惨敗の憂目に遇ふ。

殘るは吾等の誇りボール耳、考練山崎君が特に目立つ。十「二十」「三十」飛ぶは山崎君と萩商中村君の二人、朝來の連続出場に流石の君も疲勞を覺えたか終に三十に掛つた。嗚呼天は我等を見捨るか？六十の實力のある君が三十に失敗しやうとは、然し中村君も失敗すば、優勝を決定する爲に再び飛ぶ。先づ中村君自重して越えれば、山崎君も鮮かな弧を空中に描いて見事にオーバー。戦は愈々白熱したシューティングゲームで繰り上げて終に五〇へ、親友同志の一騎討だ、友情か母校の名誉か、……

しばらく黙想して後靜かに立つた。眼はらん／＼と輝き顔には烈しい闘志が溢れてゐる。アツ飛んだ見事なフォームに確實さを見せて體は軽くペーを越えた。斯くして總員起立の裡に靜かに部旗は昇

つてゆく。春風にゆらく旗を見上げれば赤い夕日が目にしみる。(M・F生)

- 左に出場選手名を附記す。
- 百米 杉原大泰、吉廣久雄、杉野三男
  - 二百米 杉原大泰、杉野三男
  - 八百米 來島次郎、田村由之
  - 千五百米 來島次郎、河村定一、師井淳吾
  - 五千米 來島次郎、長谷川道隆、豊田安春
  - 走巾跳 山崎内匠、田邊實彦、村田司郎
  - 三段跳 村田司郎、吉廣久雄、瀧口吉世
  - 走高跳 山内匠、松浦二郎、瀧口吉世
  - 砲丸投 松浦二郎、田村由之、阿武博
  - 槍投 山崎内匠、田邊實彦、田村
  - 圓盤投 松浦二郎、阿武博
  - 棒高跳 山崎内匠
  - ハードル 山崎内匠、松尾美男
  - マイルリレー 山崎内匠、田邊實彦、杉原大泰、田村由之

第四回山口縣男子中等學校體育大會 忘れやうとして忘れられぬあの感激、必勝の信念。齋藤、大村兩先生の悲痛な激勵。そして復讐の意氣に燃えた昂奮も、やがて微かな寢息と共に冷えてゆく。

明けば三十日、小雨の中をグラウンドへ午前八時、折から降りしきる雨の中で、入場式。君ヶ代の響が一層の森嚴味を加へる。

例に依り百米第一豫選から開始、B組の杉野君軽く二着で入選し、D組杉原君フォームも鮮かに堂々入選す。この時フィールドでは、砲丸投決勝あり。吉廣君は走巾跳に力を注ぐべく棄権。殘る阿武君唯一人奮闘せしも終に力及ばず、惜しくも失格。次が八百米豫選、A組に師井君悠々とテープを切れば、C組の來島君も餘裕を見せてゴールイン。折から降つて來た雨の中で、二百米第一豫選、吾等は田邊、有田の二君を送る。田邊君大いに奮闘せしも僅かの差で敗る。有田君もよく頑張りしも惜しくも失格す。而し君は未だ三年、今後の奮闘を望む。走巾跳では

五年吉廣君と吉賀君出場。吉賀君よく跳びしも僅か三種の差でベストに入らず。吉廣君の一跳よく吾等になり最初の一點を獲得す。二君の奮闘を謝す。次が千五百米豫選、A組の來島君軽くテープを切る。C組師井君強敵石田及び長田の兩君と組み、堂々三着なりしも八百米に全力を注ぐべく棄権せしむ。次が四百米繼走A組に大津中、周中、多中、宇工の各チームと吾が萩中チーム。これは軽く二着で入選。次で四百米第一豫選あり。A組に杉原君一着で入り、B組田村君も見事に一着となる。走高跳に吾等のジャムバ1山崎君と、新人長野君出場、五〇から始められ、五五、六〇。山崎君軽く跳ぶ長野君、大津中秋里君と接戦を重ね、終に失格せしは遺憾。六五。一回目は皆失敗。興中田中君先づ越え、續いて隣の商業中村君オーバー。そして山崎君は……嗚呼終に三回共失敗。實力以上の挑戦か、否斷じて否。數日後の本校競技會に於て、一米七九のレコードを作つたではないか。

次が百米第二豫選、杉野君頑張りしも惜い所で敗る。杉原君三着で入選。次がローハールド豫選、百米で疲れた杉野君B組に半田、野津等の強敵と組み、奮闘空しく終に失格、C組に松尾君大いに頑張りしも力走終に効を奏せず、又も失格の憂目に遇ふ。次が四百米第二豫選。杉原君軽く入選。B組の田村君柔道で足を痛めてゐた爲、調子出ず僅の差で敗る。此の時フィールドでは圓盤投決勝あり、田村君休む間もなく直ちに出場、君の凄いな。秋晴の空に描くテスカスの弧。然し彼等に一日の長ありしか、終に失格連続の出場の奮闘を感謝す。

次に千五百米決勝。來島君一時は優勝するが如くなりしも石田君のラスト物凄く四着となり三點を得。次に二百米決勝ありて、八百米決勝あり。來島、師井の二君元氣良く走り、來島君三着、師井君六着、合計五點を奪得す。次がフィールドに於て三段跳決勝、吉賀、瀧口の二君を送る。前日練習の時は十二米位樂に越せた吉賀君も、雨の爲にコンヂション悪く

奮闘の甲斐もなく、十二米を出ず。瀧口君も調子出ず、戦友共に敗る。

次に四百米決勝、杉原君六コース、不利だ。然し自信ある君は、ニツコリ笑つてスタートに就く。スタートするやゲン／＼出て山中野津君と接戦、而し終に一米破れて二着。次が百米決勝、杉原君疲れたのも何のその、他に少し後れて六着となる。次に四百米繼走及び棒高跳決勝先づ繼走。コースは第三コース。トツプ吉賀君よく走り、三等でセカンド吉賀君へ、然し嗚呼、バトンタツチ悪く、次の村田君へ、あつ又もや失敗………としてラスト杉野君へ、斯くして吾等は六着となつた。一方棒高跳は？此の夏甲子園原頭にて、全國中等學校選手権を得た吾等のボーラー山崎君あり。山中熊野君の爲、競技は二米九十から開始。三米、十、二十、三十。これを越えし者僅に三人。三米四十、山崎、中村の兩君軽く越す山崎常永君惜しくも失格。次でバーは五〇八。中村君終に失格し山崎君の一人舞臺となる。更にバーは去年同君の作つ

たレコード三米五三の上六〇を飛ぶべく上げらる。一回目………走高跳の雪恥の意氣物凄く一蹴すれば、巨のマークは軽く舞ひ上り十種以上餘裕を見せてオーパス。次に六五へ。棒を持つてバーを覗んでゐる顔、靜かに棒を上げて走り出す一回目は少し胸が觸れて失敗。………一回の視線は皆山崎君の一舉一動を見逃すまじと見守つてゐる。やがて自信の色を表に表はしてスタートについた。猛烈なスピードで助走、飛んだ！飛んだ、見事なフオームで。次が最後を飾るマイルリレー決勝。オーダーはトツプ田村君、セカンド杉原君、サード山崎君、ラスト田邊君、田村君よく頑張り三着で次の杉原君へ、君は數分前に四百と百米決勝に出場し疲勞甚だしきにも拘らず、力走効を奏し山師を抜いてサード山崎君へ、山崎君大勢の動かすべからざるを知りてか、軽く走り山師に譲り次の田邊君へ渡す。田邊君よく走り三着で入る。

リレーだけはと思つたマイルリレー。數回の出場に皆不運に見舞はれ、名を成

す事能はず、四君の心中に深く同情の念をよす。斯くして大會も終り、數年來の宿望も終に空しく三位となる。

最後に應援の爲に來山された諸君に深く感謝す。

左に各種目の優勝者を附記せん。

- 百 米 藤津君(山師)
- 二百米 藤津君
- 四百米 野津君(山中)
- 八百米 石田君(宇工)
- 千五百米 石田君(宇中)
- 五千米 藤田君(宇中)
- 三段跳 田中君(興中)
- ヘッドル 半田君(萩商)
- 走高跳 田中君(興中)
- ポトル 山崎君(萩中)
- 圓盤投 吉吉君(萩商)
- 砲丸投 吉吉君(萩商)

籠球部  
山口縣體育會主催  
縣下中等學校體育大會  
縣體育會主催中等學校體育大會は鴻城原頭高商グラウンドに於て、多數名士參列

の下に昭和九年九月三十日華々しく開始された。

我等籠球部選手は九月二十九日、全校生徒の歡呼の聲に送られて、聖戦の地山口へと向つた。此の日は晴れ渡つて居たが蒸し暑くて、何となく體のだるい日だつた。午後高商グラウンドにて輕い練習をした。感氣温にも拘らず、選手のコングレッションは非常によく、これならば明日の征覇が望めると一同大安心。

明ければ愈々聖戦の日！空一面を塗りつぶした雲より、絹の様な霧の様な時雨がしよ／＼と降つてゐる。入場式迄少しばかり時間があつたので、輕いシュートの練習をして見た。所がどうだ。此の有様は昨日の好調は何處へやら、入るべきシュートまで入らない。皆青い顔をして元氣がない。之ではと来る第一回戦が心配だ。

八時より入場式。莊嚴なるマーチにつれて場内一周。會長の訓辭、審判上の注意、選手の宣誓あつて所定の位置につく。參加校は十六校、之をAコートBコート

と分ち、兩コートの覇者が雌雄を決する事となつてゐる。我々はBコート。我々の方には昨年よりの覇者防衛、古狸山中等強豪揃ひだ。先づ一回戦で徳商と組んだ。徳商となら一回戦も無事通過だと安心してゐた。然るに何とした事だ。最初の二點を先取され、先手を討たれて終つた。之に怖氣をつけたか我軍の元氣すつかり無くなつた。相手はさして強豪でもないのに。嗚呼何とした事だ。遂に前半で五點の差をつけられた。五點位後半で頑張れと激勵して選手をコートに送り出した。然し未だ焦つてゐる。相手に入れられる。遂に差九點となる。時間は？嗚呼後五分だ。此の頃よりいくら選手の元氣が蘇生した。三分間の後同點まで漕ぎつけた。之に安心した爲か敵に三點入れられた。何くそと頑張つて又々同點に！愈々時間は僅に一分。もう一息だ！もう一ゴール！と呼ばんとした時殘念無念敵に二點を取られた。後二十秒！嗚呼如何せん之だけの時間では。たつた二點だ！たつた二點の差だ。泣くな男だ。然

し之が泣かずにはなれうか、心に夕立の如く涙の雨を降らせながら齒をくひしはつて、心の中で男泣に泣いた。

因に同大會の優勝校は防南なりき。拙文當時の悲壯なる場面を寫すあたはざるを遺憾とす。(マネジャー記す)

出場選手

○、吉武、三隅田

F、中川、八木、北村

G、吉屋、石谷

マネジャー能美

### 水泳部

第六回近縣中等學校水上競技大會

時恰も陽光頭上に輝き綠葉山都鴻城を飾る六月十日、我が水上競技大會は三縣下九校の強豪を迎へ山口高等學校プールに於て舉行さる。此の日選手一同五時半起床旅館前の神社にて輕やかなラヂオ體操を笑顔の中に終えホテルの人の聲援を受けてポブラの林園、若人の學びの舎山口高校に向ふ。若葉萌ゆるポブラは輝かしき日光を受けて揺らぎ、プールの水は小波を鱗片に並べ、眼下に漂ふ。鳴風の

前の静けさなのか？ 投げ出される肉體

の波瀾何處までわたるか？ 不安と疑問の中に開會時刻は宜せられ型の如く入場式は行はれて行く。開會の辭、優勝旗返還、審判注意、宣誓次に來るもの、それは本大會のトップをうけたまわる四百米自由泳選の花々しき飛泳であつた。此の頃より狭きスタンドは山中應援團に依つて占領され場内整理の白無垢の山武士を忙殺させた。又水泳に興味を持つ陸の水兵さんも押しかけて熱心に選手のパフォーマンスを注視しタイムの記録に餘念なかつた事は本大會の一異彩であつた。ラストプールに應じて出場する選手、彼等は心の中に何を描き出すのであらうか、それは校長先生並びに諸先生、生徒の聲援の嵐を受けて必ず勝つて歸るぞと誓つた鼓動的シーンであつたに相違ない。お、母校名譽發揚の爲に戦はんとする選手のけなげさよ、私利を超脱し唯だ彼の母校生徒のあの聲援にむくひんとする人間性の發露だ。愛國心と愛國心との戦は悲壯だ。將又愛校心の戦ひも壯烈そのものである。

而して天は誰にも榮冠は與へない悲しみと喜びを織りませて四百米自由泳選、二百米胸泳、豫選とフイルムは進行する。

次は？ 百米自由泳選！ ビー、用意、ズドン、各自一齊に飛び込だ。一着をうけたまわる者は？ あゝそれは修道の長谷川君であつた。他を離す事約三米、祐々とゴールイン、スピードカメラは報ずる「タイム一分二秒二此れは本大會新記録であります」と誰をもが修道と聞けば水泳を思ひ出す。成程修道は強い。新しきフォームで他をぐんぐん離して行く。その壯快さは觀衆を魅惑するに充分だ。八百米フリー、二百米フリー、百米背泳とプログラムは進行して行き、時十二時二十五分、八百米リレー豫選のタイムはかゝる猶メガフォンは「マネージャーは選手のオーダーを定めて受付まで御知らせ下さい」と報じてゐる。早速選手控所に行き見れば先輩に圍まれて樂しき晝食も早やすましたのであらう。雑談に花を咲かせて居た。而して選手の笑顔の底には？ 先輩の心には？

頑張つてくれと言ふ先輩の聲に答へながら、選手一同セカンドゴールに應ず。

我等がオーダーは若冠中村をトップに老鍊藤田セカンド、サード若輩の阿部、ラストはそれは萩中切つての老雄佐伯君敵はどんな奴が居るかと思れば日本一を争ふ修道中學が第二コースに縣下一番修道と一二を争はんとする山口中學が第三に我等は四コースに第五コースには初陣の門司中學、プログラムを見れば三校入選だ。萩中選手一同も心に決する所があつた。ぼんやりと考へて居るとラストゴールは宣告された。觀衆一同の眼が一齊にスタートにそゝがれた。その中に日のマークをつけた中村君はマークと共に一段と光彩をはなつて居た。おゝあの黒の中に浮かんで居る日のマークの様に他校を壓てくればよいがと念じて居るときビートと合圖の警笛はなつた。各自獨特のフォームでかまえた。ドンと共に飛び込んだ。しばらくして黒い頭が一つ二つと浮いて來た、中村君がどれやらわからない唯五コースの門司中學が一米ばかりおく

れて居た。四コースの中村君を見れば他

を壓して一二等を、あの強豪修道山中を向ふにまわして争つて居る痛快だ。門中は次第に競争圏から離されて行く。側の先輩齊藤、栗屋さんが早いではないか、負けはせんと喜ばれて居られたが私の喜びはそれ以上であつた。而し練習不足か前半に出しすぎたか四百米頃から修道山中の後をうけたまわつて進んで行く。私はもう少しと思つて大きな聲を出して頑張れと叫んだ、而し無理なのか一、二等と段々間がありて行く。一方門中はぐんぐんせまつて來る。一等はと見れば十米位先きを行く殿との距離三米。而し良く頑張つて門中を少しはなして歸る。セカンド藤田君ドンと飛び込んだ。而し君は數日前から商賣のバックを中止してクロールを練習したのだから少し無理だらうと思つて居たら案外よく頑張つて下さつて門中と平行で歸られた。サード阿部君門中と同時に飛び込んだ。而しカーブの好きな君はコースに乗りあげたりして思ふように泳げず、又ターンの調子芳

しからず少しおくれで歸られたが、三年の若輩にして敵の強豪の向ふにまわしてびくともしない君は賞讃に値ひする。ラスト佐伯君門中を抜かんと頑張りしも終に敵せず門中の軍門に下る。而し君のタイムは二分四十一秒の好タイムであつた此れを見ても苦戦の跡がうかがわれるだらう。

我等にもしプールがあつたなら今日は見事に門中否山中も負かしてやつたかも知れない。我等の負けたのはフォームでもなく頑張りでもなく唯ターンの離されて行つたのだ。私は健康の爲にも水泳部の爲にも早くプールの設置される事を希望する。

晝食をして居ると二百米リレーのファストゴールはかゝつた。選手一同もベストをつくして敗れたのだからほがらかなものだ。而し中には悲憤の涙をぬぐふ者もあつた。セカンドゴールに飛び起きて出場す。オーダーはトップ佐伯君、セカンド藤田君、サード阿部君、ラスト中村君。一同の顔面には今度こそは勝つぞ

の意氣で充滿して居る。敵は三コースに山中、五コースに誠之館中學我等は第四コース。

ラストコールと共に選手一同は悲壯な決心をしてスタートに立つ。ドンの號音と共に直線をなして飛び込んだ。佐伯君三十一秒の好記録を出して歸る。誠之館佐伯君の後に續く。藤田君瞬刻も置かずに飛び込む。此れ又大差なくて歸る。實に接戦中の接戦だ、サアード阿部君良く頑張りしも、致方なく依然差を持して歸る。ラスト中村君短距離の萩中ナンバーワンたる君は良く頑張つて誠之館に肉迫して行く。そらターンだ而しプールに慣れない君だから無理もないがターンを失策して誠之館についで歸つた。もし君ターンで失策しなかつたら完全に敵をのして居たに違いない。而し萬事休す、我等の力が及ばなかつたのだ先輩、先生になくさめられてすごし引き揚げなければならなかつた。残念だ此れでどうして勝利のみ信ずる學友と顔があわせられよう。而し過ぎた事は仕方がない。唯我等は此

の雪辱戦を秋の大会にやらん事を誓ふ。先輩は我等の悲惨なる敗北をなぐさめて盛大なる送別會兼慰安會を開いて下さつた。我々は此れ等先輩の爲にも勝たなければならぬ。

終稿に望んで先輩の應援を謝し又我等歓迎の爲萩驛前にお出で下さつた諸先生並びに生徒諸君に空をつかませて申しわけがありませぬ。是に感謝の意を表する次第であります。又我等水泳部は今日得たる所のものを参考として、益々勉勵し諸兄の意にそわん事を誓ふものであります。

(三村巖記)

山口縣男子中等學校水上競技大會  
水都萩を流れる阿武の清流、流れつきてあの日本海、海と水とに育てられし萩中健兒が練磨の腕を發揮する日は終に來た。今日は出發の九月十四日ぼつり／＼と降るなかを友の心からの應援を涙と共に雨に流し校長先生の訓辭を受けて車上の人となる。後をふりかえり見れば校長先生が聲をかぎりの萬歳を！ お、小雨の中に立ち應援して下さる諸先生。有難

ふ御座います。では勝つて参りますと燈畑の中を感謝と必勝の信念を滿載して自動車は走る。山越え谷越え一路目的地山都山口へ。

我等が待望して居た日は終に明日にせまつた。而し吾等は明日に備えて居たか？、あの樂しき夏休をも擲つてあの苦しい練習をして果して効果を挙げ得たか？考へて見るになさげなかつた。タイムはあがらず、それが爲山口行を止めようか校友に對してあの春のような惨敗をしてはすまぬからと言ふ選手も居た。而し我等の惨敗はやがてある優勝旗となつて來るのだ。戦へ！母校の爲に！

午後〇時半、我等選手は青年(萩)チームと連れ立つて鴻の峰號の山口高女プールに練習の爲行く。早や柳商、柳中は練習を了へて集團をなして居た。プールで練習した事の無い我等選手は居田先生、松山、竹田、三浦(先輩)のコーチを受けて飛込み、ターンの猛練習をなし、後には出場種目の練習に費した、選手一同大元氣で切るは／＼萩に於けるタイムを、

十秒二十秒と切つて行く。私は一時は時計が破れて居るのではないかと疑つた位だつた。今迄萩では三分を切らなかつたものが三分を切れば我等が新進高原君も劣らず二百の前半にて一分二十六秒、平泳としては良い記録だ。我等は是の如き良成績をあげて喜び勇んで歸途についた私が萩からのあの心配も解消した、歌へばがらかに明日の日を。

明くれば待ちに待つた十五日水泳部長山本先生(此の時は召集で山口聯隊に入營して居られた)の頑張つて呉れのを耳にし萩青と一團をつくつて晴の會場山口高女へ／＼とむかつた。

時！八時二十分開會式は雨傘の中に行われた。雨の事として式は簡單だつた。やがて八時四十分二百米リレー準決勝のコールはかゝつた。コールに應ずる者の顔には時ならぬ殺氣がみなぎつて居た。ビート、用意、ドンと飛び込んだのはA組だつた。師範チーム一分五十九秒で二着の柳商を遙るかにリードしてゴールインB組、終に我等が戦はなければならぬ時

否、戦つてやる時は來た。第二コース柳

井チーム、萩中チーム、第四コース山中チーム、第五コースは新進の下商チームコースは良し天は汝等の奮闘を期待して居るのだ。戦え！劈頭だぞ、よいかトツブ佐伯君悲壯な顔をして飛込み臺に立つビーツ用意ドン四人共一緒になつて圓を描いて水中へ、飛泳の中を佐伯君良く山中について歸る。セカンド阿部君三十二秒の好記録を出して山中と少しの差で歸る。此の時柳井中、下商は大分後の方で三等を争つて居た。サアードそは水泳部切つての人氣男、精神講話で名のある藤田君、ちよつと出ない三十一秒の記録で悠々三等争ひして居る下商、柳中を離し一着の山中を抜かんと方んだ。而してラストへ、若人ながら老練の中村君山中をぬかんと猛烈なビツチで寺崎(山中)に肉迫して行つた。而し五十米位では抜くあいだがない、惜しいかな山中にちよつと後れてゴールイン、君の記録は三十秒35、君は三年が不斷の努力をされたなら縣下、否日本の短距離界の王者となれ

るだらう。

かくして我等は劈頭を二着の錦をもつて飾つた。幸先よし私は引率の池田先生と微笑をもらした。此の調子なら大丈夫威張つて歸れると。次は八百米自由型先輩が威名をかかやかして呉れた此の種目に、何たるみじめきよ佐伯君は心臓で、唯一の又期待をかけし君が中途で練習中止のやむなきに至つた事は、君も非常に残念とされる所であらうが我輩はそれ以上だ。君が八百で點を入れて呉れなくて誰が點をいれて呉れるかと思つた位だ君をして最後の榮冠を得させずして縣體を了へたとは残念だ。萩中の三輪君がB組に出場する筈であつたが、後に一年として重荷の八百米リレー、四百米があるのではやむなく棄權をさせた。出場したから入選して居たかも知れないがやむを得ぬ。今度は百米平泳豫選だ。我等が期待して居る唯一の種目だ、コールに應ずる者萩中に高原、田村君あり、高原新進と雖も彼のタイムは強豪をおさえるに足る、C組第二コース萩中高原君は此れが

初陣だからあがつて呉れなければ良いが  
と思つたが、スタートに着いた君はす  
に敵を呑んで居た。胸に輝くあのHのマ  
ークをして必ず勝たして呉れ、不安の中  
に一齊に飛び込んだ。一列になつて適  
分列式のような。而し分列式の列はく  
ざされて行く。見よ、第二コースが第五  
コースと列んで頭をもたげて来た、あ、第  
二コースが少しリードしたぞと思ふと  
インだつた。第二コースのターン悪く又  
もや、第五コースと一、二等を争つて行  
く。而し第二コースはスピードを出した  
ぞ、第五コースを次第に抜いてター  
ン。然し高原君のスピードはゆるまざる  
次第に出て来る。然し第五コース（井川  
（安中）も曲者だぞ、良く高原につ  
いてゴールイン、我等は亦高原一着で入選  
で氣を強くした、此の時のタイム一分二  
十六秒八、此處に君の六月以來の不斷の  
努力は酬いられんとして居る。頼むぞ高  
原、D組に田村君、君は夏休にずるけず  
んばもつと良い成績を得たらうになり、  
何が君をしてずるけさせたか。而し君も

良く頑張つて二等に少し後れてゴールイ  
ン、タイム一分三十四秒六の好記録で  
に於ける記録を破る事十秒、二人共良  
く頑張つて亦良く入選して呉れた。君達  
むぞ來年を、次は苦手の百米自由型A組  
に上田君、君は永い間病氣の爲め練習を  
やめて居たが最後の水上競技大會と勇  
鼓して出陣、然して必勝の信念に燃える  
君は良く頑張つてベターサードで入選  
B組中村君棄権。E組山田君良く頑張  
りしも練習不足の君は惜しくも落選。次は  
一年の中村、三輪の活躍する四百米自由  
型A組中村君良く頑張つて五十あたりで  
は入選の可能性ありしも、一年で初陣だ  
もの仕方なく落選。然しタイム六分五十  
秒で萩に於ける記録を破ること二十二秒  
B組に同じく一年の三輪君、君の頑張り  
良く敵を壓して三着で入選タイム五分五  
十八秒萩に於けるタイムを切る事四十秒  
君の技術には感服す。君は一年だ。將來  
共自重して水泳部の爲活躍されん事を祈  
る。百米背泳は本校は出場者なく、次は  
二百米平泳B組に田村君終始より頑張り

しも惜しくも四着で落選、C組高原君、  
第三コース、第四コースに強敵師範の藤  
村君、然し君の耐久力に敵する輩は居ら  
ず師範の藤村と終始熱戦を演じ觀衆をし  
て手に汗を握らせた。然し高原君タツチ  
の差でゴールイン、タイム三分三秒三  
實に萩に於ける記録を破ること十五秒、  
次は又難物の二百米自由型準決勝A組の  
佐伯君良く頑張つて一着かと思つたが二  
分三十九秒で三着で惜しくも落選、君を  
してB組に出して居たならば入選して居  
たに、然しそれは無理なのか、B組津野  
君（一年）良く最後迄頑張りつてくれたの  
には感謝する君はまだ一年だ。今後の活  
躍を期待してやまぬ。次は五十米背泳準  
決勝本校からは山村、藤田兩君を送る。  
B組に山村君、君は練習の日漬くして入  
選は望めなかつたが、良く頑張りつて二  
十五米では入選かと思つたがターンの悪  
く終に落選とは残念だ。C組老練藤田君山  
村の體を取らんと飛び込んだが、ロープ  
に手が觸れ又ターンの悪く二十米邊ではト  
ップであつたのに落選とは残念だ。君を

して優勝せしめざりしは我輩の責任だす  
まぬ。次は又來た百米自由型準決勝だ。  
上田君母校の名譽を背負つて孤軍奮闘さ  
れしもコースは最悪の第一コース、力泳  
につぐに力泳を以つてせしも如何ともし  
がたく終に落選、然し君は母校の爲に強  
敵を向ふにまわして良く戦つてくれた。  
君に言ふに何事も無い。唯涙あるのみ、  
今度は百米平泳決勝、A組田村君良く戦  
ひしも終に落選、B組高原君師範の藤村  
をノックアウトして一着で入選、向ふ敵  
なしだ。私は今度は欲を出して高原君に  
新記録をせがんだ。次に八百米自由型決  
勝ありて晝食午後一時より大會の幕は亦  
も開かれた。

二百米リレー決勝のゴールは満場の選  
手一同を振ひ立たせた、スピードカーは  
報ずる第一コース柳商、第二コース山師  
第三コース安中、第四コース山中、第五  
コース萩中、第六コース柳井、何れもが  
勝たなければならぬが、就中リレー程力  
の入るものはない。山中、山師スタート  
に立つや兩校應援團は聲を限りの應援を

して他校の度踏を抜いた。此の様な時に  
はあがるものだが萩中チームは何！平氣  
と言ふ様な顔をして居る。六名の選手は  
合圖と共に飛泳の中を泳いで居た。四十  
邊りから先ず山師頭をもたげて行けば、  
山中、萩中、柳商後れじと肉迫して行く  
トップ佐伯君力泳して山中、柳商と一列  
になつて歸ればセカンド藤田君無我夢中  
になつて力泳然し萩中はだん／＼後れて  
行く。實力の差なのか、君も良く差を持  
して歸れば阿部君受継いで君專賣特許の  
フォームで頑張りつて歸る。ラスト中村君  
柳井商をぬかんとあせりしも如何ともし  
がたく五六着を逃るかに離してゴールイ  
ン我等は此處に貴重なる六點を得た。次  
は我が校の十八番とする百米平泳、コー  
ルに應じて高原君記録を破らずにおくも  
のかの意氣を持つてスタートに付く、隣  
に強敵佐々木（山中）藤村（山師）を向  
え高原その眞中の第五コース、ズドン  
の號音と共に一齊に水中へもぐり込んだ。  
出た／＼頭が然し高原がトップであつた  
藤村も猛烈なスピードで高原の後を追ふ

を盡させたならわけなく記録を切つて居たらうに。然し終始一貫一等を勝ち續けたのは初陣として目出度い事だ。然し君此れ位の事で満足しては駄目ぞよいか。次は四百米自由型決勝、一年の三輪君孤軍奮闘して六等で一軍としては今迄にない貴重な一點を得た。君の前途は遼遠だ。眞直ぐに行くなら日本に覇を争へるだらう。自重して呉れ給へ、中に百米自由型をはさんで大會最後の八百リレー決勝だ。萩中は第四コース、兩隣りに山中、山師チームをひかえての競争だ。號音と共に一塊になつて水中へ、息づまる接戦だ。トツ佐伯君山中と並んで歸る。セカンド阿部君コースに手を觸れたが良く山中と接戦して歸る。サード三輪君頭張つて、山中の棒をぬいて三等でラストの山村君に、中村頑張りしもおしくも四等で歸つて来て呉れた。

有難ふ選手諸君の奮闘に依つて我輩は威張つて萩の地を踏む事が出来る。部長山本先生も大變喜んで茶菓を饗してくだされ又池田先生も大變我等の爲に世話

して下さいましたことは實に選手一同の感謝する所であります。

是に筆を置くにあたり夏休の炎書もかまわず毎日應援に来て下された松山、竹田、栗屋、玉木先輩に紙上にて御禮申しあげると共に林萩青年團長以下青年チームが我等の爲に試合を催ほして下さると共に澤山の菓子を下され私達を激勵して下さいました事はあつく厚く御禮申上げます。居田先生には亦よく私達をコーディネート下さりましたかゝる成績を得たのも先生に依る所大なりと信じます。又山口にて萩中諸先輩が良く應援して下さいました事は厚く御禮を申しあげます。亂文御許しあれ。(二村廣生記)

### 柔道部

#### 松江遠征所感

汽車の單調なリズムにつれて、心ばかりはすでに遙か松江に馳せながら、シートに體を横へてより數時間、選手の意氣や高きといへども、汽車の運々として行かざるを如何せん。松江はまだか！晴好雨奇と讃へられた穴道湖で、雲が

萩に於て先輩仁保さんに注意された絞の續出で、くやしかつた。そしてあまりに人々の忠告に對して冷淡であつた事が悔いられた。

次に所感を述べてみよう。

曰くフアイティングスピリットの缺乏生存競争を深酷に味つた事のない我々にはあまりに人が好すぎた。我々の喧嘩腰が他所の平素の試合態度かも知れない。

曰く立技ばかりが柔道ではない。立技は公正的である。然しあまりに相手がきたなすぎで、ごろ／＼ころがり廻つては手の施し様がない「人を見て法を説け」と言ふ。然し誰々でも説ける學識がなければ意味はない、柔道でも寝て良し、立つて素敵でたれでもあつかひ得る様になつてこそ、天下無敵のチームになれるのではないか。

次は寝技に關聯した事だが首が弱い、風速六十米、坪當三百何十貫の力で吹いて來ても、轉がりそうにない萩中の勇士も、敵の背後からの絞の、一手に、鼻首を擧げられる者、一人二人ではなかつた

では寝技を少しもやつて行かなかつたかと言ふにそうではない、絞もやり、絞りはづし方も、關節も、寝技もやつた。では原因は？一夜漬の練習では駄目、試合に上つて、平素教へられた事が、頭の中で、腰を抜かした事に原因すると思ふ。覆轍の教へ、我等の失敗は諸君の教へ、諸君が寝技に於ける實力も相當に羨はれて、此の愚を再びせざる時こそ、我等も又その一部の使命が果せたと言へる。

第一日の戦は了り、松江名橋大橋の畔に一泊す。

此の夜大深先輩より、皆寝てゐたので特に自分と松浦に對して忠告苦言があつた。愛校の至情、此の双頬に輝き言いつしか熱して、兩人代表としての我等の使命の如何に重大なるかに愕然として、我等の不甲斐なさに、悲涙止まらざるものがあつた。あゝもし先生の言を良く守つたら、今日この松江まで來て先輩に心配をかけずに、濟んだらうにと先生にも濟まない氣持で一杯であつた。

兩人を初め隣室で聞いてゐた選手一同

とう／＼泣出して、しばらく雨に煙る一幅の南書としての湖が左に走つた。

松江着 あゝ終に松江だ、先輩大深先生等に出迎へられて印象の第一歩をブラットホームに踏つけた。汽車に揺られると腰がフ／＼するぞ。なんて先生に出發前に威された故か、妙に腰が目方を半分へらした様に輕かつた。

豆を握つて、力一杯、ぶつ／＼ける様な土砂降の中を、バスに分乗、今日の戦場商業に向ふ。商業には會議室に於て少憩する、壁間に土地の先輩としてであらう。若槻禮次郎氏の寫眞が孤獨をかこつてゐた。大臣、大將なら有り餘る程ある萩の我々に得意と共に、又現今の萩を代表する我等の責任を痛切に感じた。

第一日 本日、工、農、商の各校と各々一戦を交へる豫定なりしも、各校の選手足らず次の二回となつた。

第一回 工、商聯合軍：對：萩中

第二回 師、農聯合軍：對：萩中

結果は十五名の選手を擁して堂々向つた我々は脆くも破れた、然も出發前、東

も、あまりの我が身の不甲斐なさに、松江の第一夜は決して圓かなまどろみではなかつた。

大深氏の批判は、選手に對してであつたが、又萩中柔道部の通弊とも考へられるので、左に大要を述べる。諸子も人の事とは考へず靜に己を省みられたなら、又たしかに得る所ある事を確信します。

一、今日の諸君の試合振を見てみるに、何と言ふ考もなく、唯漠然と試合してゐる。萩中は立案が強いと聞いてゐたが、少しも之れならと研究した所が見えぬ。

一、元氣が續かぬ、初はから嚇しにやるが、少しも續かぬ意氣が乏しい。

一、一旦男が代表として、どうすると言切つたならば、死んでもやると言ふ意氣込かなければならぬ。

等の事であつた。

第二日

雨は昨日から降つて今日も小雨、朝ちらつと神々しい大山が姿を見せた。バス

にて武徳殿に向ふ。殿は城山公園内にあつた。

中學校：對：萩中の一戦だった。

結果は点数から言ふと流石、中國の雄松江中、二段一名、初段十五名ずらりとならんで、我校ほとんど惨敗だった。然し此の試合に於ける皆の元氣は非常なもので、松浦、鹽山の如きは、自分より遙かに大きい、親爺みたいな双を引づり廻して、鹽山は一本を獲り、松浦は惜しくも終に押込まれたが、立技に於ては徹頭徹尾敵の大將二段を壓倒してゐた。

終に此の行に於て痛く感じたのは、我校選手の體格の悪い事である。然し諸君は氣力を以て體で負けても、氣で勝つ意氣で精進せられん事を、切に／＼に祈る次第である。

(本石記)

萩體育聯盟演武大會優勝記  
昭和九年九月十六日連日の雨もからりと晴れて萩市健兒の期待を重ねたる第三回萩中萩商萩青對抗武道大會は、午後一時より萩商業學校の運動場に場所を占めて花々しく開催せられた。藤田會長並に

(萩中) (萩商)

- 岡 浦一〇田 原
- 松 浦一〇山田彦
- 窪 中一〇弘
- 和田一〇藤原
- 山 本一〇松浦
- 杉 山一〇中村
- 大 貫一〇久保田
- 野 村一〇富田
- 伊 藤一〇中村
- 河内一〇藪木
- 田村一〇菅吉
- 鹽 山一〇藤原
- 本 石一〇中野
- 赤 川一〇多田
- 三戸一〇杉原
- 岡 一〇横木
- 松浦一〇山本
- 弘 中一〇中谷
- 和田一〇細田
- 山本一〇原
- 杉 山一〇野原

審判の注意と共に開演の幕は切つて落された。戦は本校と萩商だ。岡君、松浦君を始めとして本校柔道部の精鋭なる闘士は居並ぶ萩商面々を瞬間に於て撃滅せんとする勢である。先鋒三戸君の勝利により一回元氣大いに加はりしが、豈はからんや萩商の頑張り腰に本校闘士意の如くならず。返つて四對五にして失敗に期さうとは！本陣唯黙々として無念の涙あるのみ。斯かる成績如何なる顔あつて先生百六の生徒に見えられようか。忽ち本陣は緊張の氣分にみなぎる。唯必勝の信念を以て次の戦に全勝を期するにあるのみ。闘士の涙も此の爲の涙に外ならぬ。斯くして悲壯な決志のもとに青年對の試合の幕は切つて落された。おゝ見よ萩中健兒の意氣を、抑える投げる敗北した者は復讐。斯くして八對四にて見事に大勝した。言ふまでもなく優勝旗は再び本校の手より本校の手に。おゝなんと愉快な街路のマーチではないか。萩中柔道部よ。斯く永遠に覇者たるを期せよ！

個人勝負

- 大 貫一〇岡 崎
- 野 村一〇島 戸
- 伊 藤一〇高 洲
- 河 内一〇岡
- 田 村一〇鹽 谷
- 鹽 山一〇鬼 武
- 本 石一〇石 川
- 赤 川一〇田 中
- 三 戸一〇日 隈

(G・N記)

山口縣體育大會

柔道部

明日の番組はどうだらうか？之が一番氣になる。見ると山師、防中、徳商、鴻中何れ劣らぬ強豪揃ひ。我々は驚歎より寧ろ満足の笑を洩らした。山師は本大會隨一の優勝候補、濱寺大會へも選抜されたと言ふ様な強豪、防中これも優勝候補の一、徳商は二段を二名、以下初段と言ふ堂々たる陣を敷いてゐる。何れも本縣のNO.1だ。吾等これなら相手に取りて不足無し、山師打倒を目標に明日の作戦に餘念が無い。

すると齊藤先生が來られて大いに激励の言葉を與へて下さつた。柔道は負けても一本(參つた)とは言ふな、これが先生の言葉だった。關節を取られたら折れるまで、頭を絞められたら落ちる迄頑張れ、そこに必勝の信念が即ち萩中精神が廣く言へば武士道があるのだと。その日山口に居る諸先輩から侮辱を受けた我々先輩であり且先生である齊藤先生は悲壯だった。我々も大いに感ずる所あつて翌日の作戦を脳裡に描きつゝ夢路に入る。

翌朝いよ／＼會場へ向つた。雨はしと／＼と降りしきり大へん陰鬱な日だった。控所に待つてゐると、杉山君がとんで來た。「もう試合は始つとるぞ。」と言ふので胸をときめかしつゝ會場へ入る。ちよつと我々のメンバーを紹介して居かう大將弘中、副將岡、中堅松浦、第二先鋒和田、先鋒山本である。

山師にどの位迄肉迫し得るか我々の考へだつた。試合は始つた。然し我々は又去年の山中との試合の如く無残なる敗北をしなければならなかつた。弘中、松

浦和田は抑へられ、山本は絞められる。岡が唯一人引分けてくれただけだった。然し山本は絞められても落ちる迄頑張つた。いくら苦しくてもいたくても、苟も萩中と言ふ名でやる以上は絶対に一本とは言つてならぬと、先般松江へ行つた時先輩から順々と説かれ、又津村先生からも何回となく、又昨夜は齊藤先生から涙の中に教へられたのだ。

次は徳商。山師との試合ぶりを見てみると二對〇で負けてはゐるがなか／＼しつこい双だ。始の合圖で僕等がやつてゐると側で「どうぢや」と雷のやうな聲を聞いた。ちよつと見ると山本が向ふの先鋒をたゞきつけて居た。やつたなと思ひつゝ俺もやらうと思ふが敵は立つたと思ふとすぐ寝る。立て！立て！と言ひ立つた。さうすると審判が「無駄口一切言ふな」と言ふ。こんな試合があるもんかと腹を立てゝやつてゐると、とう／＼抑えられてしまつた。残念だが任方が無い和田も同様、弘中岡も頑張つたが、敵は立たせず惜くも引分けとなる。こゝに



敗れたりと言へ、山本君の元氣な大外刈で貴重な一點を得る事が出来た。色々他の學校の試合を見てゐる中に晝食となる。腹を拵へて外へ出て見ると、津村先生と山川先生が居られたので色々注意を受け、今度こそはやると思ひ氣込んだ。福田、阿部兩先生も來られて、我々の爲大いに力をつけて下さつた。次は防中。これは徳商とやり二對一でこれを負かして居る。少々手強いなと思つたが、この頃より試合度胸も出來、調子も出て來た防中のひそ／＼話に、「萩中は寢が弱いから五對〇で負かし、これで點を取るんだ」と。何を生意氣言ふか、今に體を辛にしてやるぞと一同元氣を出して試合に臨んだ。「どうぢや！」山本敵の先鋒を今度はセメントの上へたゞきつけてゐる然も敵はあまりの痛さによつて立たない。これを丁寧に起してやり、わざ／＼埃まではらつて、疊の上につれて行き御丁寧に又投げて一本取る。僕も今度こそ斷然攻勢に出たが、何しろ前より一層寢業に引込むので残念にも遂に引分けとなり長

蛇を逸した。弘中は敵はさすが、防中切つての猛將故終に抑へらる。和田は奮戦すれども調子悪く破る。岡、力戦終止攻勢に出づるも終に僕と同じく引分け。こゝに又山本の奮戦により貴重な一點を得る事が出来た。二對一で破れたと言へ敵の裏をかいてやつていゝ氣持だつた。斷然攻勢だつた事は事實だ。次はあまそ所鴻城のみ。先づ僕が大外刈で投げれば山本續き、岡も立派に抑へてしまひ、和田も續いて綺麗な巴技で見事決めてしまつた。弘中は敵は立技では敵はないと思つたのだらう。寢業に引つぱり込むばかりなので遂に引分けとなつた。これこそ立業と寢業の闘争だつた。こゝに堂々四點を上げ合計六點、同點の學校もあるが全十九校の中で六等。岡と僕津村先生の一方ならぬ御盡力により二段に、山本は堂々と初段に成りました。蓋し成績は微々たるもので取るに足らないのですが、萩中精神だけは充分に發揮し得たと云ふ事が大なる收穫でありました。山本が落ちても頑張り又投げた敵をわざ／＼

起して埃まではらつてやつた。たとひ現在相手は敵でも向ふが圍つてゐる時は助けてやる。そこに本當の武士道があるのである。山本君にこの記事を通じて心から感謝を禮讃の意を表しておく。君はまだ四年生だ。その精神を持つて將來大いに奮闘してもらいたい。和田、弘中君は夏休中病氣をし、練習を續んで居なかつたのは残念だつた。浦中との試合後審判席から「やはり立業は萩中だ」との漏れ言葉を聞いた時、我々はたとひ負けたとは言へ萩中傳統の立業が維持されたかと思ふと大へん嬉しかつた。こゝにちよつと下級生諸君に希望を述べて居る。諸君の中には指名者となつた事を損の様に思つていや／＼に残る者が居るが、それは大なる間違ひである。今残つて體を錬磨すると云ふ事は自分の爲になり、それが又萩中の爲にも成ると言ふのだからこんなに良い事は無い。見よ！社會の落伍者はほとんどの體の弱い奴ばかりだ。いくら勉強ばかりしたつて體の良くない者では何にもならん。キユウリの木にカボチャ

をならそうたつてだめだ。柔道がどれだけの發育に良いか左に一例を擧げて見よう。今年體の丈夫なので表彰された者岡敬太郎、二等松浦、三等弘中、皆柔道部又去年も、一昨年も柔道部から出てゐる。これを見ても分るだらう。だから諸君は指名者たる事を光榮として、不撓不屈、コツ／＼と練習する事が必要だ。とにかく練習！これを除いて強くなる方法は絶対に無い。毎日眞面目に練習して強くなる事は無い。反對に練習せずして強くなる事はこれこそ絶対にあらずだ。どうか下級生は上級生の言ふ事を聞き、上級生はこれを良く指導して、一致團結し「眞面目に絶えず」をモットーとして練習せられ、この歴史に燦たる萩中柔道部をして益々名譽あらしめられん事を切に希望して筆を置く。

(松浦記)

戦績を示す  
大將 弘 中 山 師 防 徳 鴻  
副將 岡 × 中 × 中 × 中 ×

中堅 松浦 △ × △ △  
四將 和田 △ △ △ △  
先鋒 山本 △ ○ ○ ○  
補員 杉山 野村 水戸

劍道部

松江遠征之記

平素の練習の程を試し且つ他校の長所を學ぶべく、七月二十一日松江市へ遠征の途についた。柔劍道卅數名の若者の意氣は車中に溢れてゐた。須佐驛で村岡、佐久間兩君の激勵を受け皆の意氣益々高まつた。天候益々險惡となり遂に雨となつた。晝下り松江驛に到着。萩中先輩大深氏の出向を受けた。大雨の中を車で松江商業へ向つた。六時間餘り車に揺られた疲勞を休める爲に宛られた圖書室は非常に立派だつた。學校全體が立派なものであつた。内の學校もそろ／＼改築を要するなと感ぜざるを得なかつたが、然し此廣い部屋にたつた一つしか先輩の額が、若槻禮次郎氏の額しか掲げてないのを見てはやはり數多の先輩を持つ我等は幸福だと思つた。

午後二時過ぎから試合は開始された。先づ松江商業と戈をまじえた。我がメンバー左の如し。

湯淺、山本、早川、新谷(以上五年)  
能美、森田、居田、田邊、渡邊、浮里  
平田、淺原(以上四年) 西本(五年)  
石田、小河、林(以上三年)

この試合は遂に八對七(一人引分)で破れた。朝からの疲勞に加ふるに道場が水にぬれて居てよくすべる爲に苦戦非常なる苦しい戦をした。特に面打を得意とする者には大變な障碍であつた。二回目には調子も出てきて農林を十一對五で破り、三回目には十對五(一人引分)で松江工業を破つた。本校が勝つたのは出籠手、押籠手が多く、日頃の練習が大變役立つた。しかも自分の得意の術を出して勝つたのがすくなくなかつた。負けたのでは不十分なのを打つた後を油断する爲に面を打たれたのが大部であつた。これは萩中傳道の試合に於ける大欠點であるこの點の研究を特に必要と感じた。今日の試合はこれで終つて、自動車に分乗密

屋に向ふ。

二十二日、昨日からの雨は止まず、今日は松江中學と師範と武徳殿に於て戦ふ事になつた。

中學と九對六、師範と八對七(向ふの人数不足數一名見學す)で破れた。今日は昨日に比し我が意氣が劣つてゐたの觀あつたに反し彼等は攻撃の意氣に燃えてゐた。こゝに敗因の一つがあつたと思ふ以上で遠征試合は終つた。我等は自己の欠點を矯正し、なにか一つの得意の技を持つと言ふ事が一番大切だと考へる。而して試合には半分は技術で半分は度量だこの經驗を本として練習を積み第二期開始の萩市武道三團體試合には必ず勝利を得んことを誓ひます。先輩大深氏には色々とお世話になりました事を紙上より厚くお禮申します。最後に試合は三本勝負であつた事を附けそえて筆を擱く。

(Y・S生記)

萩市體育聯盟主催第三回

萩中萩商萩聯青對抗武道大會

九月十八日此の日は我々日本人にとつ

て非常時の解消せざる限り否永久に一時も忘るゝことの出来ない記念日である。此の記念日を更に、我々の頭の中で呼起し又意義あらしむるべく九月十六日第三回武道大會が萩商グラウンドにて開催された。

此の大會に於ける我々の奮闘如何は直ちに我が母校の名譽士氣に影響する故、名譽士氣を上げるためにも亦今まで此の優勝旗を守つてくださった先輩諸氏の爲にも、必ず優勝するぞと互に誓ひ合ひ又立つ鳥は跡を濁さずの例にも似て、我等五年生は一更眞剣に協同一致して時の利を待つた。

九月十六日昨日迄の雨が小氣味よく晴れ渡つて居た。晴れたら必ず勝つぞと固く信じて居た我々の元氣に益々拍草をかけて呉れた。

戦ふべき時は遂に來た。皆元氣で萩中出發、春日神社に武運長久を祈り萩商グラウンドに到つて萩中應援團の心からの聲援や、河野先生の誠烈な訓示に選手一同は感激の涙を目に滿した。開會式に參列

つた。遂に七對八にて萩青の爲に敗られた。我々は此の調子では攻撃的に捨身で突入すれば一身を捨て、こそ浮ぶ瀨もあれ」の諺の如く必ず勝ち得と自信を持つた。

萩中

萩商

大將	村岡	小川
副將	湯淺	河上
	早川	榎田
	藤田	杉山
	山本	藤本
	吉賀	藤原
	新谷	藤田
	森本	田中
	西本	水津
	白神	來島
	能美	石田
	田邊	仙崎
	森田	田中
	平田	岡中
先鋒	浮里	大庭

し、控所に退く時必勝の信念を持つて公明正大に戦はんと誓ふ。先ず最初に萩中對萩聯青であつた。我々は元氣で一本技で行かんと自信を持つて居たに拘らず、聯青方は人数の入替等で意氣に於いてすでに萩中は彼等を抑へて居た。戦況を示すと

萩中

萩青

大將	村岡	小田
副將	湯淺	片山
	早川	原
	藤田	横山
	山本	西郷
	吉賀	小方
	新谷	原田
	森本	藤野
	西本	神崎
	白神	池田
	能美	萬屋
	田邊	小野
	森田	岸下
	平田	田中
先鋒	浮里	藤原

浮里難なく敵を居るや意氣益々昇り、森田も自分の身體の大なるを利用し、益々攻撃的に肉迫し榎田中を居つた。次の三將力戦したが及ばず終に惜敗した、が西本、森本、新谷、吉賀、山本、藤田等攻撃又攻撃非常に敵に肉迫し皆敵をなで切りに居つた。この時あたかも後の方では「どすん」「一本」それに従つて萩中側に喜びの拍手が起りこちらでは「ぼん」と輕快な音、次いで「勝負それまで」と審判の聲と共に萩中側の喜びの拍手起り、柔道、劍道の拍手が變るがはる又一度に起つたり萩中側の喜びはもう筆舌に絶して居た。之れ又母校愛の發露であつた。藤田の面によく機先を制し敵を眞二つにした感があつた。早川、湯淺力戦苦闘早川の面はもう少し飛込めば美事に入つて居るのであるが、運悪く榎田に出甲手を打たれ残念の涙を呑んだが、村岡の飛込脚は終に小川に止めを刺し、又萩中が萩商に止めを刺した。斯くして九對六にて完全に壓へた。

合計點を合はすと萩中二〇點萩商十三

點森青十二點。あゝこゝに我々は優勝の榮冠を戴き得た。此れ場所が運動場に板をしひてあるのみ青天上で道場との様子が大いに異つて居たに拘らず、選手常に機先を制した事や森中の應援團の熱烈なる應援や、河野先生誠烈なる訓示は我々をして更に發憤せしむる所があつた爲に、我々は十分岡部、大村兩先生から日頃より授かつた實力を遺憾なく發揮し得た事に歸す。

村岡が會長の所に優勝旗及びカップを受取りに行つた時に我々は唯感涙にむせぶのみだつた。我々は今まで優勝旗を仰いだこと數回に及んだが、我々の實力を努力によつて獲得したのは最初であつた後継者諸君と長らく森中に保存されんことを切望しつゝ擲筆。(M・N生)

山口縣體育大會

紺青の空秋風蕭々九月二十九日、諸先生始め、我が森中選士は一同の拍手裡に本校の威力を發揮すべく山口に向つた。到着後剣道部は明日の試合場なる白石小學校の講堂を見宿に歸つた。各部の部屋

には齊藤先生の書かれた「必勝の信念」の五文字が掲てあり、いやが上にも選士の意氣を鼓舞しそして明日の奮闘を約して床についた。

明ければ九月三十日小雨が降り、あまりよい天気ではなかつた。此れは一種の不安を私に感ぜしめた。

今年の榮冠を獲得せんものと集ふ二十六校の選士皆意氣充滿せり。試合は例年の如く東西南北に分れ本校は西の部で七校と組した。選士は戦つた併し神はいつまでも我等に運を與へなかつた。西の部で四等(十六點)で遂に敗れようとは！西部で一等は柳商(二十一)東部では宇中(二十四)南部では山師(二十二)北(部は山中(十七)であつた。

而して森中の戦跡を左の表にて示さう。

湯淺利夫	中農	岩日	德商	柳大
村岡統一	中農	岩日	德商	柳大
森田興行	中農	岩日	德商	柳大
山本正次	中農	岩日	德商	柳大
新谷幸治	中農	岩日	德商	柳大

一六四

△敗  
○勝  
盡ふに本校は元氣が足りない技量の點から見れば他校に劣つてはゐない、要するに試合が下手である。此れが敗れた主因であらう。練習の際元氣そのものゝ如く行いだらゝしたものは排斥すべきである。此の點に深く注意して練習し來る年には榮ある優勝の地位を得られん事を願つて此の筆を置く。(能美記)

辯論部

昭和九年春季辯論小會

會場、演題等左記の如し。

第一日	五月二日	第六時限
第二日	五月三日	第六時限
第三學年	合併教室	
第四學年	講堂	
第二學年	講堂	
第一學年	柔道場	
第五學年	講堂	

委員 林久生  
松尾美男  
鹽山寛美

大日本精神 兼田友一  
紳名について 辻田 稔次  
フアッシュヨ待望 津野 一二  
非常時に備ふべき森中健兒の覺悟 五ノ一 佐久間鐵太郎  
中學生時代 五ノ二 白藤 孝亮  
閉會の辭 委員 三村 巖

第四學年

閉會の辭 委員 淺原 昌祐  
國史に選れ 一組 弘中 五男  
英語暗誦 同 石村 豊徳  
同 同 三井 三郎  
騎兵は敗る 二組 山本 長久  
英語暗誦 同 森 桂一  
同 同 山中 健一  
黒潮 三組 伊藤 輝典  
英語暗誦 同 安野 五郎  
同 同 中村 五郎  
時は今だ 一組 淺原 昌祐  
英語暗誦 同 福田 寛雄  
同 同 淺野 寛力  
覺悟はよいか 二組 長谷川 道隆  
閉會の辭 委員

第三學年

閉會の辭 委員 堀 啓一  
青年よ志を立てよ 堀 啓一  
立憲的紳士道 吉村 保時  
空襲と防空 一組 杉 春二  
名器を毀つ 一組 能谷 正雄  
禮を得難く逸し易し 三組 田村 正好

滿蒙を凝視して 三組 田村 正好

第一學年

閉會の辭 委員 新谷 勇二  
謙性的精神 新谷 勇二  
些細なことに注意せよ白井 輝夫  
滿洲の匪賊について 三原 莊作  
新時代來らんとす 福田 賢雄  
英文暗誦 同 松浦 啓雄  
日本刀について 久芳 一人  
負けても名選手 木下 芳雄  
過失について 佐伯 哲郎

英文暗誦 明山 清觀  
時計を見るな 増山 喜一  
感謝 太田 頼久  
正眞 西村 信海  
人は何のために生れたか 岡 隆知

閉會の辭 委員 岡 隆知

第一學年

閉會の辭 委員 森重 龍馬  
正しく坐れ 一組 森重 龍馬  
カーネギー 同 内山 博  
吾等の覺悟 同 馬屋前 貢  
一言萬金 同 伊藤 祐信  
胡瓜と靴 二組 石津 利作  
ワシントン逸話 同 石津 利作

二、うそつき 同 岡 忠雄  
一、伊勢神宮 同 波多野 保  
一、組忽揃ひ 三組 椋木 行信  
一、長い名 同 河野 薫  
一、我等の務め 同 加藤 恒次  
閉會の辭 委員 岡 隆知

弓道	水泳	褒賞	器具	球技	競技	理科	地歴
岡森庭本 教教諭諭	池齊山 教教諭諭	森兒山野 教教諭諭	田八岩福野安久東玉 教教諭諭	池山齊山齊池 教教諭諭	中野村岡山 教教諭諭	岡山 教諭	岡山 教諭
佐宮上 伯原田 安一 一修男	山吉荒 本田川 正孝 次二勉	池弘西 田中本 吉 彌寛實	能田中村藤山 美中川田本崎 忠邦修司盛内 廣藏二郎人匠	河本秋 内石村 義獨 助芳明	吉佐山 賀伯口 送貢實	河本秋 内石村 義獨 助芳明	河本秋 内石村 義獨 助芳明
熊百池 野澤田 治親脩 郎雄亮	柴山弘 田中中 健五 正一夫	森竹阿 澤内武 五秀 郎雄博	田三水隅 邊田戸 富隆邦 平介男	三河田 好村村 得定由 三郎一之	田長淺 村野野 精征 作逸力	末香杉 永川原 朝大 智政泰	末香杉 永川原 朝大 智政泰
中山 村島根 百正忠 合男信雄	田小新 村橋各 正安保 次好郎治	有松豊 田本田 武爲 靖壽之	宗田杉 實村 正晴春 明道二	豊日杉 田溪野 安毅三 春負男	岡藤苑 村田原 大日和 一出平	岡吉大 崎村藤 寛安 人時威	岡吉大 崎村藤 寛安 人時威
山植吉 村田松 博 亮伸隆			太大新 田藤谷 頼三勇 久男二	師河林 井村 淳利良 吾一夫	平大植 川野村 秀政一 夫雄良	林久三 保原 克一莊 己郎作	林久三 保原 克一莊 己郎作
三三津 輪井野 鐵俊 年猛郎			前國中 田重村 久敏雅 美彦光	岡中田 村村中 大保 清郎多	吉三佐 村好木 弘誠 章之太	羽岡内 倉山 伯忠 士雄博	羽岡内 倉山 伯忠 士雄博

畫道	書道	辯論	雜誌	柔道	劍道	副會長	會長
水沼 教諭	八岡木 澤部 教諭	岡三 庭上 教諭	津久 村永 教諭	山津 川村 教諭	大岡 村部 教諭	河野 教諭	河野 教諭
原中德 野久 德博 太 郎造夫	三白林 村藤 孝久 巖亮生	吉津津 津野田 孝一 甫二次	和松杉 田浦山 二 滿郎	湯新早 淺谷川 利幸正 夫治毅	第五學年	第五學年	第五學年
吉福石 屋田村 竹寛豊 治雄德	伊長淺 谷東川 原輝 道昌 典隆佑	末安田 永野中 一正 雄明	野山中 村本村 重長五 郎人郎	阿森能 部田美 吉與陽 人行一	第四學年	第四學年	第四學年
竹仁中 内保本 周光 二夫茂	小上山 河利根 文忠 博夫雄	堀村熊 上谷 啓英正 一俊雄	阿赤伊 部川藤 光大 一尙馬	石玉林 田井 知惣誠 行六一	第三學年	第三學年	第三學年
山山阿 村根武 穂一久 男夫平	伊藤杉 藤田山 信哲順 海郎行	彌兼澤 谷富本 祐忠良 生行秋	岡藤福 田山田 昭賢 清次雄	第二學年	第二學年	第二學年	第二學年
吉白田 富石中 敏貞 郎明雄	松吉森 岡田重 見成龍 雄三馬	加波伊 藤野東 垣祐 次保信	古水河 谷津野 佐宗 郎明圓	第一學年	第一學年	第一學年	第一學年

昭和九年度校友會委員

昭和八年秋季辯論大會  
十一月二十日午前十時から講堂で秋季  
辯論大會を開催した。今年には前から練習  
してゐた詩吟も併せて發表することにし  
たので一入の盛況であつた。午後三時に  
終つたが其中成績優秀で賞を得たものは  
左記の十一名であつた。

辯論の部	詩吟の部
一等 三ノ一 淺原昌祐	一等 三ノ三 水戸邦男
二等 五ノ一 伊東美一	二等 四ノ二 田邊實彦
三等 四ノ二 白藤孝亮	三等 五ノ三 小河伍一
四等 三ノ三 伊藤輝典	四等 五ノ二 林幸男
五等 四ノ一 山下誠一	五等 一ノ三 厚東雅夫
同 五ノ二 柳井清	

編輯余録

一本號は第三十五周年記念號としたから大分部厚なものになつた。放送室は全部の先生の額を描へた。こんな壯觀は滅多に見られない事で必ず喝采を博する事と思ふ。

一雜誌校正中に本誌の編輯係をして居られた津村先生が郷里の中學校に轉任された。先生は文才あり、歌才あり、句才あり、往くとして佳ならざるなき達人であつた。雜誌部にとつても寂しい事である。十一月月中旬に元本校の教諭であつた伊藤徹成先生が逝去された。謹しんで哀悼の意を表す。

昭和八年度校友會費收支決算報告

經常費(收入)		金七拾八圓七拾六錢也		開校式
一金參千六百四拾參圓八拾參錢也	總收入高	金五拾四圓參拾錢也	卒業式	
內 譯		金五拾四圓四拾貳錢也	弓道部	
金六百參拾八圓四拾六錢也		金五拾六圓四拾五錢也	園藝部	
金貳千參百貳拾九圓貳拾五錢也		金貳拾五圓貳錢也	圖書部	
金貳百拾四圓拾七錢也	生徒會費	金五百七拾八圓五拾七錢也	雜費	
金百六拾四圓也	職員會費	金貳百拾圓也	借入金年賦償還	
金百拾圓六拾參錢也	校友會入會金	差引殘金六百貳拾五圓六拾八錢也	翌年度へ繰越	
金拾八圓參拾貳錢也	雜收	基金之部(收入)		
金百六拾九圓也	預金利息	一金千五百參拾參圓五拾五錢也	總收入高	
支 出	附金	內 譯		
一金參千拾八圓拾五錢也	劍道部	金千百圓也	債券	
金貳百七拾四圓參拾八錢也	柔道部	金參百四拾九圓八錢也	前年度より繰越	
金貳百四拾四圓貳拾壹錢也	球技部	金七拾圓六拾五錢也	債券利息	
金四百五拾八圓四拾四錢也	球技部	金拾參圓八拾貳錢也	預金利息	
金貳百七拾八圓五錢也	水泳部	支 出		
金百參拾四圓六拾五錢也	雜誌部	一金ナシ		
金百七拾七圓參拾九錢也	賞紙代	差引殘金千五百參拾參圓五拾五錢也	翌年度へ繰越	
金貳百四拾貳圓貳拾貳錢也				
金百六拾參圓貳拾九錢也				

附 録

噫 江 本 少 佐

憶 江 本 少 佐

故陸軍歩兵少佐江本敏武氏は本校第十四回卒業生にして、陸軍士官學校を出て長く軍籍にありしが、昭和八年一月廿九日朔風肌を劈く北滿の地に派遣せられ、同年十一月二十五日瞻榆縣二龍山附近の匪賊討伐に於て花々しくも名譽の戦死を遂げられたり。

悲しき遺骨は昭和九年一月下旬懐しき故國に凱旋し水戸歩兵第二聯隊の葬式を終りて二月十一日故山に歸り十八日には當市明倫尋常高等小學校講堂にて萩市聯合團體主催の下に盛大なる慰靈祭催されたり。

山行かば草むす屍大君の爲に身は北滿の花と散り、死して護國の鬼となる、男子の本懐これに如かんや謹しみて衷心より哀悼の意を表す。

履 歴

江 本 敏 武  
明治二十八年四月二日生

- 一、大正四年十二月一日 士官候補生トシテ歩兵第六十三聯隊ニ入隊
- 一、同 五年十二月一日 陸軍士官學校へ入校
- 一、同 七年五月二十七日 陸軍士官學校卒業
- 一、同 年六月三日 見習士官
- 一、同 年十二月二十五日 任歩兵少尉
- 一、同 年同月同日 補歩兵第六十三聯隊附
- 一、同 八年二月二十八日 叙正八位
- 一、同 九年三月一日 戸山學校へ入校
- 一、同 年七月十日 同校卒業
- 一、同 十一年三月六日 任歩兵中尉
- 一、同 年三月二十日 叙從七位
- 一、同 十二年十二月十一日 陸軍歩兵學校へ入校
- 一、同 十三年三月二十八日 同校修業

- 一、大正十三年八月二日 免本職補獨立守備隊第二大隊附
- 一、昭和二年四月十五日 叙正七位
- 一、同 年七月二十六日 免本職補歩兵第六十三聯隊附
- 一、同 三年六月三十日 免本職補歩兵第二聯隊附茨城縣結城郡結城農學校服務ヲ命セラレ
- 一、同 年七月三十日 叙勳六等授瑞寶章
- 一、同 年八月十日 任歩兵大尉
- 一、同 七年二月二十七日ヨリ同年三月三日迄歩兵第二聯隊補充隊ニ在リテ動員業務ニ從事ス
- 一、同 年五月十六日 叙從六位
- 一、同 年十二月七日 被免歩兵第二聯隊附補歩兵第二聯隊中隊長
- 一、同 年同月同日 歩兵第二聯隊留守隊中隊長被仰付
- 一、同 八年一月二十九日 編成改正ニ依リ北滿派遣ノ爲メ同三十日水戸屯營出發
- 一、同 年一月三十一日 釜山上陸同五日海倫ニ着任
- 一、同 年三月十八日 海倫西方三里惠宇ニ紅槍隊匪賊百五十名を岡本大隊長指揮ノ許ニ討伐
- 一、同 年十一月二十五日 瞻榆縣ニ龍山附近ノ匪賊討伐該地附近ノ戰鬪ニ於テ戰死
- 一、同 年十一月二十五日 任歩兵少佐
- 一、同 年同月同日 叙正六位

昭和九年十二月十日印刷  
昭和九年十二月十五日發行

編輯兼  
發行者 山口縣萩市 須子五郎

印刷者 山口市後河原一五 小澤彬啓

印刷所 山口市先賢堂前 山口響海館

電話二一三番

發行所 山口縣萩市 山口縣立萩中學校校友會



書原壹

會友校校學中萩立縣口山